

船ヶ谷遺跡

— 3次調査地 —

1999

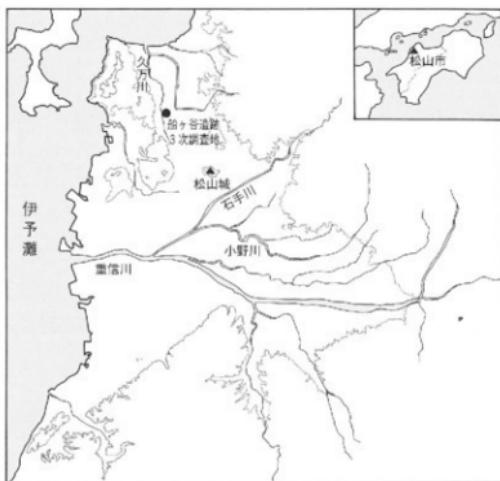
松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

ふな が たに
船ヶ谷遺跡

— 3次調査地 —



1999

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター



卷頭図版 1 S E 301の構造（西より）

序

松山市は、古代より瀬戸内海航路の要地として、西日本地方の交通・交易に深く係わってきました。松山市には、市のシンボルとして市民の方々に親しまれています松山城をはじめとして、数多くの文化財が残されていることでも知られ、愛媛県下を代表する縄文時代晩期から古代にかけての遺跡が多く発掘されています。

船ヶ谷遺跡は、松山平野西北の低地帯に位置する遺跡です。発掘調査は既に3次を数え、縄文時代晩期から中世までの複合遺跡であることが明らかになってきています。

今回の調査では、南北朝から室町時代の建物群、柵列や井戸、これらを包む様に区画された溝等を確認することができました。さらに、縄文時代晩期から弥生時代終末の自然流路を調査しました。これらは、当時の集落の景観を復元する上で貴重な資料となりました。

こうした成果をあげられましたのは、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のたまものであり、厚くお礼を申し上げます。今後とも埋蔵文化財の発掘調査に対する一層のご協力をお願い申しあげます。

本書が、埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、文化財保護・生涯教育の向上に寄与できれば幸いです。

平成11年9月30日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理事長 中村時広

例　　言

1. 本書は、財団法人松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターが平成10年度に実施した愛媛県松山市安城寺町592-1 外6筆所在遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で使用した標高値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北で、磁北から東偏6度21分を測る。
3. 遺構は、呼称を略号で記述した。自然流路：S R、掘立柱建物：掘立、井戸：S E、溝：S D、上坑：S K、横列：S A、柱穴：S P、性格不明遺構：S Xである。さらに、遺構の呼称は、Ⅱ区S E 1はS E 201、Ⅲ区S E 1はS E 301とし、算用数字の左側は区名をあらわし、右側は各調査区内における遺構番号をあらわす。
4. 遺構測量図・遺物実測図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
5. 本書で使用した遺構実測図は、主に加島次郎・大森一成・伊藤健司（現、福井県埋蔵文化財センター）が作成した。浄写は加島・大森・伊藤・大野裕子がおこなった。
6. 本書で使用した遺物実測図の作成と浄写は、加島・大野・伊藤・田崎貞理・森田利恵がおこなった。
7. 本書で使用した遺構写真は、大西朋子・加島が撮影し、遺物写真は大西が撮影した。
8. 調査においては、愛媛大学 下條信行・松原弘宣・川岡勉・田崎博之・吉田広・三吉秀充、愛媛県埋蔵文化財調査センター 大山正風・中野良一・柴田昌児・柴田圭子・西川真美の諸先生方から貴重なご指導を賜った。記して感謝申し上げます。
9. 本書の執筆は第Ⅶ章 I を山本健一、他を加島次郎が担当した。
10. 保存処理と科学分析では、井戸から出土した曲物の保存処理は（財）元興寺文化財研究所出土木製品保存処理室、樹種同定は同研究所研究開発室に調査を委託した。
11. 土の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』(1967) に準拠した。
12. 本書の図集は、梅木謙一・水口あをいの協力のもと、加島がおこなった。
13. 本書にかかわる図面・遺物は、松山市立埋蔵文化財センターで収蔵保管している。
14. 製版 カラー図版-175線、白黒図版-175線
印刷 オフセット印刷
用紙 カラー図版-ニューVマット菊〈93〉5使用
白黒図版-ニューVマット菊〈93〉5使用

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
1	調査に至る経緯	1
2	調査・刊行組織	1
第Ⅱ章	遺跡の概要	
1	遺跡の立地	3
2	歴史的環境	3
第Ⅲ章	調査の概要	
1	調査の経過	6
2	調査区の設定	7
3	層位	9
4	遺構と遺物	21
第Ⅳ章	縄文時代～弥生時代の記録	
1	自然流路	22
第Ⅴ章	中世の記録	
1	掘立柱建物址	27
2	井戸	37
3	溝	45
4	柵列	52
5	土坑	54
6	性格不明遺構	58
7	柱穴	59
8	包含層	61
第VI章	近世以降の記録	
1	掘立柱建物址	62
第VII章	S E 301における保存処理	
I	曲物の取り上げ	74
II	保存処理	76
第VIII章	S E 301における科学分析	
I	樹種同定	81
第IX章	調査の成果と課題	84

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図(1) (縮尺 1 / 5,000)	2
第2図	周辺遺跡分布図 (縮尺 1 / 50,000)	4
第3図	現地説明会	7
第4図	調査地位置図(2) (縮尺 1 / 2,000)	7
第5図	調査地区割り図 (縮尺 1 / 800)	8
第6図	I 区西壁土層図 (縮尺 縦 1 / 40 横 1 / 60)	11
第7図	II 区北壁・東壁土層図 (縮尺 縦 1 / 40 横 1 / 60)	15
第8図	II 区南壁・III 区東壁土層図 (縮尺 縦 1 / 40 横 1 / 60)	17
第9図	遺構配置図 (縮尺 1 / 400)	19
第10図	S R201測量図 (縮尺 1 / 200 縦 1 / 60 横 1 / 100)	23
第11図	S R201出土遺物実測図(1) (縮尺 1 / 3)	24
第12図	S R201出土遺物実測図(2) (縮尺 1 / 3・2 / 3)	25
第13図	S R301測量図 (縮尺 1 / 200・1 / 100)	25
第14図	S R301出土遺物実測図 (縮尺 2 / 3)	26
第15図	掘立202測量図 (縮尺 1 / 60)	28
第16図	掘立204測量図 (縮尺 1 / 60)	29
第17図	掘立204・か (S K202) 測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1 / 10・1 / 3)	30
第18図	掘立205・S A202測量図及び掘立205出土遺物実測図 (縮尺 1 / 60・1 / 3)	32
第19図	掘立206・S A203・S A204測量図 (縮尺 1 / 60)	33
第20図	掘立206・貯蔵穴 (S K204) 測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1 / 10・1 / 3・1 / 4)	34
第21図	掘立207測量図 (縮尺 1 / 60)	35
第22図	掘立208測量図 (縮尺 1 / 60)	36
第23図	掘立301・掘立302測量図 (縮尺 1 / 60)	38
第24図	S E201測量図 (縮尺 1 / 20)	39
第25図	S E201断面測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1 / 20・1 / 3・1 / 2)	40
第26図	S E301測量図 (縮尺 1 / 20)	41
第27図	S E302測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1 / 20・1 / 3)	43
第28図	S E303測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1 / 20・1 / 3)	44
第29図	S E304測量図 (縮尺 1 / 20)	45
第30図	S D201測量図 (縮尺 1 / 160・1 / 20)	46
第31図	S D201出土遺物実測図(1) (縮尺 1 / 3・1 / 2)	47
第32図	S D201出土遺物実測図(2) (縮尺 1 / 3)	48
第33図	S D202・S A201測量図 (縮尺 1 / 60)	49
第34図	S D202出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3・2 / 3)	50
第35図	S D203測量図 (縮尺 1 / 60)	51
第36図	S D203出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3)	52

第37図	S D204測量図（縮尺1／160・1／20）	53
第38図	S A301測量図及び出土遺物実測図（縮尺1／100・1／3）	55
第39図	S K201測量図（縮尺1／60）	56
第40図	S K201出土遺物実測図（縮尺1／3）	57
第41図	S K203測量図及び出土遺物実測図（縮尺1／20・1／3）	57
第42図	S X201測量図（縮尺1／60）	58
第43図	S X201出土遺物実測図（縮尺1／3・1／2）	59
第44図	S P231測量図及び出土遺物実測図（縮尺1／10・1／3）	60
第45図	I区包含層出土遺物実測図（縮尺1／3）	61
第46図	II区包含層出土遺物実測図(1)（縮尺1／3）	62
第47図	II区包含層出土遺物実測図(2)及びIII区包含層出土遺物実測図（縮尺1／2・1／3）	63
第48図	掘立201測量図（縮尺1／60）	64
第49図	遺構の半数据削除状況	74
第50図	遺構半数後の曲物検出状況	74
第51図	曲物Aの梱包作業	75
第52図	曲物B・Cの梱包状況	75
第53図	曲物B・C搬入時	77
第54図	曲物B分離後	78
第55図	曲物C分離後	78
第56図	曲物Bクリーニング後	78
第57図	曲物Bケビキの様子	79
第58図	曲物Cクリーニング後	79
第59図	曲物Cケビキの様子	79
第60図	曲物C変色部分	80
第61図	養生	80
第62図	徒手による切片作製	82
第63図	曲物A・B・Cの木材組織	83

表 目 次

表 1	船ヶ谷遺跡 3次調査の土層対応関係	9
表 2	自然流路一覧	65
表 3	掘立柱建物址一覧	
表 4	井戸一覧	
表 5	溝一覧	66
表 6	柵列一覧	
表 7	土坑一覧	
表 8	性格不明遺構一覧	
表 9	S R201出土遺物観察表 土製品	
表10	S R201出土遺物観察表 土製品	67
表11	S R201出土遺物観察表 石製品	
表12	S R301出土遺物観察表 石製品	
表13	掘立204出土遺物観察表 土製品	
表14	掘立205出土遺物観察表 土製品	
表15	掘立206出土遺物観察表 土製品	68
表16	S E201出土遺物観察表 土製品	
表17	S E201出土遺物観察表 鉄製品	
表18	S E302出土遺物観察表 土製品	
表19	S E303出土遺物観察表 土製品	69
表20	S D201出土遺物観察表 土製品	
表21	S D201出土遺物観察表 鉄製品	70
表22	S D202出土遺物観察表 土製品	
表23	S D202出土遺物観察表 石製品	
表24	S D203出土遺物観察表 土製品	
表25	S A301出土遺物観察表 土製品	
表26	S K201出土遺物観察表 土製品	71
表27	S K203出土遺物観察表 土製品	
表28	S X201出土遺物観察表 土製品	
表29	S X201出土遺物観察表 鉄製品	
表30	S P231出土遺物観察表 土製品	72
表31	I 区包含層出土遺物観察表 土製品	
表32	II 区包含層出土遺物観察表 土製品	
表33	II 区包含層出土遺物観察表 鉄製品	73
表34	III 区包含層出土遺物観察表 土製品	

写真図版目次

- 巻頭図版 1 S E301の構造（西より）
- 図版 1 1 調査地遠景（南西上空より）
2 調査前（南東より）
- 図版 2 1 I区完掘状況（南東より）
2 I区西壁（南東より）
- 図版 3 1 II区完掘状況（南東より）
2 S R201南北ベルト（西より）
- 図版 4 1 S R201における中層・下層遺物出土状況（北より）
2 S R201完掘状況（北東より）
- 図版 5 1 II区北半部における中世期の遺構完掘状況（南より）
2 掘立204・戸（S K202）における上鍋出土状況（西より）
- 図版 6 1 II区北西部掘立柱建物群検出状況（西より）
2 掘立206・上坑（S K204）における大壺出土状況（南より）
3 掘立206を構成するS P251の根石検出状況（北より）
- 図版 7 1 掘立202・S E201・S D201・S D203の配置（南東より）
2 S E201検出状況（南より）
- 図版 8 1 S E201完掘状況（南より）
2 S E201貿易陶磁器出土状況（西より）
3 S E201の構造（東より）
- 図版 9 1 S D201遺物出土状況（東より）
2 S D201遺物出土状況（南西より）
3 S D203遺物出土状況遠景（南西より）
4 S D203遺物出土状況近景（南より）
- 図版10 1 S X201完掘状況（南より）
2 S P231遺物出土状況（南東より）
3 S P231炭化材検出状況（南より）
- 図版11 1 III区完掘状況（南西より）
- 図版12 1 S E301曲物出土状況（南より）
2 S E301完掘状況（西より）
3 S E301断面上層（西より）
- 図版13 1 S E302完掘状況（西より）
2 S E303完掘状況（東より）
3 S E303断面土層（東より）
- 図版14 1 S R201出土遺物①
- 図版15 1 S R201出土遺物②・S R301出土遺物

- 图版16 1 挖立204出土遗物 · S K202出土遗物 · 挖立205出土遗物
- 图版17 1 挖立206出土遗物 · S K204出土遗物 · S E201出土遗物
- 图版18 1 S D201出土遗物①
- 图版19 1 S D201出土遗物② · S D202出土遗物 · S D203出土遗物
- 图版20 1 S K201出土遗物 · S K203出土遗物 · S X201出土遗物
- 图版21 1 S P231出土遗物
- 图版22 1 I 区包含层出土遗物 · II 区包含层出土遗物 · III 区包含层出土遗物

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯

1997（平成9）年11月18日、えひめ生活協同組合より、松山市安城寺町592-1外6筆における店舗建設にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課と呼称する）に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「154 久枝遺物包含地」内にある。周知の遺跡として知られる申請地周辺は、これまでに発掘調査が数多く実施されている（第1・2図）。北西500mには、1975年に愛媛県教育委員会によって発掘調査が実施された船ヶ谷遺跡1次調査地（阪本1984）がある。自然流路からは流木とともに縄文時代晩期の土器、石器、編み物が出土している。

そこで、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲とその性格を確認する目的で、文化教育課では、1997（平成9）年12月10日～12日に試掘調査を実施した。その結果、遺構と遺物が確認され、縄文土器、須恵器、上師器が出上るとともに、自然流路、土坑、柱穴を検出した。

えひめ生活協同組合・文化教育課・（財）松山市生涯学習振興財團 埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センターと呼称する）の三者は、確認された遺跡に対して協議をおこない、土地開発で失われる遺構・遺物について記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、調査地及び周辺地域の集落構造の解明を主目的とし、埋蔵文化財センターが主体となり、えひめ生活協同組合の協力のもと、1998（平成10）年4月1日に開始した。

2. 調査・刊行組織

本調査の調査・刊行組織は以下の通りである。（平成11年9月30日現在）

松山市教育委員会 教育長	池田尚輝
事務局長	岡上和敬
次長	森脇 将
次長	赤星忠男
文化教育課課長	松平泰定
(財) 松山市生涯学習振興財團	
理事長	中村時広
事務局長	二宮正昌
事務局次長	河口雄三
埋蔵文化財センター	
所長	河口雄三
次長	田所延行
調査係長	田城武志
調査主任	栗田正芳（文化教育課職員）
調査担当	高尾和長 加島次郎 大西朋子

はじめに



第1図 調査地位置図(1) ($S = 1 : 5,000$)

第Ⅱ章 遺跡の概要

1. 遺跡の立地

本調査地は、松山市安城寺町に所在する。松山市の位置する松山平野（道後平野）は、四国北西部の高縄半島の南西基部に開けた複合扇状地性の平野である。平野の中央南よりを重信川が西流する。右岸側からは石手川・小野川・悪社川が、左岸側からは表川・押志川・砥部川などの支流が合流し、重信川は伊予灘に注いでいる。平野の北西部には太山寺山塊が展開しており、この山塊の東には和気・堀江の海岸にかけて北北西に細長い地溝性の低地帯が伸びている。太山寺山塊よりの低地帯には、久万川が蛇行しながら北流して堀江湾に注いでいる。調査地は久万川右岸の標高8mに立地する。

2. 歴史的環境

本調査地周辺の歴史的環境を概観する（第1・2図）。資料が多く検出されるのが、縄文時代晚期後半段階である。船ヶ谷町の船ヶ谷遺跡（阪本1984）と太山寺町の大潤遺跡（栗田1989）からは、多量の突帯文土器が出土しており、当該期の土器編年を考える上で重要な資料として位置付けられている。大潤遺跡では沼津地縁辺に形成された遺物包含層から突帯文土器とともに、壺・石臼・石鎌が出土しており、当地周辺で水田遺構を含めた生産遺跡が展開するものと理解されている。

弥生時代以降、低地部に展開した集落遺跡は現在のところ確認例が少ない。弥生期の遺物が出土した遺跡は、低地部や低地部を東方に上った河岸段丘上、丘陵緩斜面において散見される。低地部に立地する山越遺跡2次調査地（梅木・武正1993）では、弥生前期中葉の木製鍬と柳葉形磨製石鏃が出土した。丘陵緩斜面に立地する鶴が峠遺跡（西尾1986）は前期後半の土坑群が検出された遺跡で、土坑からは一括性の高い土器資料が出土している。また、地溝性の低地帯を挟んで東に展開する高縄山系の分岐丘陵南裾の微高地では、吉藤宮ノ谷遺跡（栗山1989）から後期の壺棺が出土している。これらの調査成果からは、弥生時代における居住域と墓域の主体は微高地上に、生産域は低地部に展開していたことがうかがえる。

古墳時代では、船ヶ谷遺跡2次調査地（高尾1999）では、前期～中期の自然流路が検出され、完形品を含む多量の土師器が出土している。さらに、近年調査された大潤遺跡3次調査地では、前期初頭の集落が確認され、堅穴住居址7棟、上坑2基、土器窯1基、自然流路1条が検出された。太山寺山塊南東端では5世紀末～6世紀初頭の古墳が調査されている。船ヶ谷向山古墳（池田・宮崎1989）では全長30mをこえる前方後円形で、墳丘に円筒埴輪と形象埴輪が伴う。西側括れ部で出土した埴輪と須恵器は墳丘上で実施された葬送儀礼を示す遺物群として理解できる。船ヶ谷三ツ石古墳（梅木・平岡1993）では、周溝内からは高杯・壺・短頸壺が良好な状態で出土し、供獻土器に関わる資料になっている。太山寺山塊北端に近い勝岡町の高月山古墳群（宮崎1988）は、4世紀末～5世紀初頭の古墳群で、箱式石棺を内部主体とする小型長方墳で構成される。1号墳は、墓坑掘り方内から鉄剣・鍬先・鉄斧が、周溝内から底部穿孔の土師器壺と鉄鏃が出土し、当地域では古い段階の古墳として認識されている。また、山塊の南端には鶴が峠古墳群（西尾1986）、北山古墳群、東山古墳群が分布する。なお、太山寺山塊に展開する古墳に関連した集落は稀薄であり、集落と墳墓との関係は不明な部分が多い。

古代の遺構は、調査例が数少なく、座拝坂遺跡（松村他1993）で10世紀の土坑墓が確認されている

遺跡の概要



- ①船ヶ谷遺跡 3次調査地
- ②船ヶ谷遺跡
- ③大瀬遺跡
- ④大瀬遺跡 3次調査地
- ⑤山越遺跡 2次調査地
- ⑥吉藤宮ノ谷遺跡
- ⑦松山大学構内遺跡
- ⑧庵押坂遺跡
- ⑨船ヶ谷遺跡 2次調査地
- ⑩船ヶ谷向山古墳
- ⑪高月山古墳群
- ⑫庵華寺舟形石棺
- ⑬太山寺古墳群
- ⑭鶴が峰古墳群
- ⑮北山古墳群
- ⑯東山古墳群
- ⑰船ヶ谷三ツ石古墳

第2図 周辺遺跡分布図 ($S = 1 : 50,000$)

歴史的環境

にすぎない。中世の遺跡には、14~15世紀の姫原遺跡（相原1998）があり、溝や土坑が確認されているにとどまる。

このように、松山平野北西部における遺跡の展開を概観すると、縄文時代晚期~古墳時代後期の資料には土器の編年研究の基礎資料として位置付けられるものが数多くあり、一方、古代以降は調査事例が少ないと分かる。

参考文献

- 阪本安光 1984 『松山市・船ヶ谷遺跡』 愛媛県教育委員会
- 栗田茂敏 1989 「大河遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』 松山市教育委員会
- 梅木謙一・武正良浩 1993 「山越遺跡2次調査」『山越・久万ノ台の遺跡』 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 西尾幸則 1986 「鶴が峰遺跡」『愛媛県史資料編考古』愛媛県史編さん委員会
- 栗田茂敏 1989 「吉野宮ノ谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』 松山市教育委員会
- 松村淳・梅木謙一・宮内慎一 1993 「庭洋坂遺跡の調査」『和気・堀江の遺跡』 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高尾和長 1998 『船ヶ谷遺跡2次調査』 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏・吉岡和哉 1998 「大河遺跡3次調査」『現地説明会資料』 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 池田洋一・宮崎泰好 1989 「船ヶ谷・谷向川古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』 松山市教育委員会
- 梅木謙一・平岡寅美 1993 「船ヶ谷三ヶ石古墳の調査」『和気・堀江の遺跡』 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 宮崎泰好 1988 『高月山古墳群調査報告書』 松山市教育委員会
- 西尾幸則 1986 「鶴が峰古墳群」『愛媛県史資料編考古』 愛媛県史編さん委員会
- 相原浩二 1998 「姫原遺跡の調査」「和気・堀江の遺跡Ⅱ」 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の経過

船ヶ谷遺跡3次調査地の調査地、調査面積等は、以下の通りである。

調査地 松山市安城寺町592-1外6筆

調査面積 5,730m²

調査期間 1998(平成10)年4月1日～1998(平成10)年8月31日〔屋外調査〕

1998(平成10)年9月1日～1999(平成11)年6月30日〔室内整理〕

調査委託 えひめ生活協同組合

発掘調査(屋外調査)は、平成10年4月1日から開始した。調査地は現在の久万川の下流右岸に隣接し、標高8mを測る。調査前は水田として利用されていた。調査の進行上、調査地をI～Ⅲ区に区分した。試掘調査で得られた資料を基に、地表下20～30cmまでの現水田に関わる土層は、重機を用いて掘削し、廃土は場外に搬出した。掘削後は、人力により掘り下げをおこない、遺物の確認と遺構の検出を試みた。なお、I区は、重機を用いて地表下1.5mまで掘削をおこない、土層の堆積を観察し、記録をおこなった。I区の調査は5月29日に終えた。

II区は、遺構の検出を5月21日までおこない、自然流路・掘立柱建物・溝・上坑・柵列・井戸・柱穴等多数の遺構を確認した。そして、上層壁面を検討した結果、遺構の多くは第VI層上面から掘り込まれたものであることが明らかとなった。遺構の調査は、配置図の作成と埋土の記録からとりかかり、その後は遺構の精査を進めた。7月下旬までに検出した遺構の帰属時期とその性格を把握することにつとめた。8月1日には『現地説明会』を開催した(第3図)。当日は天候にも恵まれ、100名を超える市民の参加があった。8月上旬は、実測の補足と写真撮影を実施し、18日にII区の調査を終えた。

III区の調査は、8月3日から本格的におこない、18日には遺構の検出、20日には遺構配置図の作成と埋土の確認をした。その後は、遺構の精査を進め、南北方向の柵列と素掘りの井戸を検出した。井戸は、遺存が良好で、三段の曲物が出土した。井戸の調査は、実測と写真撮影をおこない、最終的には曲物に簡易な保存処理を実施し、取り上げをおこなった。29日には出土遺物、記録図面・写真、発掘機材、道具の搬出をはじめ、屋外調査は31日に終了した。

9月1日からは、埋蔵文化財センターにて報告書作成に向けての整理作業をする。まず、記録図面と写真の台帳作成からとりかかった。続いて、遺物の洗浄と注記をおこなった後、接合作業を進めた。11月からは、遺物実測図を作成する。平成11年1月からは、遺構・遺物の実測図を浄写し、並行して原稿執筆をする。4月には報告書の割り付けをおこない、遺物の写真を撮影する。

調査の経過



第3図 現地説明会

2. 調査区の設定

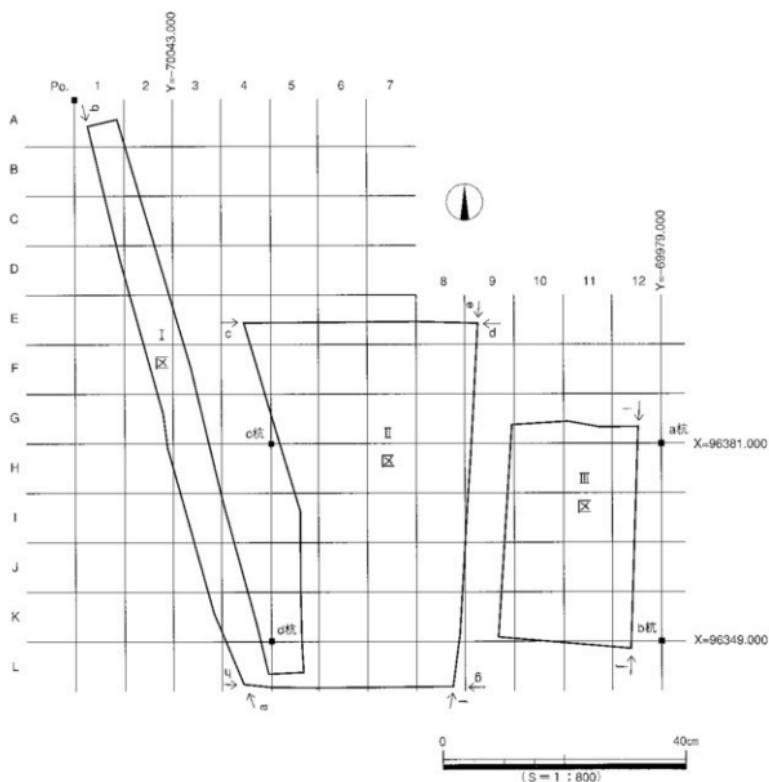
今回の調査では表土の掘削後に、業者に委託して4点の4級基準点を設定した（第5図）。座標は以下のとおりである。

- a 杣 X = 96381.000 Y = -69979.000 H = 8.662m
- b 杣 X = 96349.000 Y = -69979.000 H = 8.074m
- c 杣 X = 96381.000 Y = -70043.000 H = 8.068m
- d 杣 X = 96349.000 Y = -70043.000 H = 8.071m



第4図 調査位置図(2)

調査の概要



第5図 調査地区割り図

調査に際しては、座標点P0を基点として真北方向を軸として8m方眼区画を設定した。

P0 X=96437.000 Y=-70027.000

方眼区画は北から南へ向かってA・B・C…J・K・L区、西から東へ向かって1・2・3…10・11・12と呼び、これらを組み合わせて呼称することにした。なお、調査の進行上、調査区は3つに区分し、西から東へI区・II区・III区とした。

3. 層位

調査地は、調査以前が東西に3枚続く水田であった。現地表面の標高は、I区が北端で7.8m、II区が8.4m、III区が8.5mを測る。現地表面は東から西へ傾斜しており、比高差70cmを測る。

基本層位は第I層から第XII層までを検出した。第I層表土、第II層粘質土と砂質土の互層、第III層灰色粘土、第IV層粘土・砂質土・砂礫の互層、第V層灰色土、第VI層黒褐色土、第VII層灰黃褐色粘質土、第VIII層橙色砂質土、第IX層青灰色砂礫、第X層明綠灰色粘質土、第XI層灰白色砂礫、第XII層灰白色砂質土である。第I層は調査地全域にみられる。第II層以下は調査地全域にみられず、調査区によって堆積に違いがある。第II層はI・II区、第III・IV層はI区、第V～VI・X層はII区・III区、第IX・XI・XII層はII区で検出した。なお、I区では深くなつたため、第IV層までの検出にとどめた。第V・VI層は遺物包含層であり、遺物の遺存は第VI層が良い。遺構は第VI層上面で検出した。第VI層が堆積していないところでは、遺構は第V層上面で検出した。各層は色調や粘性等で細分した。基本層位と各調査区における土層の堆積状況は以下のとおりである。

表1 船ヶ谷遺跡3次調査の土層対応関係

基本層位	I区	II区	III区	色調	備考
第I層	a層	a層	a層	黄灰色土	現代の水田耕作土
	b層	b層	b層	棕色土	現代の水田底土
	c層	c層	-	黄灰色土	現代の旧水田耕作土
	d層	-	-	真跡土	現代の造成土
	e層	-	-	黄灰色土	現代の造成土
第II層	a～e層	a～e層	-	粘質土と砂質土の互層	自然流路少
第III層	第III層	-	-	灰色粘土	自然流路少
第IV層	a～e層	-	-	粘土・砂質土・砂礫の互層	自然流路少
第V層	第V層	第V層	第V層	灰色土	中層の気泡層
第VI層	未	第VI層	第VI層	黑褐色土	中层の気泡層(遺構検出面)
第VII層	a～c層	a～b層	灰黃褐色粘質土	(遺構検出面)	
第VIII層	a～c層	集塵層	棕色砂質土		
第IX層	未	第IX層	-	青灰色砂礫層	
第X層	未	第X層	a～b層	明綠灰色粘質土	
第XI層	a～b層	-	-	灰白色砂礫層	
第XII層	未	第XII層	-	灰白色砂質土	

I 区（第6図、図版2）

調査区の北と南では堆積状況が大きく異なる。第I～IV層が検出された。

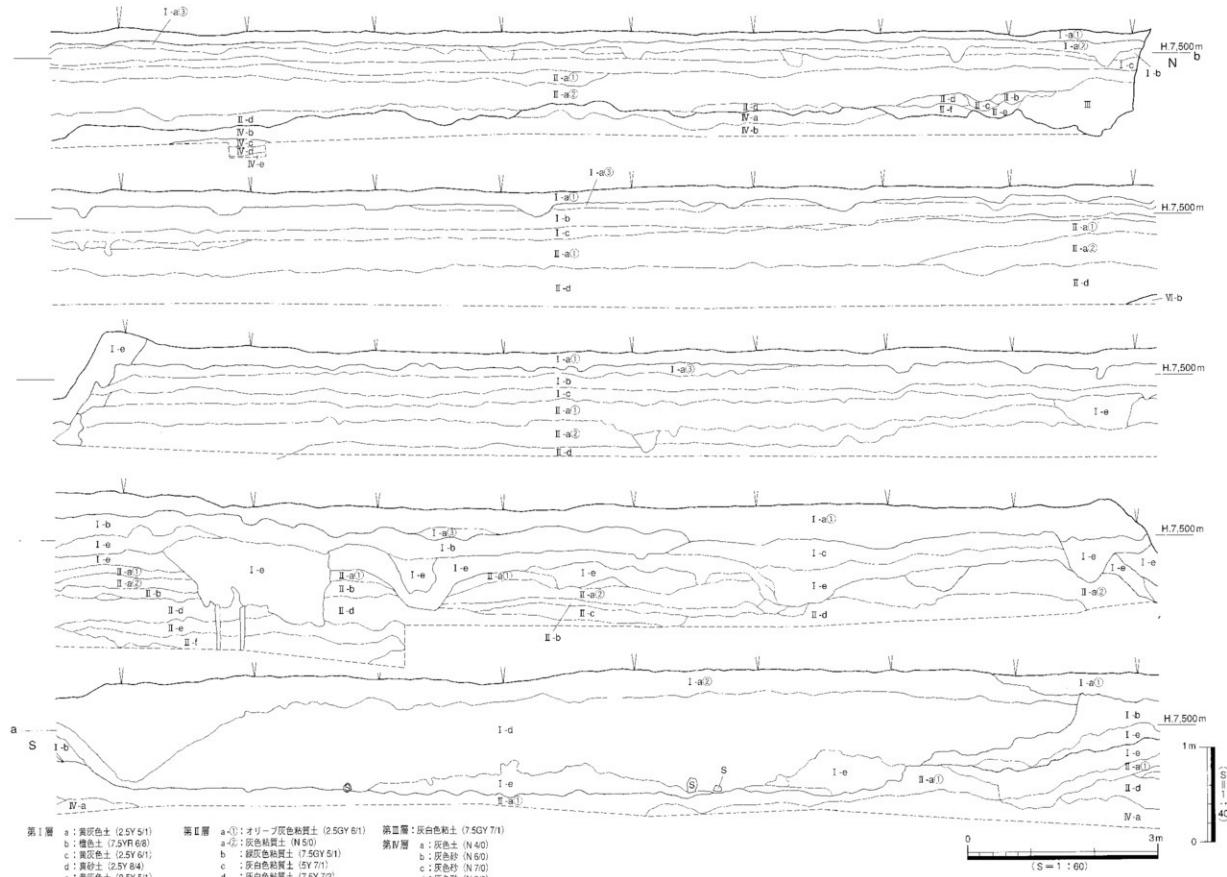
第I層：五層に細分される。I-a①層は黄灰色土（2.5Y5/1）。全域に分布する。現代の水田耕作上である。層厚10～40cmを測る。I-a②層は黄灰色土（2.5Y4/1）である。調査区の北部と南部に分布する。現代の水田耕作上である。層厚10～30cmを測る。南部では局部的に厚く堆積しており、1mを測るところがある。I-a③層は黄灰色土（2.5Y4/1）。調査区北部に分布する。層厚10cmを測る。I-b層は橙色土（7.5YR6/8）である。全域に分布する。層厚15cmを測る。鉄分を多く含む。現代の水田にかかる床土である。I-c層は黄灰色土（2.5Y6/1）。調査区北半部に分布する。層厚10～30cmを測る。硬くしまっており、下部には黒色の繊維土が散在する。I-d層は真砂土（2.5Y8/4）である。調査区の南半部に分布する。層厚80～100cmを測る。現代の水田を形成する際の造成土である。I-e層は黄灰色土（2.5Y5/1）である。コンクリートブロックや大型の角砾を多量に含む。調査区の南半部に分布する。層厚20～80cmを測る。造成土と考えられる。

第II層：六層に細分される。II-a①層はオリーブ灰色粘質土（2.5G Y6/1）。全域に分布する。層厚10～20cmを測る。II-a②層は灰色粘質土（N5/0）。1～2cm大の角がとれた礫と、0.2～0.5cm大の角がある礫を含む。層厚5～30cmを測る。縦方向に鉄分の帯が認められる。中世末期の鍋片が出土している。II-b層は緑灰色粘質土（7.5G Y5/1）。大変硬くしまっている。II-b層以下の堆積は安定しておらず、局部的に堆積する。II-c層は灰白色粘質土（5Y7/1）。II-d層は灰白色粘質土（7.5Y7/2）。1～2cmの角がとれた礫を少量含む。II-e層はオリーブ色砂質土（2.5G Y6/1）。土にはややしまりがある。II-f層はオリーブ灰色砂質土（2.5G Y6/1）。柔らかく、局部的に灰オリーブ色粘質土（7.5Y5/2）が認められる。

第III層：灰白色粘土（7.5G Y7/1）。調査区北端に分布する。大変硬くしまっており、きめ細かい。縦方向に鉄分の帯が走る。層厚15～30cmを測る。

第IV層：五層に細分される。遺物を少量含むが、器面に磨滅が認められる。IV-a層は灰色土（N4/0）である。層厚10cmを測る。調査区の北半部に分布する。VI-b層は灰色砂（N6/0）である。よくしまっている。北から南へ堆積している。土器の碗片が出土した。IV-c層以下は深掘りをおこなった所で観察された土層である。IV-c層は灰褐色（N7/0）である。下部には灰色粘質土（N5/0）が層厚10cmで堆積している。IV-d層は灰色砂（N3/0）である。IV-e層は青灰色砂礫（5B5/1）である。1mmの砂、5mmの礫が混在する。弥生土器の高杯が出土した。IV-f層以下は、深くて危険のため未調査である。

調査区西壁中央部ではコンクリート塀を構築するための掘り方が確認されている。この掘り方から西側で造成土（I-d・I-e層）がみられる。



第6図 I区西壁土壌図

II区（第7・8図）

第I・II・V～XII層が検出された。

第I層：I層は三層に大別される。さらにI-a層は三層に細分される。

I-a層は黄灰色土（2.5Y5/1）である。色調と粘性によって①～③層に分けられる。I-a①層は調査区の南に分布する。層厚10～15cmを測る。②層は全域に分布する。層厚5～25cmを測る。I-a③層も全域に分布する。層厚5～15cmを測る。いずれも現代の水田にかかる耕作土である。I-b層は橙色土（7.5YR6/8）である。調査区東部に分布する。層厚10～15cmを測る。鉄分を多く含む。現代の水田の底土である。I-c層は黄灰色土（2.5Y6/1）である。調査区の南西部に分布する。層厚5～20cmを測る。

第II層：調査区南西部に分布する。II-a①からII-e層は、層厚5～15cmを測り、東から西へ傾斜して堆積する。II-f層は層厚10～15cmを測る。

第V層：灰色土（7.5Y6/1）。調査区北東部に分布する。層厚5cmを測る。土は硬くしまっている。中世段階の遺物包含層である。土師器・須恵器・鐵器が出土した。

第VI層：黒褐色土（7.5YR3/1）。調査区北東部に分布する。層厚10～20cmを測る。中世の遺物包含層である。土師器・須恵器・瓦器・鐵器が出土した。本層上面で遺構を検出した。木層が分布しない範囲においては、遺構はVII層上面で検出した。

第VII層：三層に分層される。VII-a層は灰黄褐色粘質土（10YR6/2）である。調査区の広い範囲に分布する。非常に硬くガチガチした質感をもつ。層厚10～30cmを測る。VII-b層は灰黄褐色砂質土（10YR6/2）である。粒が細かい砂である。調査区東半部に分布する。層厚5～20cmを測る。VII-c層は灰黄褐色粘質土（10YR6/2）である。調査区の広範囲に分布する。a層より柔らかい。層厚30cmを測る。VII-a層上面は、北京から南西に向けて傾斜しており、比高差80cmを測る。

第VIII層：三層に分層される。第VIII-a層が橙色砂質土（7.5YR6/8）。調査区北西部に分布する。鉄分の細ブロックを多量に含み、ガチガチした質感をもつ。層厚10～15cmを測る。局部的に色調が異なるが、灰白色砂質土（5Y7/2）、灰白色粗砂（N8/0）がみられる。前者を第VIII-a①層、後者を第VIII-a②層と呼称する。この二層はS E201の調査時に確認された堆積層である。VIII-b③層は橙色砂質土で鉄分の細ブロックは含まない。調査区北半部に帶状に分布する。断面では台形状に堆積している。層厚30～40cmを測る。VIII-c層は青灰色砂質土（5B5/1）。層厚20cmを測る。

第IX層：青灰色砂疊層（5B5/1）。調査区のほぼ全域に分布するものと考えられる。調査区東壁で、大きく盛り上がって堆積する。硬くしまっており、角がとれた小さい礫と砂によって構成される。層厚40～70cmを測る。

第X層：明緑灰色粘質土（7.5G Y7/1）。非常に硬くしまっている。局部的に色調が異なり、青灰色（5B6/1・10B G5/1）、灰オリーブ色（5Y6/2）を呈する土層がみられる。これらの層の下（第X-b層）は、青灰色粘土（10B G5/1）である。S E201の調査時に検出した（第25図、図版8）。地下の水脈に関連する層であり、湧水がみられる。

第XI層：S E201の調査時に検出した。二層に分層される。第XI-a層は灰白色砂疊層（N8/0）である。0.5～1cm大の角がとれた丸い礫を多量に含む比較的しまりのある砂疊層である。

調査の概要

層厚25cmを測る。第XI-b層は灰白色粗砂層（N8/0）である。層厚10~30cmを測る。

第XII層：S E201の調査時に検出した。灰白色砂質土（N8/0）である。比較的しまりがある。鉄分を多量に含む層厚1~2cmの層が四層認められる。

第Ⅸ層以下では遺物の出土はない。

III区（第8図）

第I・V~VII層が検出された。

第I層：二層に分層される。I-a層は黄灰色土（2.5Y5/1）。調査区の全域に分布する。層厚10~20cmを測る。現代の水田にかかる耕作土である。I-b層は橙色土（7.5YR6/8）。調査区の全域に分布する。層厚5~20cmを測る。鉄分を多く含む。現代の底土である。

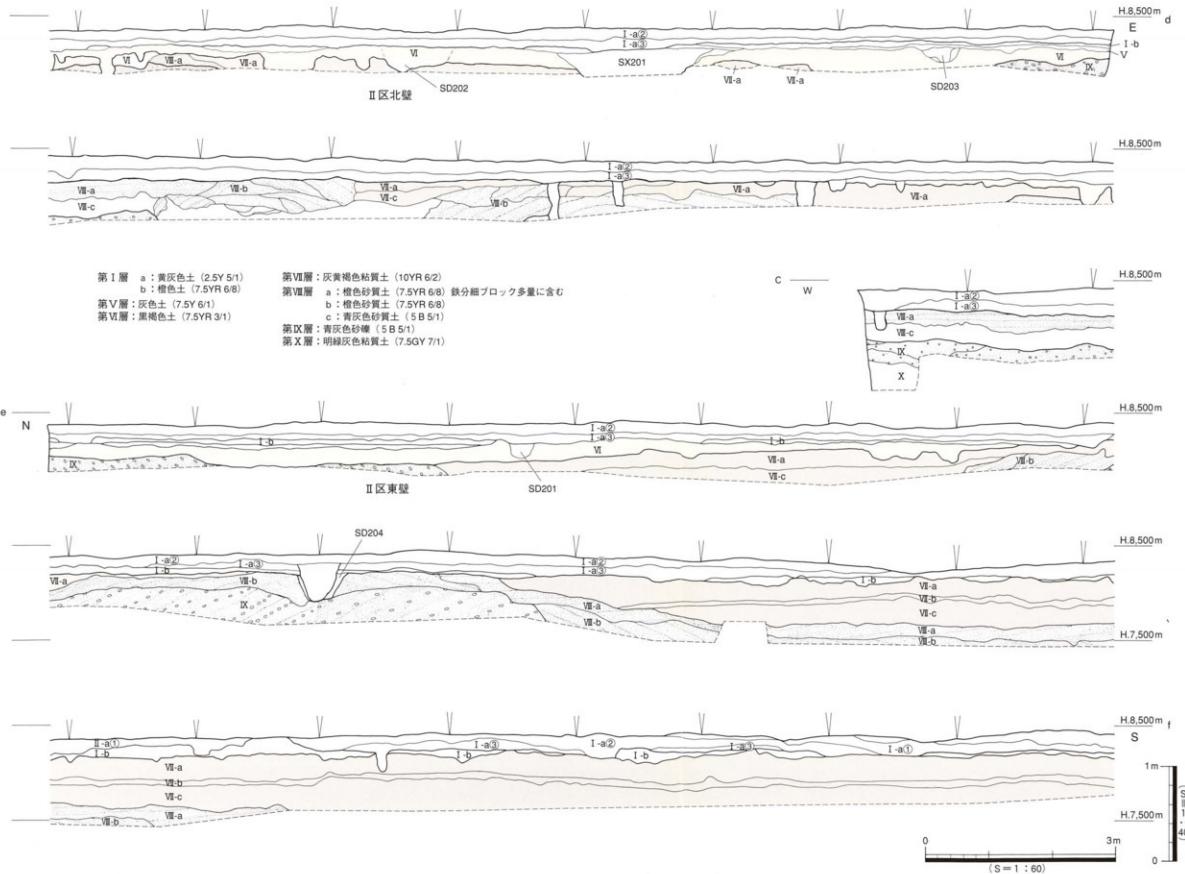
第V層：灰色土（7.5Y6/1）。調査区の南半部に分布する。層厚5~25cmを測る。中世の遺物包含層である。土師器・須恵器などが少量出土した。

第VI層：黒褐色土（7.5Y3/1）。調査区の北西部と東部に局部的に分布する。層厚10~50cmを測る。中世段階の遺物包含層である。土師器・須恵器などが少量出土した。

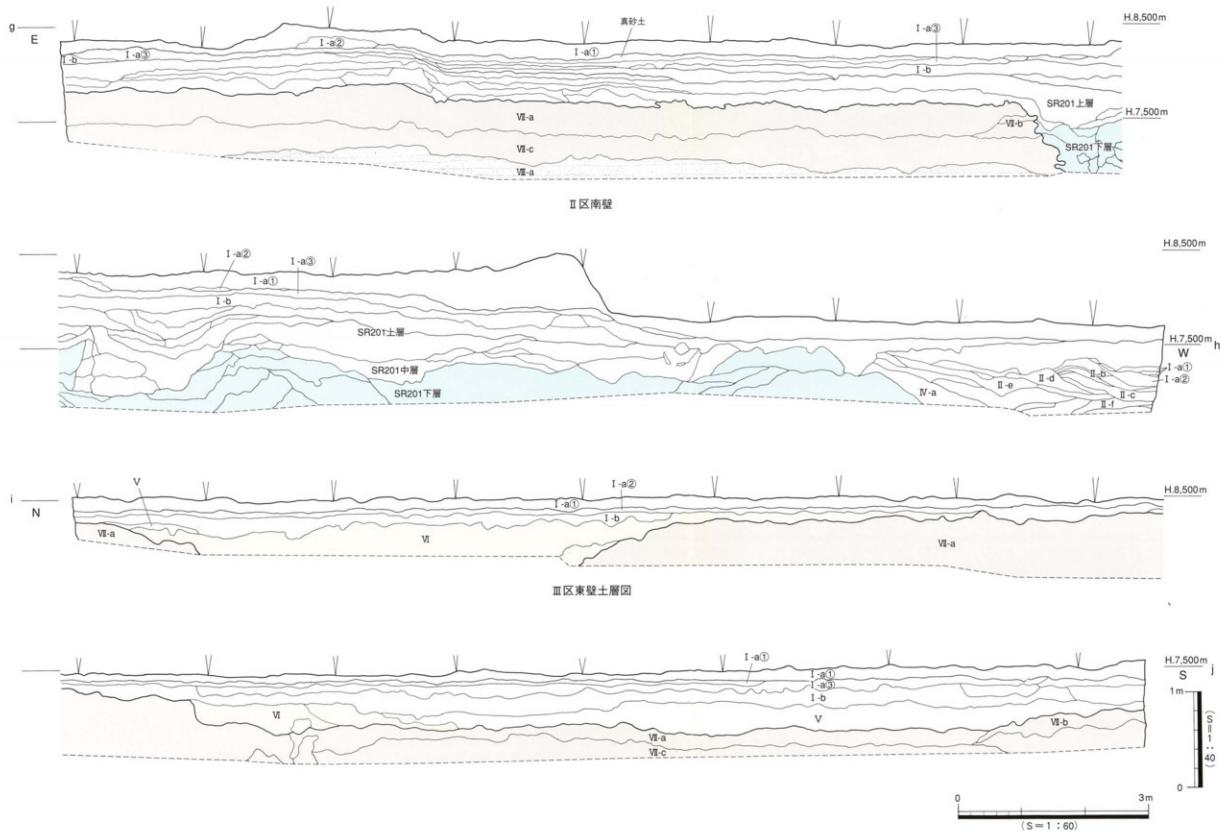
第VII層：三層に分層される。VII-a層は灰黄褐色粘質土（10YR6/2）である。調査区の全域に分布する。非常に硬くガチガチした質感をもつ。層厚20~60cmを測る。VII-b層は灰黄褐色砂質土（10YR6/2）である。やや硬さに欠ける。層厚20~40cmを測る。VII-c層は灰黄褐色粘質土（10YR6/2）である。a層に比べ柔らかい。層厚30cmを測る。VII-a層上面は、北から南へ向けて緩傾斜しており、比高差40cmを測る。

第Ⅸ層：灰白色粘質土（N8/0）。層厚30cmを測る。S E301の調査時に検出した（第26図）。

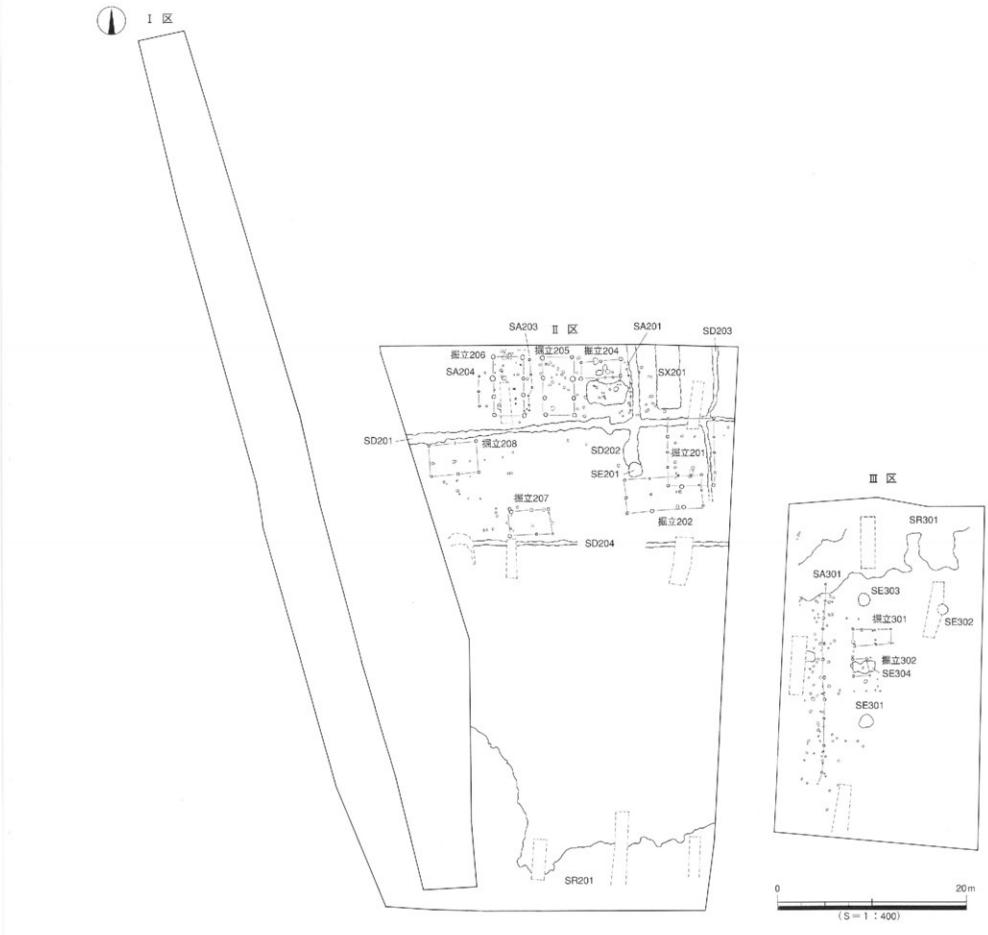
第X層：二層に分層される。第X-a層は灰オリーブ粘質土（5Y6/2）である。非常に硬くしまっている。層厚10~30cmを測る。第X-b層は青灰色粘土（10BG5/1）である。S E301の調査時に検出した（第26図、巻頭図版1）。



第7図 II区北壁・東壁土層図



第8図 II区南壁・III区東壁土層図



第9図 造構配置図

4. 遺構と遺物

今次調査では、縄文時代晩期～弥生後期と中世の遺物・遺構を検出した（第9図）。遺構の種別と検出数は次のとおりである。

II区検出遺構

縄文晩期～弥生後期	流路	(S R201)	1
中世	掘立柱建物	(掘立202・204～208)	6
	溝	(S D201～204)	4
	井戸	(S E201)	1
	柵列	(S A201～204)	4
	土坑	(S K201～204)	4
	性格不明遺構	(S X201)	1
	小穴	(S P 1～257)	257
近世以降	掘立柱建物	(掘立201)	1

III区検出遺構

縄文晩期	流路	(S R301)	1
中世	掘立柱建物	(掘立301・302)	2
	井戸	(S E301～304)	4
	柵列	(S A301)	1
	小穴	(S P 300～430)	131

出土遺物は、包含層と遺構出土の遺物とに大別される。

包含層出土遺物は、主として第V層と第VI層から出土した。第VI層出土の遺物は13世紀後半～14世紀前半に帰属するものが多い。

遺構出土の遺物は、縄文時代晩期・弥生時代後期・中世の三時期に大別され、中世の遺物が多くを占める。縄文時代晩期の遺物には、深鉢・浅鉢・打製石器・砾石錘などがあり、弥生後期の遺物には、壺・壺・鉢などがある。中世の遺物は、14世紀前半に帰属し、土師器の皿・壺・土鍋・三足付羽釜・龜山焼の大壺、束縛系須恵器のこね鉢・龍泉窯系の青磁などがある。中世の遺物は、II区の北半部で検出されたS D201から出土したものが多い。なお、III区で検出されたS E301からは曲物が出土した。

第IV章 繩文時代～弥生時代の記録

1. 自然流路

S R201 (第10図、図版3・4)

II区南端部のJ 5～L 8区に位置する。検出流路の北岸部を検出し、規模は検出長23.5m、検出幅19.5m、深さ0.2～1.1mを測る。南岸部は調査区外へ続く。流路は緩やかに蛇行し、埋土は3層に大きく分層される。上層は黒褐色粘質土（7.5Y R3/1、10Y R1.7/1、10Y R3/1）である。層厚20～90cmを測り、炭化物粒を多量に含む土層である。中層は灰白色砂質土（10Y R7/1）である。5mm大的碎礫を含みしまりがある。本層はL 5区を中心に分布し、分布範囲は長さ5m、幅3～4.5m、深さ5～20cmである。下層は黒褐色粘質土（5Y R2/1）である。土にしまりがあり、層厚20～60cmを測る。

遺物は、中層と下層で出土している。中層からは弥生土器が出上し、器種は壺形土器（以下、「形土器」は略する）、壺、鉢がある。下層からは縄文土器と打製石器が出土した。縄文土器はL 6区北西部に集中しており、多量の炭化物粒とともに出土した。土器には深鉢と浅鉢があり、石器には石鏃とスクレイバーがある。

出土遺物 (第11・12図、図版14・15)

1～5は縄文土器である。1・2は深鉢で、胴部で屈曲し口縁部が外反する形態である。1は口唇に接して刻目突帯文が付けられる。3～5は浅鉢で、3と4は同一個体の可能性がある。口縁部が二重で屈曲し、口唇部が内面に肥厚する。内外面はいずれも丁寧なミガキが施される。

6～11は弥生土器である。6～8は壺で、6・7は口縁部を欠き、6はミニチュアの可能性がある。9・10は壺である。9は複合口縁壺の口縁部で、一次と二次の口縁接合部は「コ」字状の接合によって仕上げられ、二次口縁部外面には波状文が組み合う。11は鉢である。

12・13はサスカイト製の石器である。12は平基無茎式の打製石鏃で、細部調整は両面のほぼ全面に及ぶ。長さ21mm、幅14mm、厚さ3mm、重量0.63gである。13は横長剥片を素材としたスクレイバーである。粗い細部調整により周縁に刃部が作出される。

時期：下層出土遺物が縄文時代晚期後半、中層出土遺物が弥生時代後期後半に比定される。よって、本遺構は縄文時代晚期後半～弥生時代後期後半に機能していたと判断される。S RをIV-a層が覆うことから、最終的に埋没したのが中世段階と考えられる。

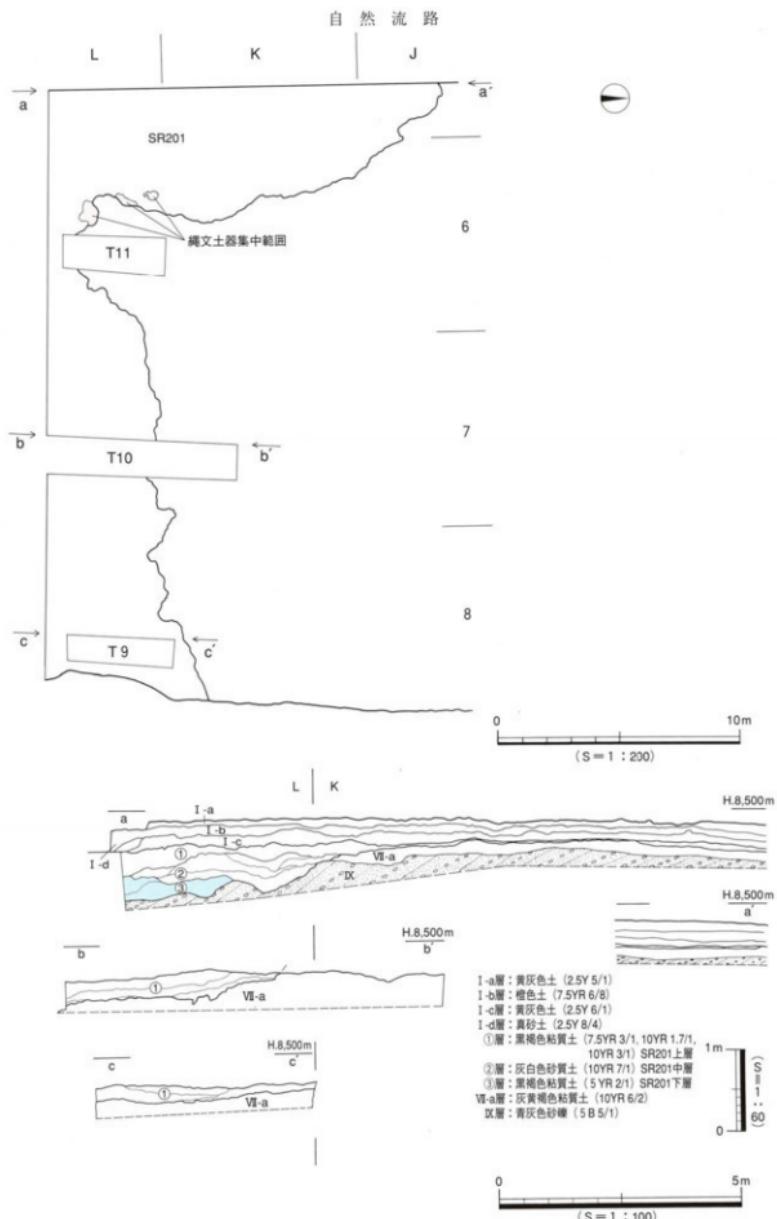
S R301 (第13図、図版11)

III区北半部のG11～H12区に位置する。北東部では蛇行しているため、流路幅は一定ではない。流路は後世の削平により途切れるが、II区に続くものと想定される。規模は、検出長10m、検出幅4.5m、深さ20cmを測る。流路の底は緩やかに北東から南西に向かって傾斜し、北東部と南西部との比高差は20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土（10Y R3/1）である。先述したS R201埋土の下層に対応する。

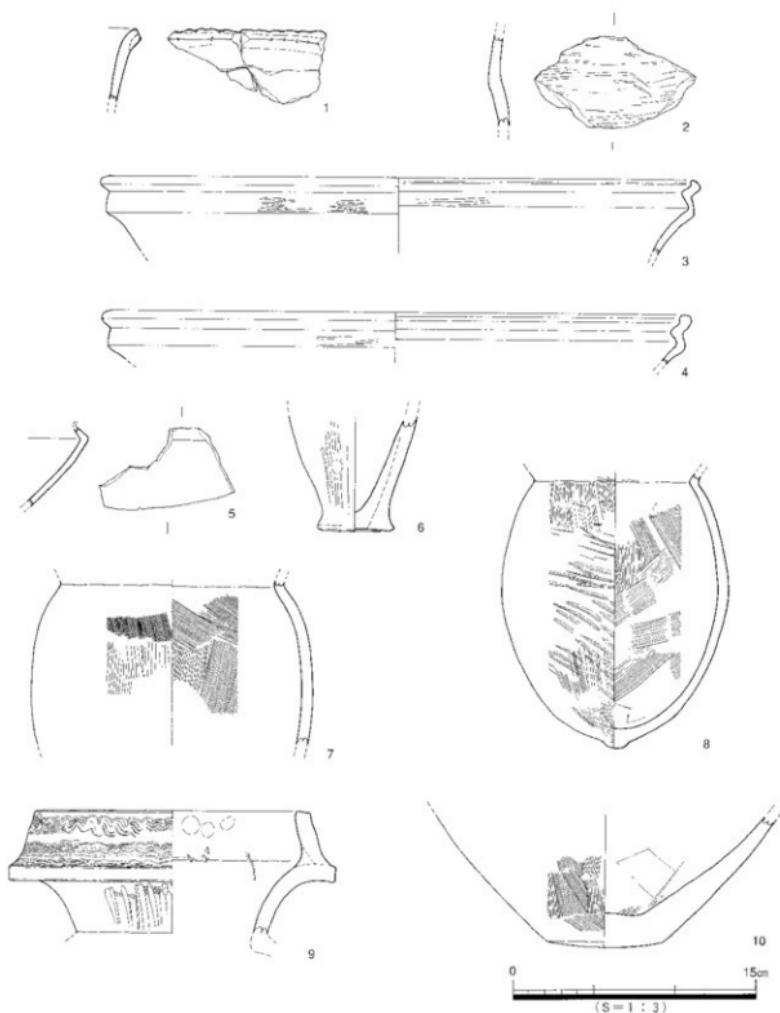
遺物は縄文土器、打製石鏃、石核、礫石錘、敲石がある。このうち、縄文土器は碎片のため同化できない。

出土遺物 (第14図、図版15)

14は打製石鏃。縱長剥片を素材とした長さ50mmの大型品である。基部の抉りは浅く、長さの9%を



第10図 SR201測量図

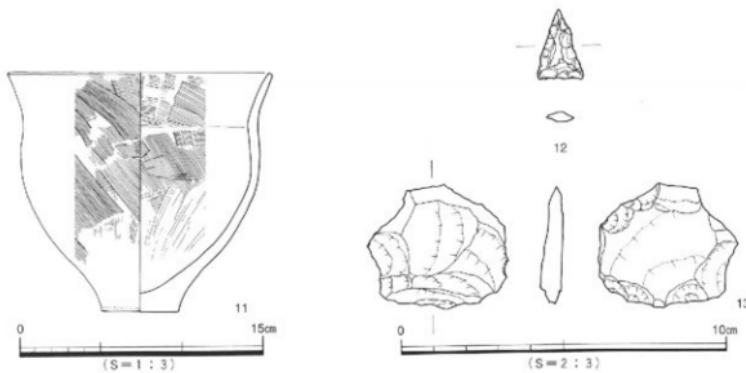


第11図 SR201出土遺物実測図(1)

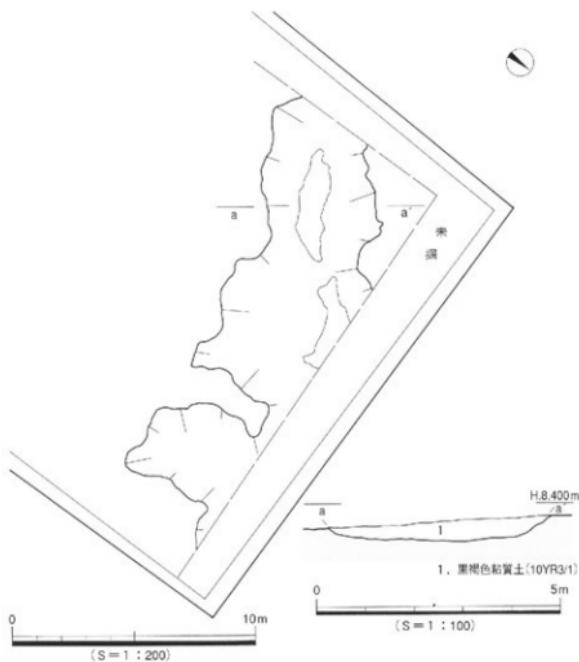
占める四基無茎式鋸である。側辺は先端部に向かって屈曲しており、抉りを有す五角形錐状を呈している。サヌカイト製。15は大型の右核である。図示した面は剥片剥離が進行している。サヌカイト製。16は結晶片岩製の砾石錘である。長軸の両端には紐掛けのための抉りがみられる。17は敲石である。

時期：埋土と出土遺物から縄文時代晩期後半である。

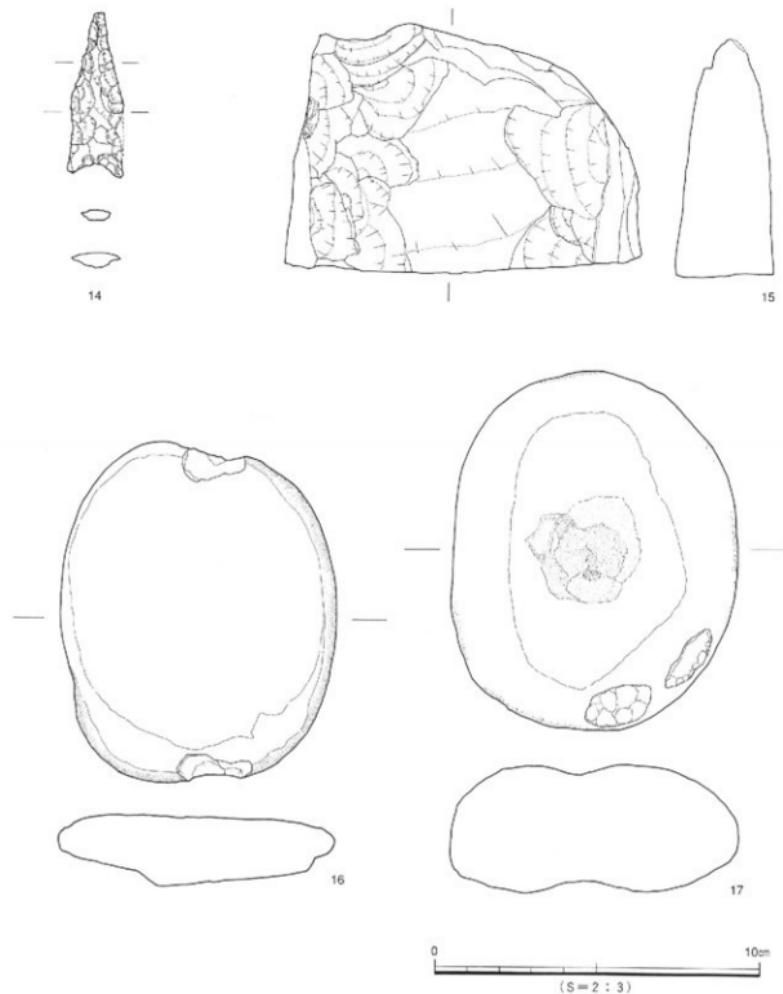
自然流路



第12図 SR201出土遺物実測図(2)



第13図 SR301測量図



第14図 SR301出土遺物実測図

第V章 中世の記録

1. 掘立柱建物址

掘立202（第15図、図版7）

II区北東部のG 7・8区に位置する。梁間2間、桁行3間の東西に細長い総柱建物である。柱穴はS P 191～205の12基で構成される。建物規模は、梁間の全長が3.1～3.3m、桁行の全長が7.9mである。柱穴の平面形態は円形と不整円形である。規模は径18～40cm、深さ4～32cmを測る。埋土は褐灰色土（10Y R 6/1）である。各柱穴で柱痕跡を確認することができた。柱痕跡は直徑10～15cmを測る。柱痕跡の埋土は暗褐色土（10Y R 3/3）である。S P 191～193は位置関係から、掘立201に伴う柱穴と判断した。

遺物はS P 199の柱痕から土師器の碎片、S P 204の柱痕跡から土師器の皿あるいは壺の碎片が出土した。いずれも碎片のため図化することはできない。

時期：遺物が碎片のため、時期決定は困難である。遺構の配置関係と埋土から14世紀前半と想定される。

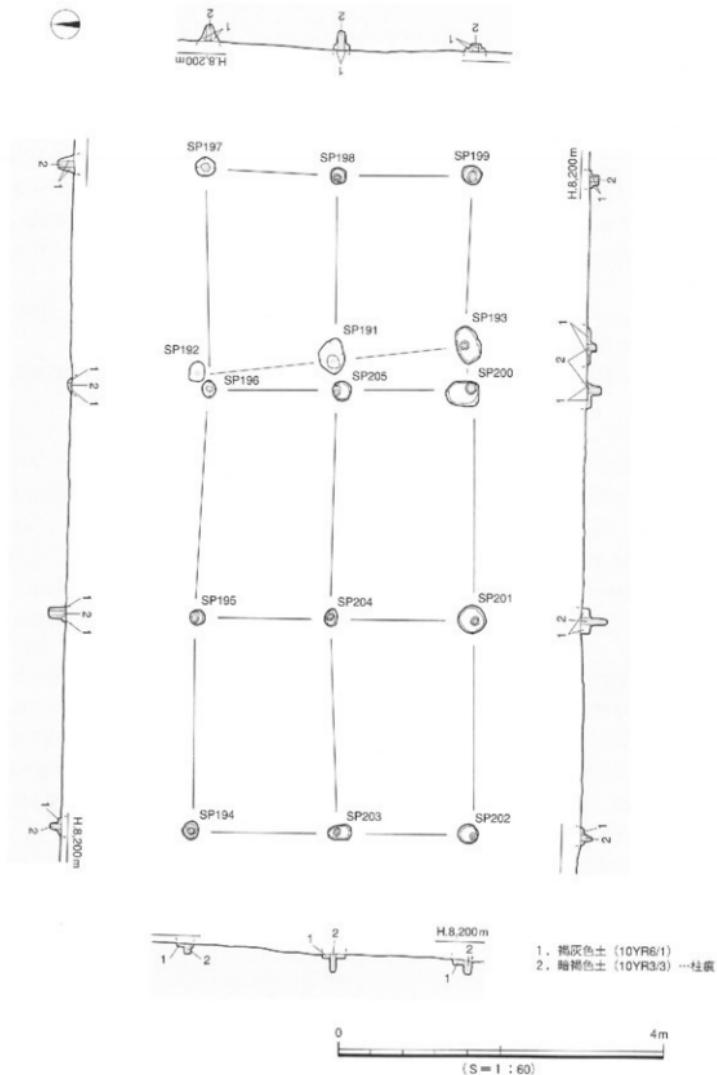
掘立204（第16・17図、図版5・6）

II区北端部のE 7区に位置する。梁間1間、桁行2間の東西に細長い建物である。柱穴はS P 84・91・110～115の8基で構成される。建物の規模は、梁間の全長が1.32m、桁行の全長が4.0～4.1mである。S P 110・111間にS P 84が、S P 113・114間にS P 91が位置する。S P 84・111間、S P 91・114間はいずれも50cmを測る。柱穴の平面形態は、円形と隅丸長方形である。規模は径20～70cm、深さ14～30cmを測る。埋土は褐灰色土（10Y R 6/1）である。S P 84・112・113では、柱穴底から柱を支える基底石（根石）が出土している。柱痕跡はS P 115で確認し、柱痕跡の埋土は暗褐色土（10Y R 3/3）である。内部施設として炉S K 202がある。遺物は、S P 84からは土師器の碎片、S P 111からは土師器の壺片、S P 112からは土師器の壺・土鍋、S P 113からは土師器の壺・三足付羽釜、S P 115の柱痕跡からは皿ないし壺の土師器の碎片が出土した。なお、S P 112からは炭化材の一部が出土した。

内部施設には、建物の中央南寄りに構築された炉S K 202がある。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は東西70cm、南北50cm、深さ16cmを測る。土坑の床はほぼ平垣である。埋土は焼土粒と炭化物を多量に含んだ暗褐色土（10Y R 3/3）である。

遺物は土坑の東半部でまとめて出土し、土師器の皿・壺・土鍋がある。土鍋は底部を欠くがほぼ1個体が出土した。胴部外面には焼が付着する。皿と壺の遺存は悪く、図化できない。

中世の記録



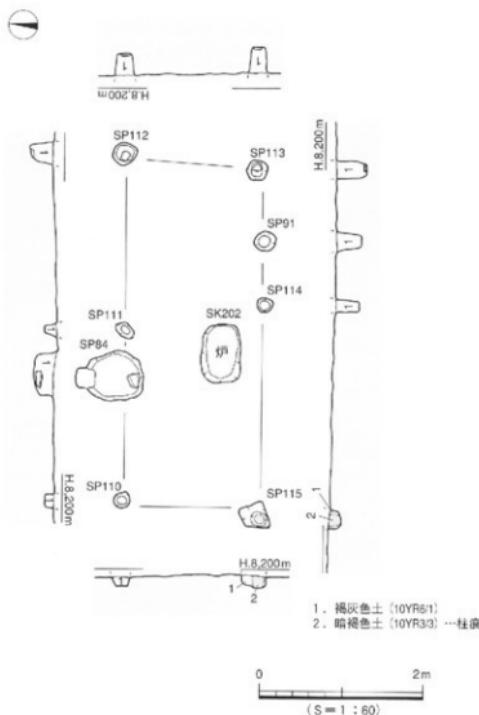
第15図 捩立202測量図

掘立柱建物址

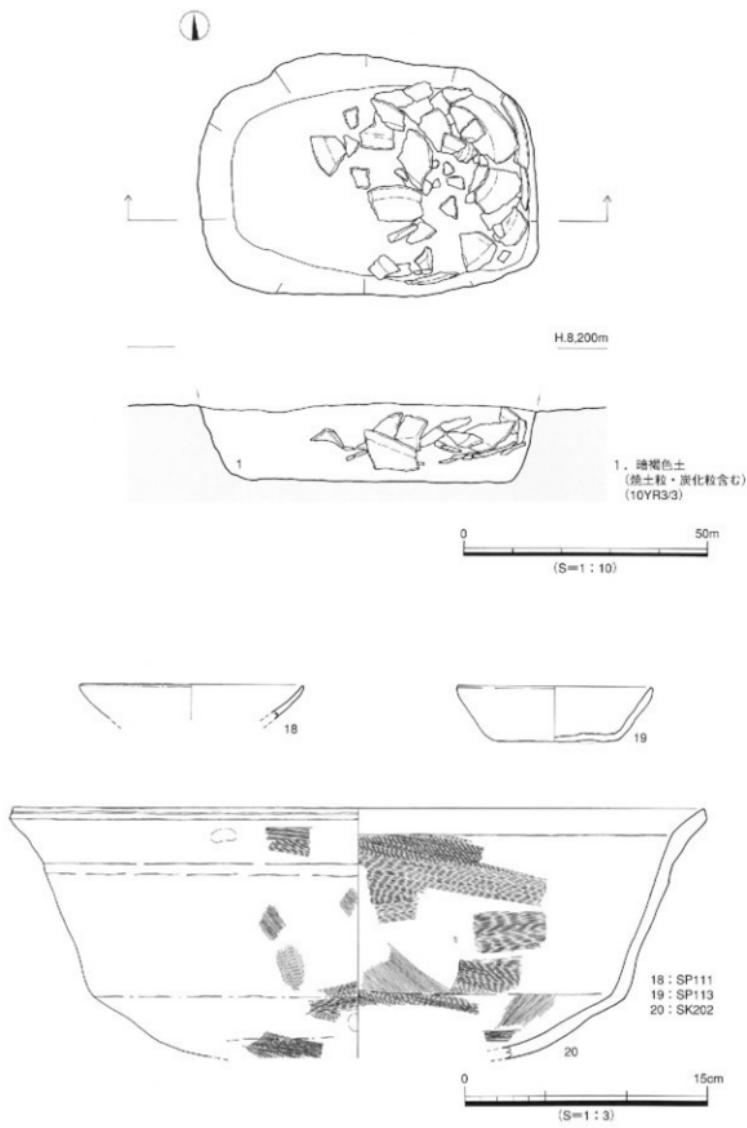
出土遺物 (第17図、図版16)

18はS P111出土の土師器坏の口縁部片である。胴部がほぼ直線的に開く。19はS P113出土の土師器の坏である。外底には回転糸切り離し痕と板目状の压痕を残す。20はS K202から出土した土鍋で、底部を欠く。口縁部を指で屈曲させるために、内面に弱い稜線がみられる。口縁端部に1条の細沈線が巡る。胴部外面には多くの煤が付着する。

時期：出土遺物から14世紀前半と考えられる。



第16図 掘立204測量図



第17図 掘立204・炉（SK202）測量図及び出土遺物実測図

掘立205（第18図、図版6）

II区北端部のE 6～F 7区に位置する。掘立204の西に隣接する。梁間1間、桁行3間の南北に細長い建物である。柱穴はS P 10・14～20の8基で構成される。建物規模は、梁間の全長が2.6～2.7m、桁行の全長が5.1～5.4mを測る。柱穴の平面形態は円形と不整円形である。規模は、径40～50cm、深さ30～80cmを測る。埋土は褐灰色土（10Y R 6/1）である。柱痕跡は各柱穴で確認した。直径は10～15cmを測り、柱痕跡の埋土は暗褐色土（10Y R 3/3）である。遺物は、S P 16の柱板からは土師器皿ないし坏の細片、S P 17からは土師器の坏片、S P 18からは土師器三足付羽釜の脚部と束播系須恵器の片口鉢、S P 18の柱痕からは土師器の坏片、S P 19の柱痕からは土師器の皿、S P 20からは土師器の碎片が出土している。なお、建物の東に並行して横列S A202が設けられている。

出土遺物（第18図、図版16）

21はS P 19の柱痕から出土した土師器の皿である。胴部の立ち上がりはしっかりしている。22はS P 18出土の束播系須恵器の片口鉢である。口縁端部は上下に拡張されている。

時期：出土遺物（22）から14世紀前半と考えられる。

掘立206（第19図、図版5・6）

II区西北部のE・F 6区に位置し、掘立205の西に隣接する。梁間2間、桁行3間の南北に細長い建物である。南の梁部分は試掘トレンチによって削平されている。柱穴はS P 7～9・11・13・23・57・78・250・251の10基を検出した。規模は、梁間の全長が2.7～3m、桁行の全長が5.3～5.5mを測る。柱穴の平面形態は円形である。規模は径30～60cm、深さ20～60cmを測る。埋土は褐灰色土（10Y R 6/1）である。S P 8・57・78・251では、柱穴底から柱を支えるための基底石（根石）が出土した。また、S P 13と250では柱穴の埋土中から礫が出土した。柱痕跡は3基の柱穴S P 11・78・250で確認し、直径10～20cmを測る。柱痕跡の埋土は暗褐色土（10Y R 3/3）である。

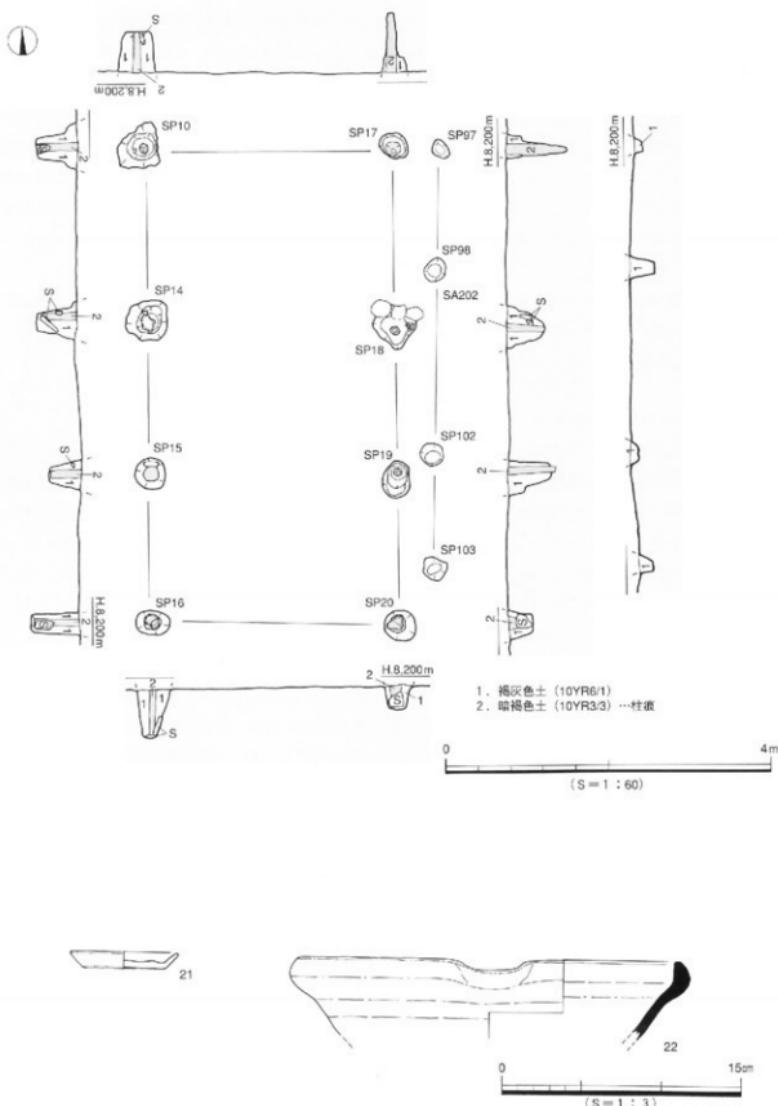
遺物は、S P 9とS P 57からは土師器の細片、S P 250の柱痕からは土師器の坏が出土した。なお、S P 250の埋土中からは弥生後期土器が出土したが、混入品と判断した。

内部施設として土坑S K 204が建物の中央北寄りに構築されている。平面形態は不整円形を呈する。規模は東西50cm、南北35cm、深さ60cmを測る。床面はほぼ平坦である。断面形態は逆台形状を呈する。壁上は上下2層に分層される。上層は炭化物を含んだ暗褐色土（10Y R 3/3）、下層が暗褐色砂質土（10Y R 3/3）である。遺物は、上層から龜山焼の大甕、下層から土師器の羽釜が出土した。なお、建物の東と西に横列（S A203・S A204）が伴う。

出土遺物（第20図、図版17）

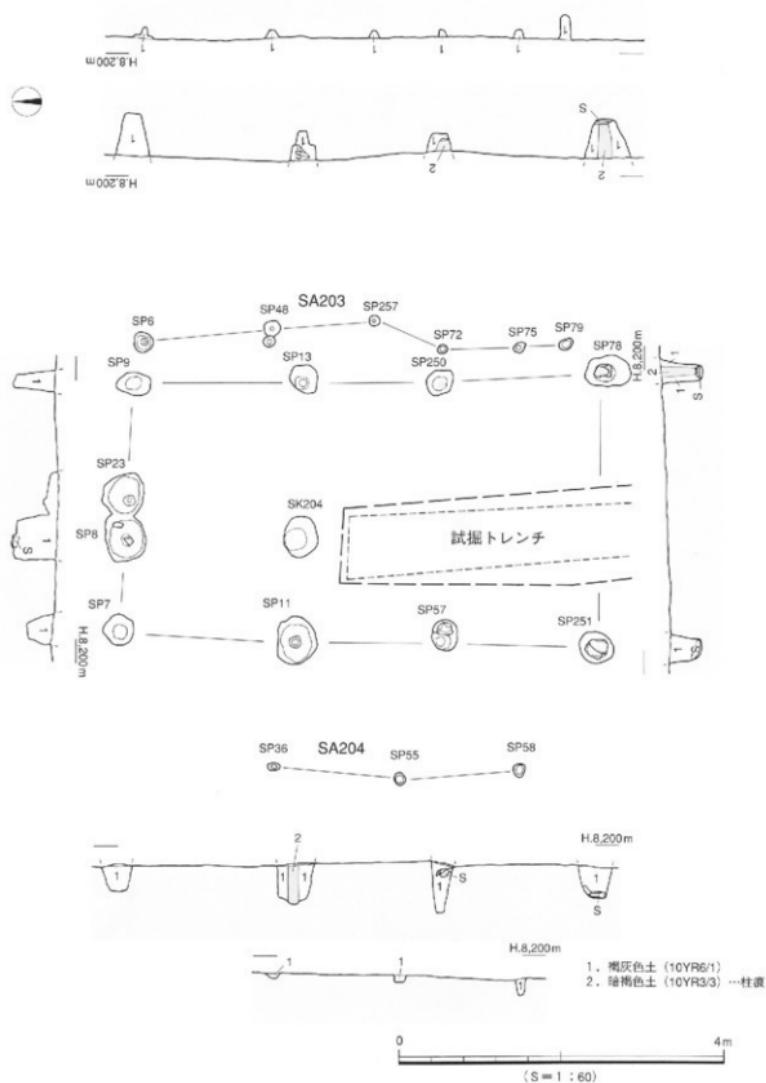
23はS P 250から出土した土師器の坏で、口縁の一部を欠く。胴部はやや丸みをもちつつ立ち上がり、口縁端は丸くおさまる。外底には回転糸切りの切り離し痕と板口状の圧痕がみられる。24・25はS K 204出土で、24は土師器の三足付羽釜の口縁部片である。口縁端から若干下がった位置にタガが貼付される。タガは断面「コ」字形に近い形状を呈している。25は須恵器の大甕である。口縁部は指により強く折り曲げられ「く」字形を呈する。口縁端部は面取りされている。胴部外面は格子目タタキ、内面はナデ調整が施される。外面に比べて内面の遺存は悪く、剥落が著しい。

時期：遺物から14世紀前半と考えられる。



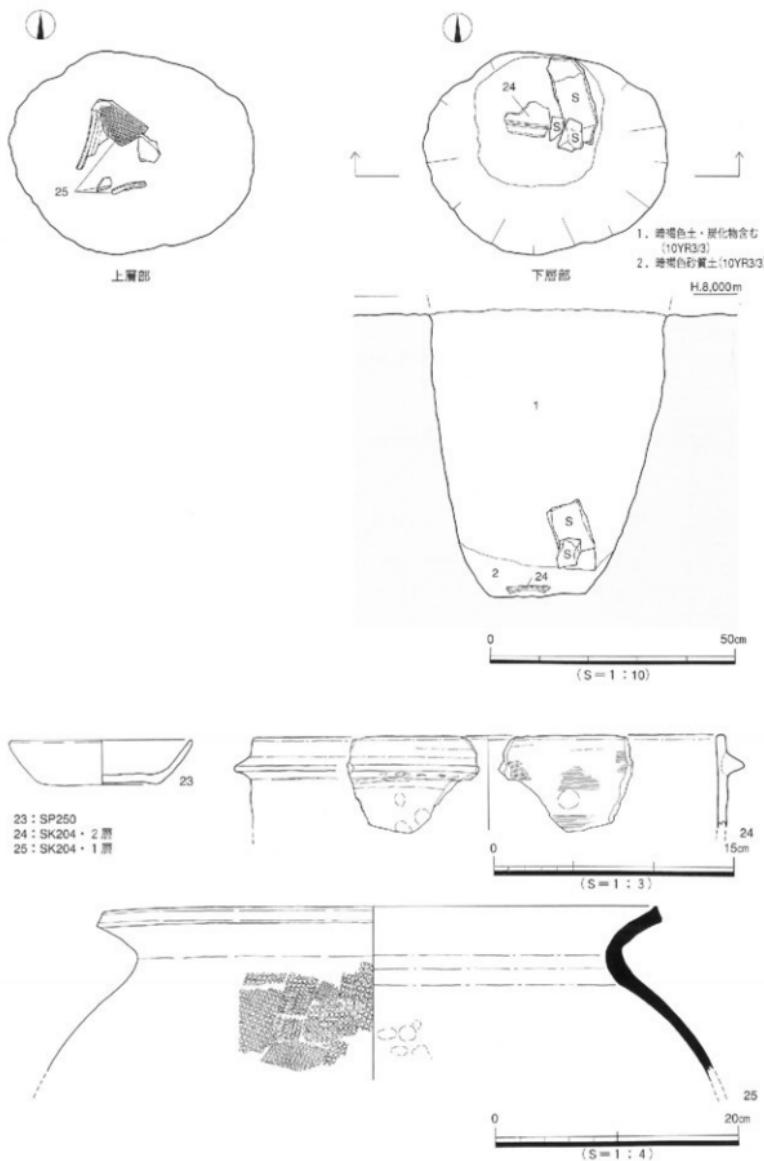
第18図 掘立205・SA202測量図及び掘立205出土遺物実測図

掘立柱建物址



第19図 掘立206・SA203・SA204測量図

中世の記録



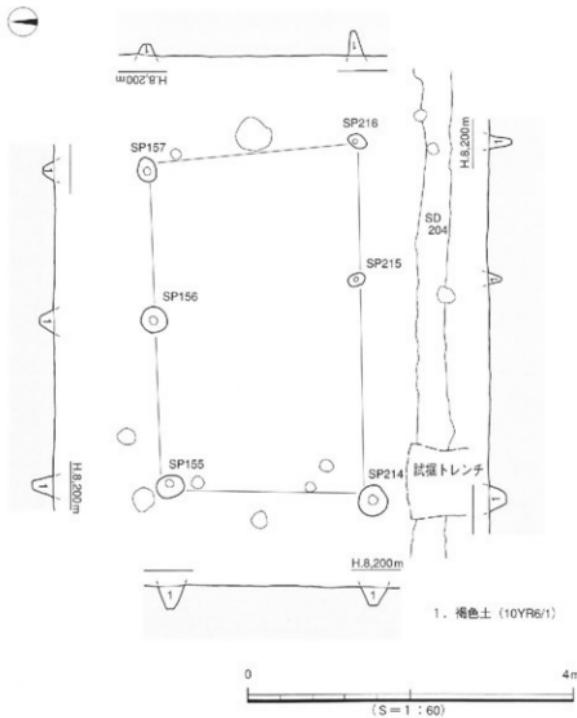
第20図 掘立206・貯蔵穴 (SK204) 測量図及び出土遺物実測図

掘立柱建物址

掘立207（第21図、図版5）

II区中央部の西、G・H 6区に位置し、SD204の北に隣接する。梁間1間、桁行2間の東西に細長い建物である。柱穴はSP155~157・214~216の6基で構成される。規模は、梁間の全長が2.1~2.4m、桁行の全長が3.6~4.1mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。柱穴の規模は、径20~40cm、深さ14~29cmを測る。埋土は褐色土（10YR6/1）である。いずれの柱穴からも、遺物と根石は出土していない。

時期：遺物の出土がみられないで、時期の特定は困難である。遺構の配置と埋上から、14世紀前半と想定しておきたい。

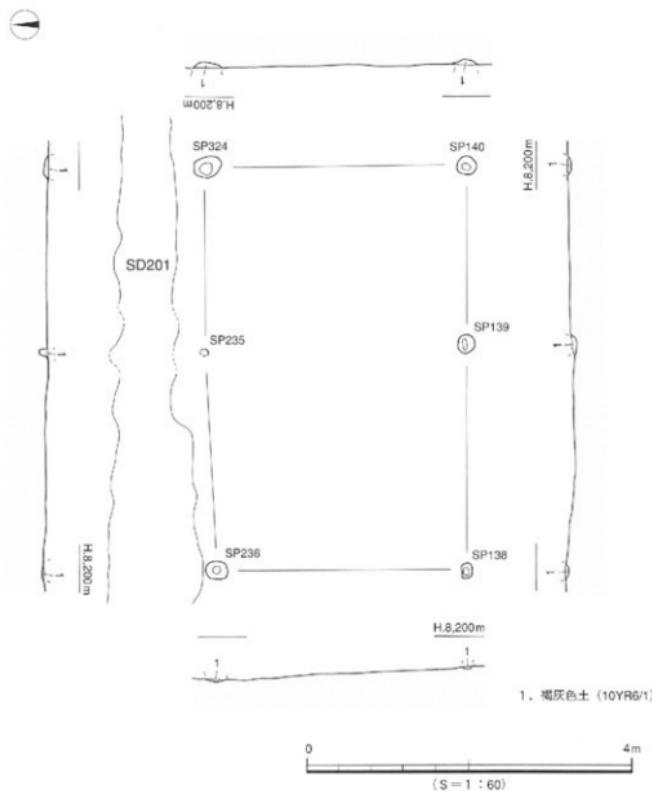


第21図 掘立207測量図

掘立208（第22図、図版5）

II区北西部のF・G 5区に位置し、SD201の南に隣接する。梁間1間、桁行2間の東西に細長い建物である。規模は、梁間の全長が2.9m、桁行の全長が4.7mを測る。柱穴はSP138～140・234～236の6基で構成される。柱穴の平面形態は円形を呈する。規模は、径20～36cm、深さ6cmを測る。埋土は褐灰色土（10YR6/1）である。遺物はSP236から土師器の皿と考えられる碎片が出上したが炭化できない。

時期：遺物が碎片のため、時期の特定は困難である。遺構の配置から14世紀の前半と想定しておきたい。



第22図 掘立208測量図

掘立301（第23図、図版11）

Ⅲ区中央部のI 10・11区に位置する。梁間1間、桁行2間の東西に細長い建物である。規模は、梁間の全長が1.4～1.5m、桁行の全長が3.7mである。柱穴はS P 347・350・352・354・357・359の6基で構成される。柱穴の平面形態は円形を呈する。規模は、径20～30cm、深さ10～20cmを測る。埋土は褐灰色（10Y R 6/1）の砂が混じる土である。遺物は出土していない。

時期：遺物の出土がみられないため、時期の特定は困難である。造構を覆う第IV層の出土遺物の時期を上限とするならば、14世紀代と理解できる。

掘立302（第23図、図版11）

Ⅲ区中央部のI 10区に位置する。梁間・桁行が1間の建物で、柱穴 S P 363・366・367・428で構成される。規模は、S P 363・428間が1.2m、S P 428・367間が1.6m、S P 366・367間が1.5m、S P 363・366間が1.6mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。規模は、径24～30cm、深さ10～20cmを測る。埋土は褐灰色（10Y R 6/1）の砂が混じる土である。遺物は出土していない。この建物の中央部分には井戸（S E 304）が構築されている。位置関係から掘立302はS E 304の付帯施設と考えられる。

時期：遺物の出土がみられないため、時期の特定は困難である。造構の配置から14世紀代と想定しておきたい。

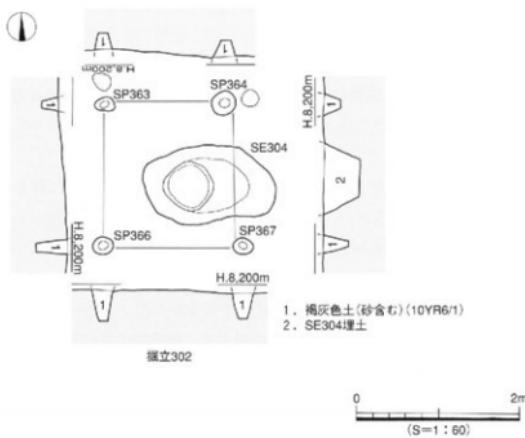
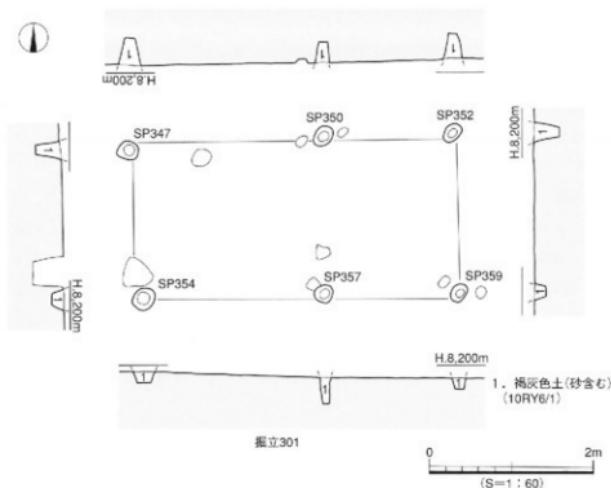
2. 井 戸

S E 201（第24・25図、図版5・7・8）

II区北東部のG 7区に位置する。S D 202の南端に取り付く。構造は上部に石組みをもち、下部に曲物が伴う。掘り方の平面形態は梢円形を呈する。規模は東西1.45m、南北1.6m、深さ1.37mを測る。埋土は五層に分層される。①層は灰白色土（N7/0）で、層厚15cmを測る。②層は灰白色土（N5/0）で、層厚13cmを測る。③層は暗灰色粘質土（N3/0）で、層厚60cmを測る。④層は青灰色粘質土（10B G 5/1）で、層厚55cmを測る。⑤層はオリーブ灰色粘質土（2.5G Y6/1）である。これは、上部構造の石組みの裏込め土である。各埋土は水平堆積であった。構造は、北側がやや二段掘り状を呈し、両側が三段掘り状を呈している。

調査では、井戸のプランを検出した段階で石を数点確認していた。①・②層を掘り下げると、整然と積み上げられた石組みが検出された。石組みは10～20cm大の角礫が多く用いられている。積み方は横積みを基本とし、隙間に縦積みを採用している。石組みは5段分が遺存しており、高さ60cmを測る。④層を精査した段階で曲物が検出された。曲物は直径50cm、高さ60cmを測る。木目が横方向であることは確認できたものの、遺存が悪く取り上げはできなかった。

遺物には、造構構築時と埋没過程とに伴うものがある。構築時の遺物は、須恵器壺と龍泉窯系青磁である。これらは裏込め土や石組みの間から出土した（図版8）。埋没過程の遺物は、①層からは土師器の三足付羽釜と鉄器、④層からは土師器の皿と須恵器の大壺が出土した。この他に、①層からは多量の石がみられた。なかには三波川變成岩類の板状の礫がある。これらの多くは、井戸の石組みに用いられた材と判断した。

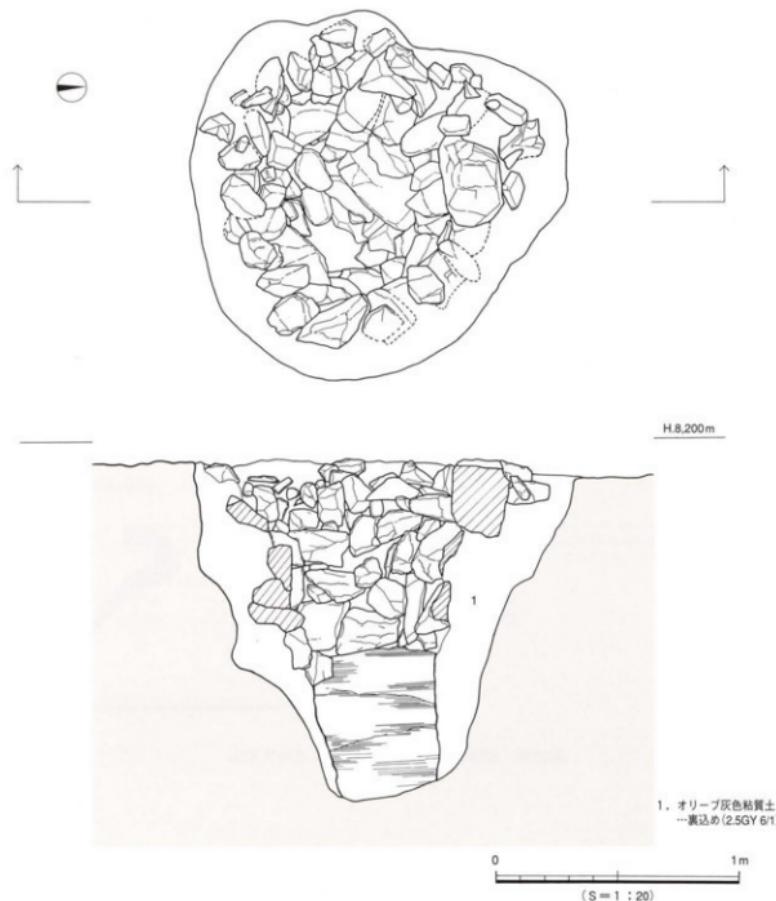


第23図 掘立301・掘立302測量図

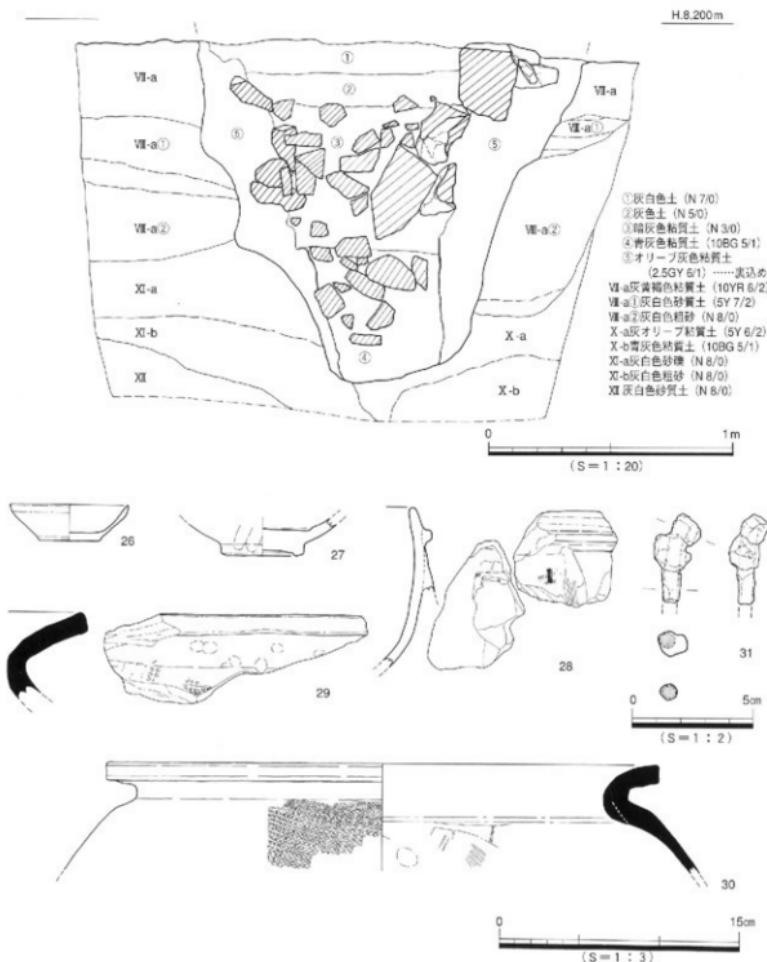
出土遺物（第25図、図版17）

26は土師器の壊である。口縁部は若干厚く、胴下半がわずかに内湾しながらすぼむ。底部は比較的厚い。27は龍泉窯系の青磁である。高台付きの碗であろう。外面には淡いオリーブ色の釉がかけられている。28は土師器の羽釜である。口縁端部から下がった位置にタガが巡る。剥離痕跡から三足付羽釜とみられる。29・30は中世須恵器の甕である。29は口縁部が強く折り曲げられ「く」字形を呈し、やや長い。胴上半の外面には格子タタキが施される。30は口縁部が短く、「く」字形に強く折れ曲がる。胴部外面には格子タタキがみられる。31は鉄製品で、棒状を呈する。

時期：出土遺物から14世紀前半と考えられる。



第24図 SE201測量図



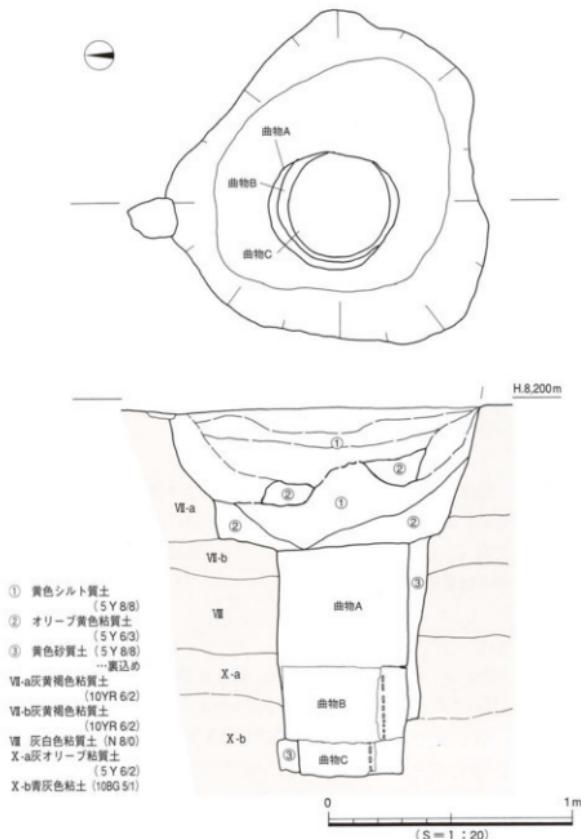
第25図 SE201断面測量図及び出土遺物実測図

S E301 (第26図、巻頭図版1、図版11・12)

Ⅲ区中央南、J 10区に位置する。平面形態は不整円形を呈する。規模は東西1.34m、南北1.25m、深さ1.50mを測る。断面形態は二段を呈し、上段部は逆台形、下段部は円筒形状に壁が垂直に掘り下げられている。ただし、下段部は北と南に段が形成されている。埋土は、上段部が黄色粘質土(5Y 8/8)とオリーブ黄色粘質土(5Y 6/3)の土で、井戸は意図的に埋め戻されている。下段部は曲物内の埋土になり、暗オリーブ色粘質微砂(5Y 4/3)である。下段部の曲物は三段で構成される。検出順に上から「A」「B」「C」と呼称して調査を進めた。

曲物の調査は、遺存が悪いAを半裁し、B・Cは曲物の輪郭を検出しておこなった。曲物は各々が一部重なる形で検出された。

遺物は曲物のほかに、裏込め土に土器器の碎片が1点出土した。



第26図 SE301測量図

出土遺物（巻頭図版1）

曲物は下方のものほど遺存が良好であった。調査段階ではAが直径54cm、高さ50cm、Bが直径45cm、高さ30cm、Cが直径40cm、高さ30cmを測る。なお、曲物の詳細については、第Ⅶ・図版を参照されたい。

時期：造構の配置から14世紀代と想定しておきたい。

S E 302（第27図、図版11-13）

Ⅲ区北西部のI 11区に位置し、試掘時のトレンチ（T 6）に一部切られる。平面形態は円形を呈する。規模は径1m、深さ50cmを測る。断面形態は二段を呈し、上段部は逆台形状、下段部は垂直に掘り込まれている。井戸底は平坦であり、湧水は認められない。埋土は暗オリーブ色粘質土（5Y4/3）で、裏込めは青灰色粘質土（5B6/1）である。

遺物は、上段部から土師器の皿・壺、亀山焼きの大甕、下段部から曲物が出土した。曲物の遺存は悪いく。

出土遺物（第27図）

32は土師器の皿。財部が直線的に立ち上がり、口縁端は丸くおさまる。33～36は土師器の壺である。35は内外面に赤色顔料状の付着物がみられる。37は須恵器の甕。底部はやや上げ底気味で厚い。

時期：遺物、遺構配置と埋土から14世紀前半と考えられる。

S E 303（第28図、図版11-13）

Ⅲ区北部のH・I 10区に位置する。平面形態は円形を呈する。規模は東西1.15m、南北1.35m、深さ66cmを測る。断面形態は緩やかに二段となり、検出面から20cmのところで段をもつ。井戸底は平坦で、湧水は認められない。埋土は三層に分層される。①層が淡黄色粘質土（5Y8/3）、②層がオリーブ黄色粘質土（5Y6/3）に淡黄色粘質土のブロックを含み、③層がオリーブ黄色粘質土である。断面観察から、周辺から流入した土で埋没した状況が読み取れた。

遺物は①・②層から土師器の壺・三足付羽釜が出土した。井戸底からは曲物が出土した。曲物は遺存が悪く、5×15cm大の木片が2点ある。

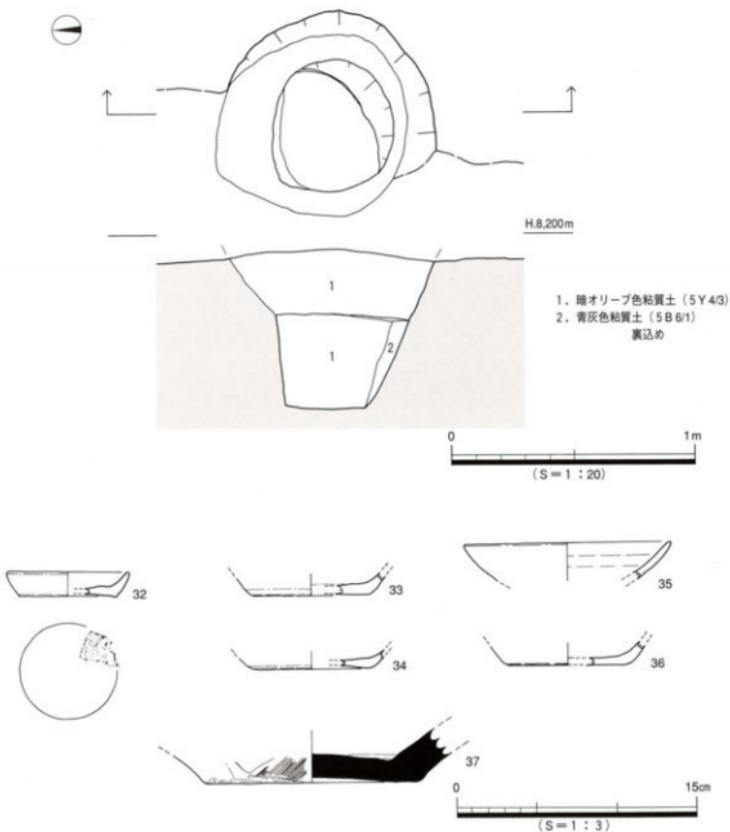
出土遺物（第28図）

38は土師器の壺である。口縁部を欠く。外底には回転糸切りの切り離し痕がみられる。39は土師器の羽釜である。タガは剥落しているものの、口縁端部からやや下がった位置に巡る。

時期：遺物は埋没過程で流入したものと考えられることから、遺物からの時期特定はできない。ここでは造構の配置と埋土から14世紀代と想定しておく。

S E 304（第29図、図版11）

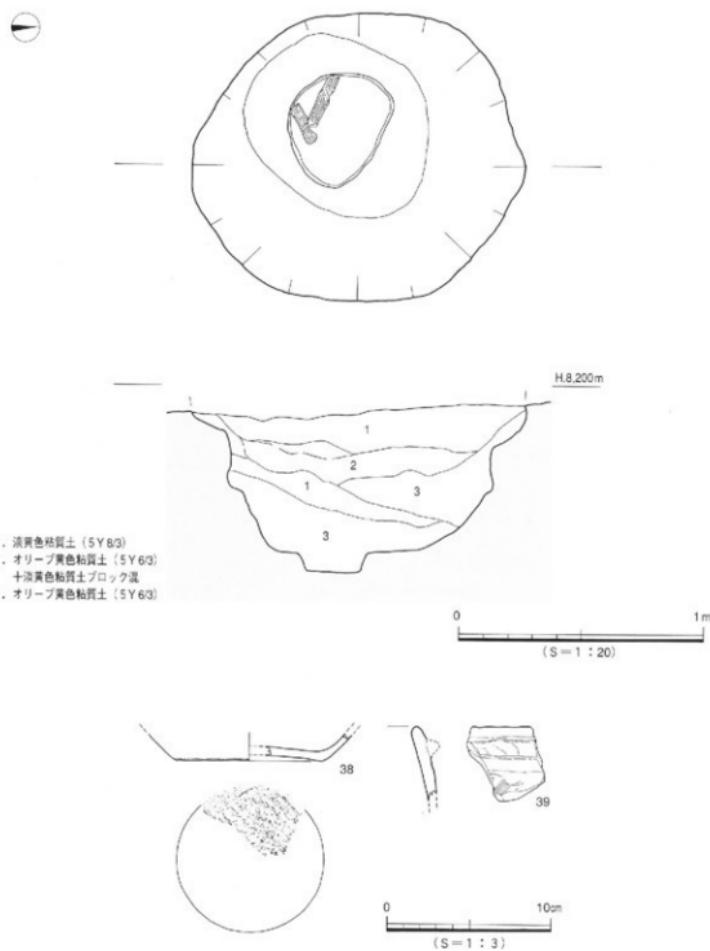
Ⅲ区中央部のI 10区に位置する。平面形態は東西が長い楕円形である。規模は東西1.85m、南北1m、深さは1.3mを測る。井戸を取り廻むように、掘立302がある。位置関係からこの掘立302をS E 304の付属施設と考えた。断面形態は二段となり、上段部は東側と西側にテラスがあり、西側のテラスは幅が狭い。下段部は急傾斜に掘り込まれている。井戸底は平坦である。埋土は三層に分層される。1層が黄色シルト質土（5 Y8/8）、2層がオリーブ黄色粘質土（5 Y6/3）、3層が水分を多く含むオリーブ黄色粘質土（5 Y6/3）である。



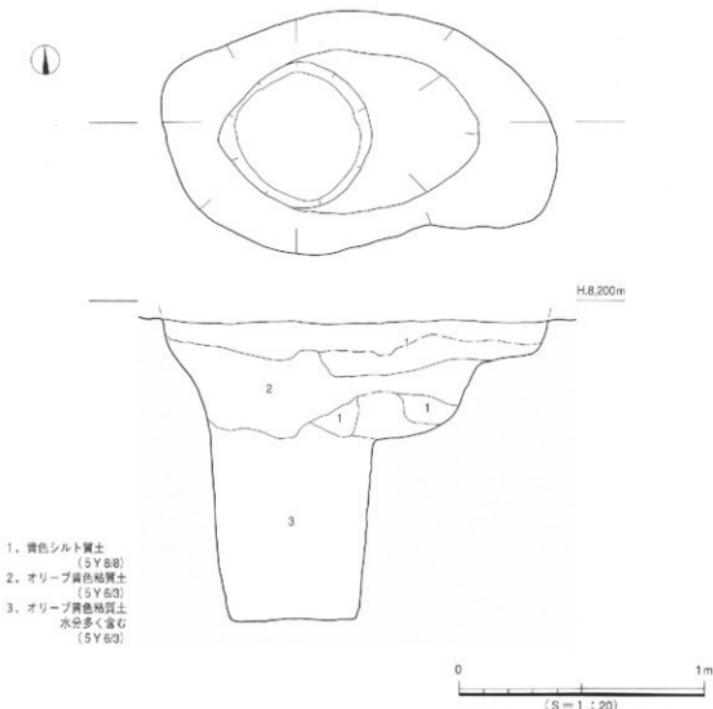
第27図 SE302測量図及び出土遺物実測図

遺物は、3層から土師器の皿・壺・三足付羽釜のほかにモモ核1点が完存で出土した。土器は碎片のため図化できない。

時期：遺物と遺構配置から14世紀代と想定しておく。



第28図 SE303測量図及び出土遺物実測図

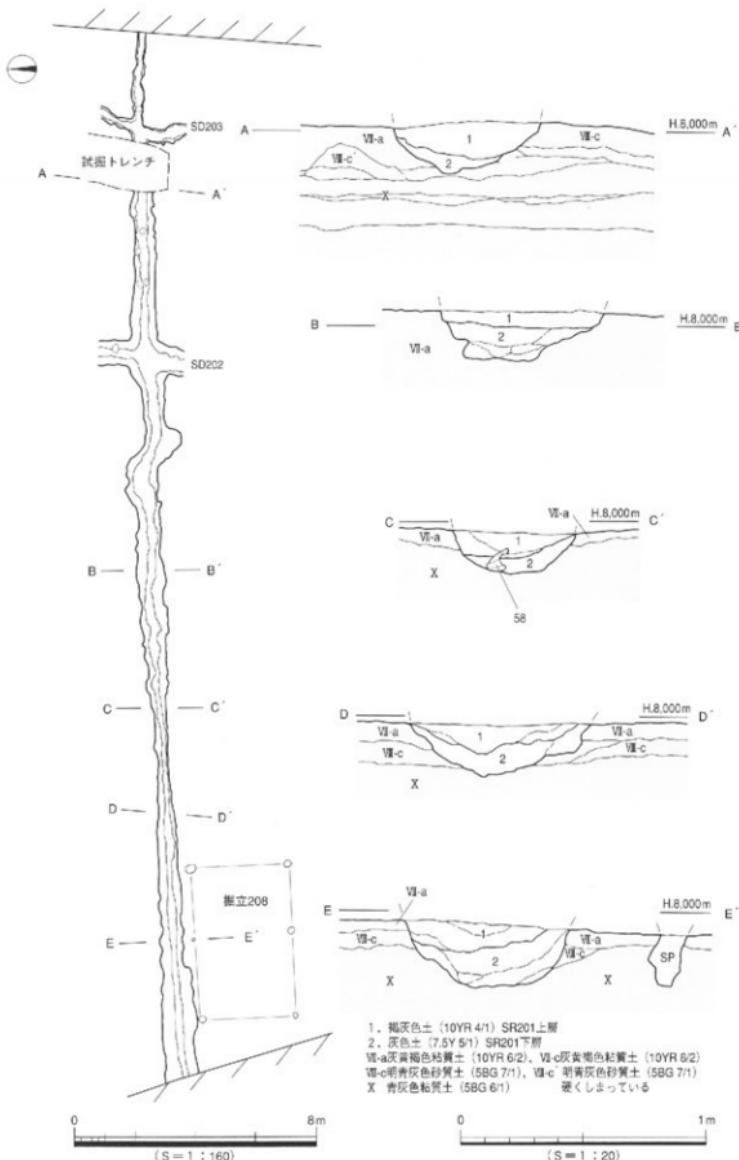


第29図 SE304測量図

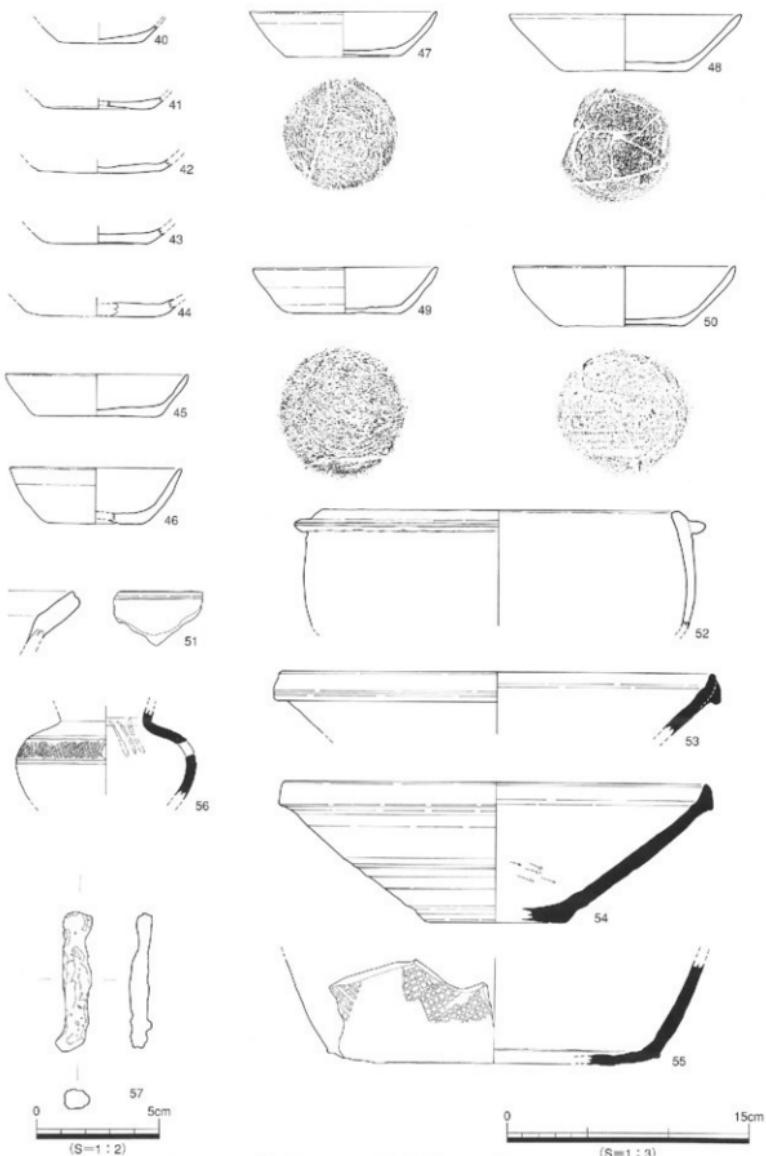
3. 溝

S D201 (第30図、図版5・7・9)

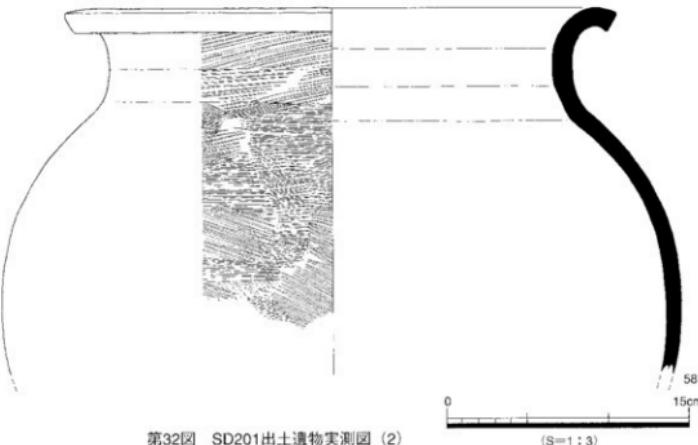
II区北半部のF 4～8区に位置し、東西方向にのびる。規模は、検出長34m、幅0.2～1.5m、深さ17～25cmを測る。横断面形態は緩やかなU字形を呈する。溝底は東から西に向かってわずかに傾斜している。溝底の比高差は30cm前後を測る。埋土は二層に大別される。上層は褐色系(10YR4/1)の土、下層は灰色系(7.5Y5/1)の上である。溝底に砂は堆積していない。遺物は上層と下層から出土している。遺物の多くが溝の西側部分から出土した。土師器の壺・壺・三足付羽釜・土鍋、束縛系須恵器のすり鉢、魚住窯産の壺、鉄釘がある。同一個体と判断される遺物が各層から出土しており、このことは、本遺構が短期間に埋没したことを示唆するものである。このほかに多量の三波川変成岩類が溝の東半部で出土した。S D202の南半部とS E201からも同岩類がみられるので、本遺構から出土した石の多くはS E201に用いられたものと考えられる。S D202や203との合流地点の精査を試みたところ、遺構の切り合い関係は認められなかった。



第30図 SD201測量図



第31図 SD201出土遺物実測図（1）



第32図 SD201出土遺物実測図 (2)

出土遺物（第31・32図、図版18・19）

40~50は土師器である。40は皿で、口縁部を欠く。外底には糸切りの切り離し痕と板目状の圧痕が残る。41~50は壺である。外底は糸切りの切り離し痕と板目状の圧痕を残すものが多い。45は口縁部の直下が若干厚く、胴下半がわずかに内湾しながらすぼむ。胎土は他に比して良好であり、混和材が少ない。46は比較的厚いつくりである。胴部の立ち上がりは急で、碗に近い形状である。51は土師質の上鍋である。口縁部を指で屈曲させるために、内面には稜線が巡る。52は土師質の三足付きと考えられる羽釜である。口縁部は内湾し、タガは口縁部近くに貼り付けられる。53~56は須恵器である。53~55は中世須恵器である。53と54は東播系のこね鉢である。53は口縁端部が上下に大きく拡張され、「く」字状の形態に近い縁帯を形成する。54は口縁端部が上方に拡張される。内面下半は磨滅が著しく認められ、使用頻度が高かったことを示している。55は壺の底部であろうか。復元底径18.8cm。外面は格子叩きの後、一部ナデ消される。56は壺である。口縁部と胴下半を欠く。埋没過程で流入した可能性が高い。57は鉄器。58は中世須恵器の壺である。扁球形と考えられる胴部に、短くや内傾する頸部がとりつく。口縁部は短く外反し、端部は面取りがなされる。頸～胴部外面には平行叩きが顕著に残る。内面の道存は悪く、剥落するところが多い。魚住窯産の可能性がある。

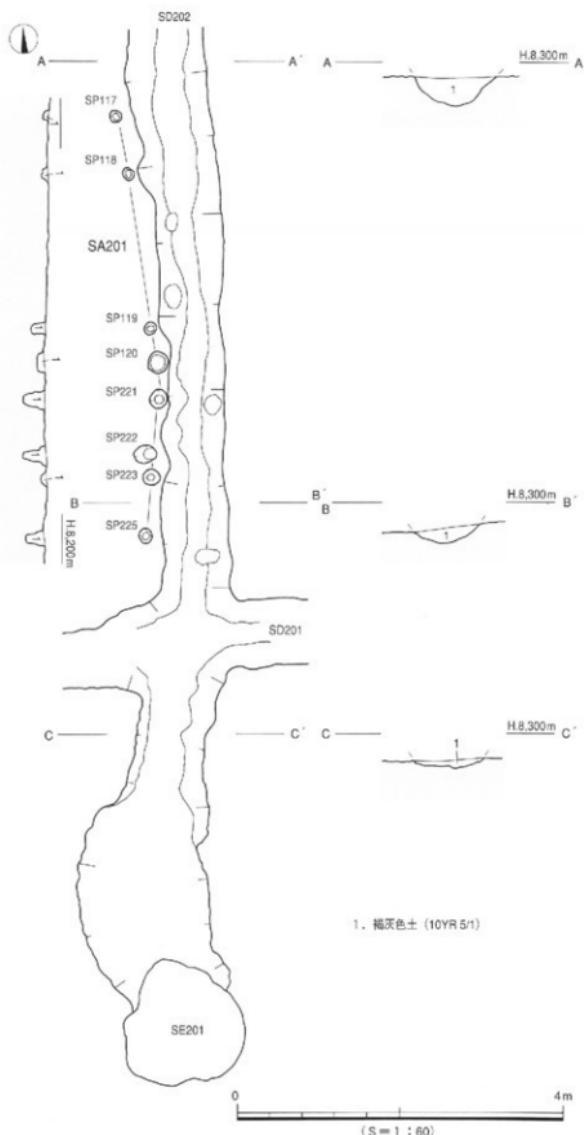
時期：遺物から14世紀前半と考えられる。

SD202（第33図、図版5・7）

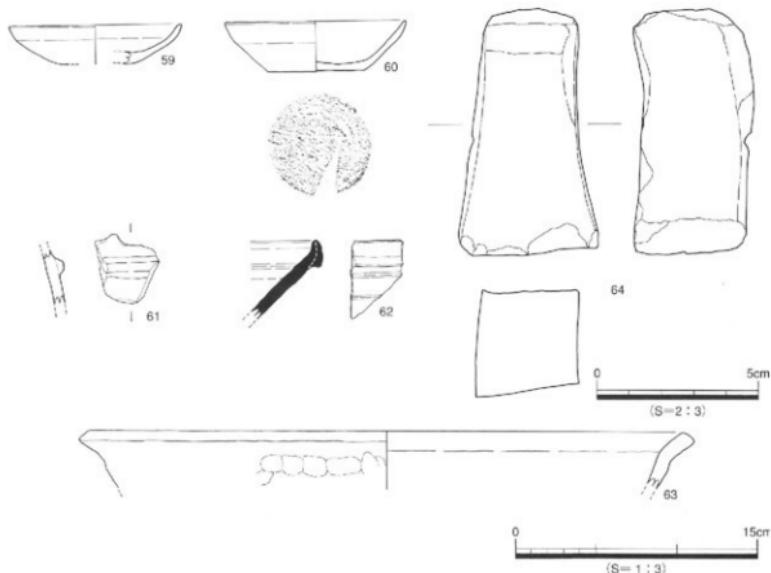
II区北東部のE・F7区に位置し、南北方向にのびる。SD201と直交し、溝の南端はSE201に接続する。規模は、検出長11m、幅0.6~1.6m、深さは10cmを測る。横断面形態は緩やかなU字形を呈する。溝底は北から南へ傾斜し、比高差7cmを測る。埋土は褐色土（10YR5/1）である。

遺物は上師器の壺・上鍋、瓦質の三足付羽釜、東播系須恵器のすり鉢、鉄器、手持ちの砥石が出上している。

付帯施設は柵列SA201である。柵列は溝北部の西側に構築されており、溝と並行の位置関係にある。



第33図 SD202・SA201測量図



第34図 SD202出土遺物実測図

出土遺物（第34図、図版19）

59と60は土師器の壺である。59は底部を欠く。胴部の立ち上がりは緩やかで、口縁部はやや内湾気味におさまる。60は口縁部直下が若干厚く、胴下半部がわずかに内湾しながらすぼまる。外底面には糸切りの切り離し痕がみられる。61は土師質の羽釜で、口縁端部を欠く。62は須恵器のこね鉢である。口縁端部は大きく上下に拡張される。63は土師質の土鍋である。口縁部を指で屈曲させるため、内面に棱線が巡る。復元口径は36cm。64は石英粗面岩製の砥石である。横断面で表現されるように、上下の端面をのぞく4面を機能面として利用している。

時期：遺物、遺構の位置関係、埋土から14世紀前半と考える。

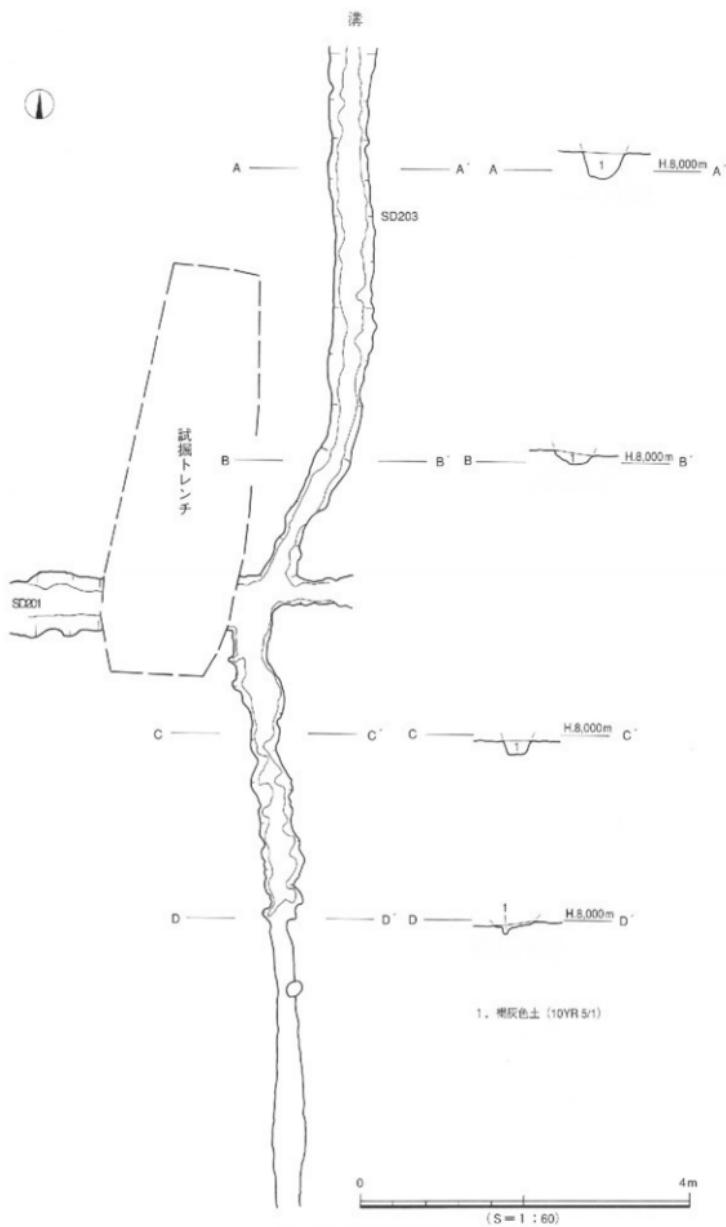
SD203（第35図、図版5・9）

II区北東部のE～G 8区に位置する。南北方向に続き、北側は調査区外に延び、南側は削平により途切れる。SD201と直交し、SD202とは併行の位置関係にある。規模は、検出長14.5m、幅0.2～0.5m、深さ20cmを測る。横断面形態は逆台形を呈する。溝底は北から南へ傾斜し、比高差8cmを測る。埋土は褐色土（10Y R 5/1）である。遺物は土師器の皿・壺・三足付羽釜の脚部が出土した。

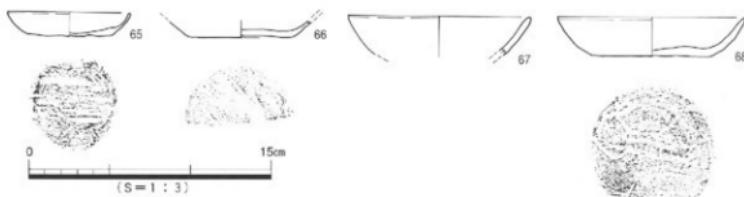
出土遺物（第36図、図版19）

65～68は土師器である。65は皿で、口縁部は内湾して立ち上がる。外底は糸切り離しの痕と板目状の圧痕が残る。66～68は壺である。68は口縁部直下がやや厚く、胴下半がわずかに内湾する。

時期：遺物から時期を特定することは困難である。遺構の配置と埋土からSD201に伴うものと想定



第35図 SD203測量図



第36図 SD203出土遺物実測図

される。したがって、14世紀前半に時期比定される。

S D204 (第37図、図版5)

II区中央部よりのH 5～8区に位置する。東西方向に延び、調査区外に続く。西側は擾乱により切られている。検出段階では、H 7区で7mにわたって溝が途切れている。S D201とは並行の位置関係にあり、11～12mの間隔がある。規模は、検出長19m、幅0.3～0.4m、深さ10cmを測る。溝底は東から西へ傾斜し、比高差は5cmを測る。埋土は黄灰色土 (2.5Y5/1) である。遺物は出土していない。

時期：遺構の配置から14世紀段階に時期比定しておく。

4. 構列

S A201 (第33図、図版5・7)

II区北東部のE・F 7区に位置する。S D202に併設された南北方向の構列である。柱穴は、北からS P117～120・221～223・225の8基で構成される。規模は全長3.5mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。柱穴の規模は径18～30cm、深さ7～30cmを測る。埋土は褐灰色土 (10Y R5/1) である。埋土には炭化物の細片が混じる。遺物は出土していない。

時期：S D202に併設されていることから、14世紀前半と想定される。

S A202 (第18図、図版5・7)

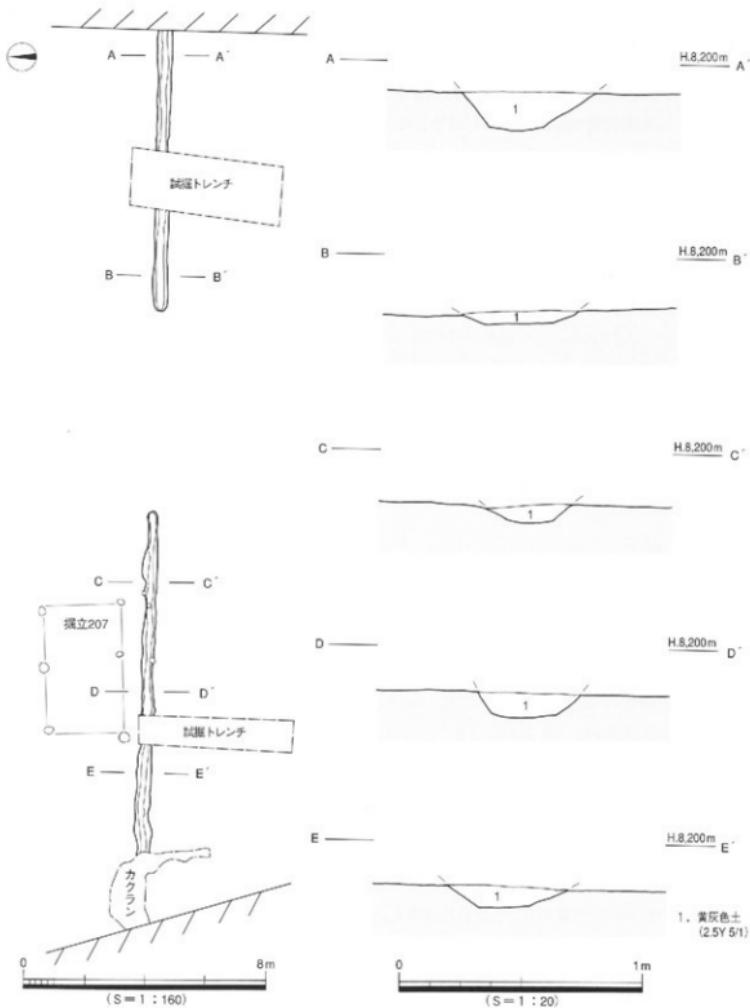
II区北端部のE・G 8区に位置する。掘立205の東に併設された南北方向の構列である。柱穴は、北からS P82・98・102・103の4基で構成される。規模は全長4.9mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。柱穴の規模は径20～30cm、深さ12～41cmを測る。埋土は褐灰色土 (10Y R6/1) である。遺物はS P103から土器が出土したが、碎片のため固化できない。

時期：掘立205の付帯施設から14世紀前半と考えられる。

S A203 (第19図、図版5・7)

II区中央北端部のE・F 6区に位置する。掘立206の東に併設された南北方向の構列である。柱穴は、北からS P 6・48・257・72・75・79の6基で構成される。規模は全長4.5mを測る。柱穴の平面形態は、円形を呈する。柱穴の規模は径10～20cm、深さ4～30cmを測る。埋土は褐灰土 (10Y R6/1) である。遺物はS P 6から薄い剥片状の石が20点余り出土した。

時期：掘立206の付帯施設から14世紀前半と考えられる。



第37図 SD204測量図

S A 204 (第18図、図版5・7)

II区中央北端部のE・F 5区に位置する。掘立206の西に併設された南北方向の柵列である。柱穴は、北から S P 36・55・58の3基で構成される。規模は全長2.8mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。柱穴の規模は径10~15cm、深さ1~9cmを測る。柱穴の遺存が浅いことから、柵列がS P 36の北に延びる可能性がある。埋土は褐灰色土(10Y R6/1)である。遺物は出土していない。

時期：掘立206の付帯施設から14世紀前半と考えられる。

S A 301 (第38図、図版11)

III区西部のH~K10区に位置する。南北方向の柵列である。柱穴は、北から S P 304・311・321・324・329・336・344・387・391・408・418の11基で構成される。規模は全長20mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。柱穴の規模は径10~20cm、深さ10~20cmを測る。S P 304はS R 301を切り込んで構築されている。これは、柱穴がS R埋没後に構築されたことを示している。埋土は褐灰色土(10Y R5/1)である。遺物はS P 321からは土師器の皿・壺、S P 324からは土師器の皿と須恵器こね鉢が出土した。

出土遺物（第38図）

69はS P 324出土の須恵器こね鉢である。

時期：遺物から14世紀代と考えられる。

5. 土 坑

S K 201 (第39図、図版5・7)

II区北部のE・F 7区に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は東西4.2m、南北2.3m、深さ15cmを測る。横断面形態は浅い皿状を呈する。埋土は褐灰色土(10Y R6/1)で炭化物粒が混じる。遺物は土師器の土鍋・鉢、瓦質の三足付き羽釜が出土した。

出土遺物（第40図、図版20）

70~72は土師質の上器である。70・71は上鍋で、70は折り曲げにより口縁部を形成し、内面には棱が付く。外面には炭化物の付着がみられる。71は直口とする口縁部をもつ。口縁端部には横ナデ調整が施され、内側にわずかにつまみだしたような断面形態を呈する。72は三足付き羽釜の口縁部である。口縁部が内傾して立ち上がる。口縁部から少し下がった位置にタガが貼付される。

時期：遺物から14世紀前半と考えられる。

S K 203 (第41図、図版5~7)

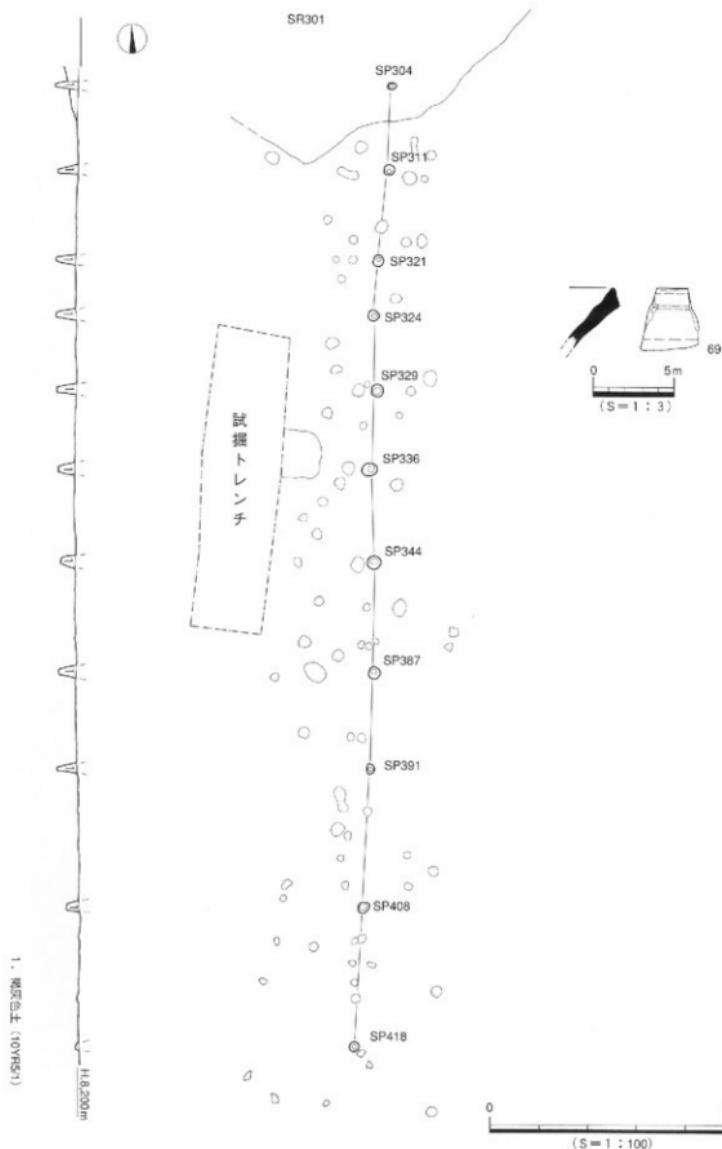
II区北部のE 7区に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈するものと考えられる。規模は東西1.1m、南北検出長1.25m、深さ30cmを測る。横断面形態は逆台形を呈する。埋土は褐灰色土(10Y R6/1)である。遺物は土師器の壺と須恵器こね鉢が出土した。

出土遺物（第41図、図版20）

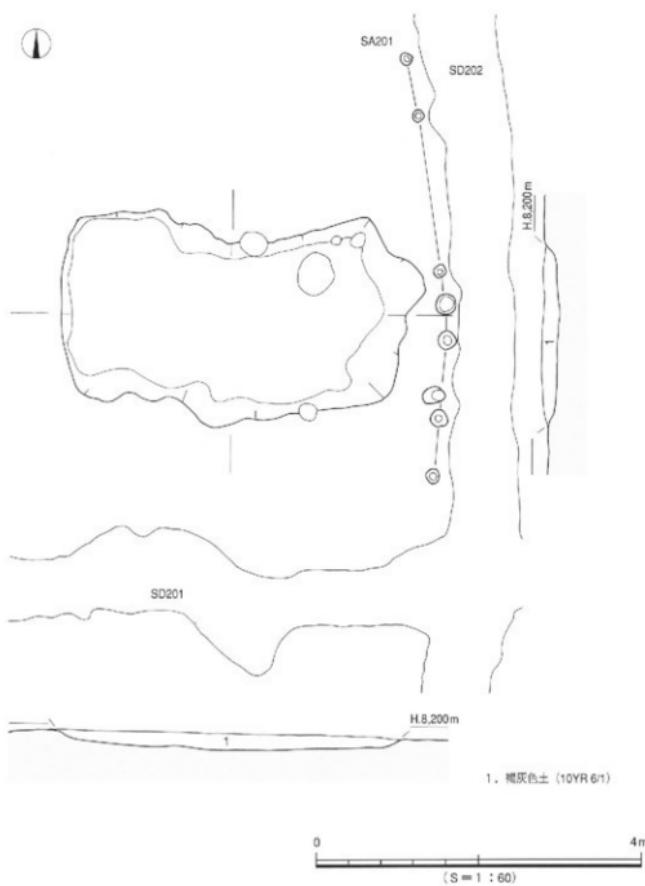
73~74は土師器の壺である。いずれの外底にも糸切り砸しの後、板口状の圧痕が付く。75は須恵器のこね鉢である。口縁端部は上方に大きく拡張される。

時期：遺物と埋土から14世紀前半と考えられる。

土 坑

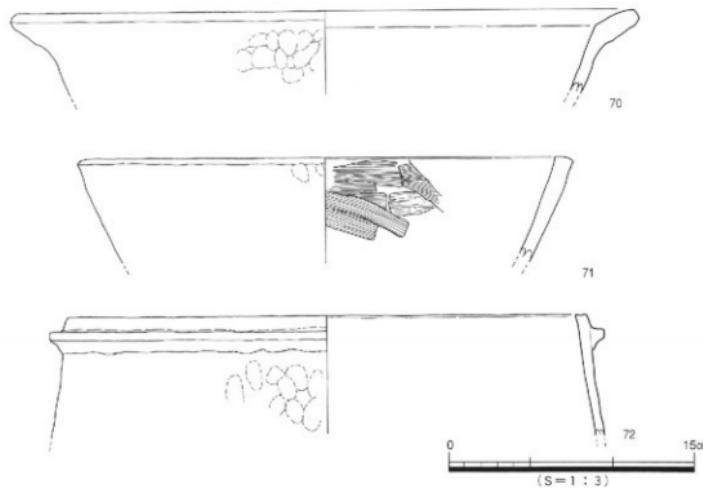


第38図 SA301測量図及び出土遺物実測図

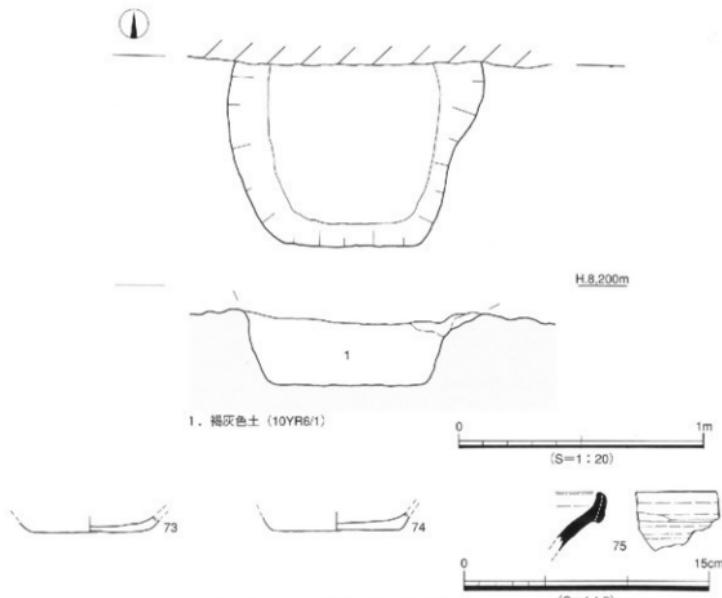


第39図 SK201測量図

土 坑



第40図 SK201出土遺物実測図



第41図 SK203測量図及び出土遺物実測図

6. 性格不明遺構

S X201 (第42図、図版5・10)

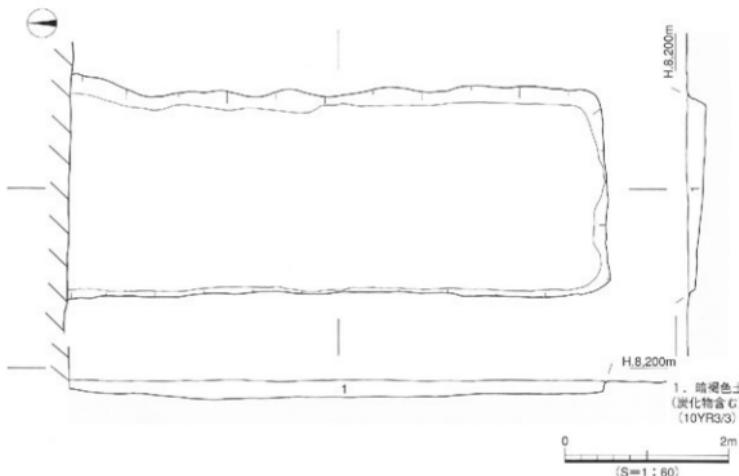
II区北部のE・F 8区に位置する。北は調査区外へ続く。平面形態は長方形を呈するものと考えられる。規模は東西2.4m、南北検出長6.6m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形を呈する。床面は平坦のところが多く、北側の一部に凹凸がみられた。埋土は炭化物を多量に含んだ暗褐色土 (10YR 3/3) である。

遺物は北側で多く出土した。遺物には土師器の皿・壺、瓦器碗、須恵器のこね鉢、貿易陶磁器、鉄器、鉄滓、台石がある。

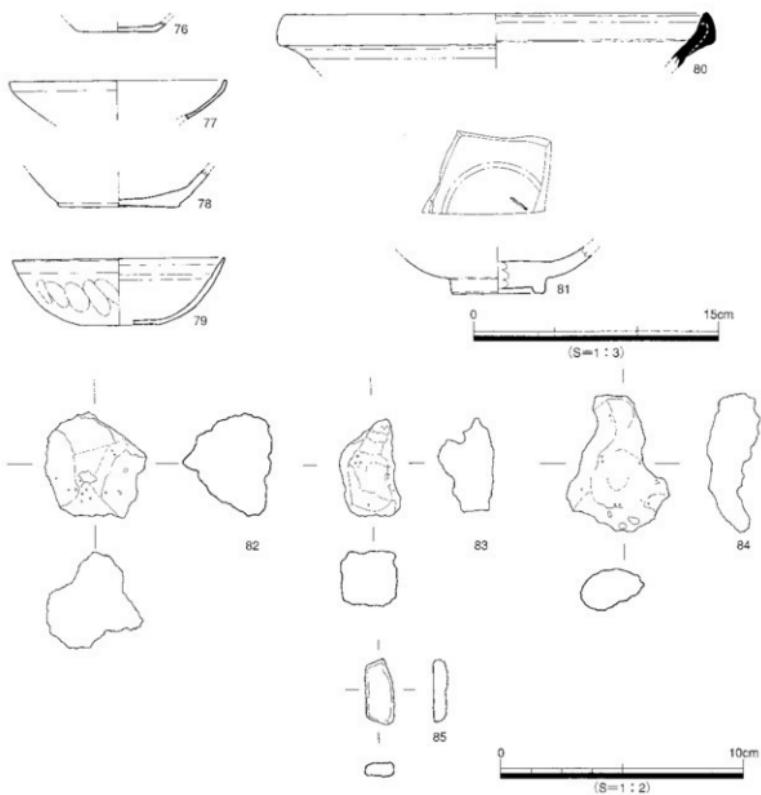
出土遺物 (第43図、図版20)

76~78は土師器である。76は皿である。口縁部を欠く。外底には板目状の圧痕が残る。77~78は壺である。77は胴部が直線的に立ち上がり、口縁部は強いヨコナデによりわずかに内傾する。78は底部にわずかに立ち上がりがみられる。79は瓦器碗で、口縁部がやや丸みをもちらながら立ち上がる。胴部外面には指頭痕がわずかにみられる。内外面には焼成の差異が認められ、外面は口縁部付近が乳灰色、底部側が黒色を呈し、内面は大半が乳灰色で、底部近くに黒色が一部みられる。80は東播系の須恵器こね鉢である。口縁部が上方に拡張される。口端の外面には、自然釉が付着する。81は貿易陶磁器で、龍泉窯系青磁碗である。輪高台をもつ。胎土はきわめて良好であり、精製されている。82~85は鉄滓である。

時期：遺物から14世紀前半と考えられる。



第42図 SX201測量図



第43図 SX201出土遺物実測図

7. 柱 穴

S P 231 (第44図、図版10)

II区東部のE 7区に位置する。平面形態は不整円形を呈する。規模は径24cm、深さ27cmを測る。第VI層を精査中に遺物(86)を確認した段階では、遺構の輪郭が確定できなかった。第VII層の精査を進めたところ遺物が重なった状態で出土した。遺構の輪郭が確定したのは、第VII層上面である。本遺構は本来、第VII層上面で構築されたものである。

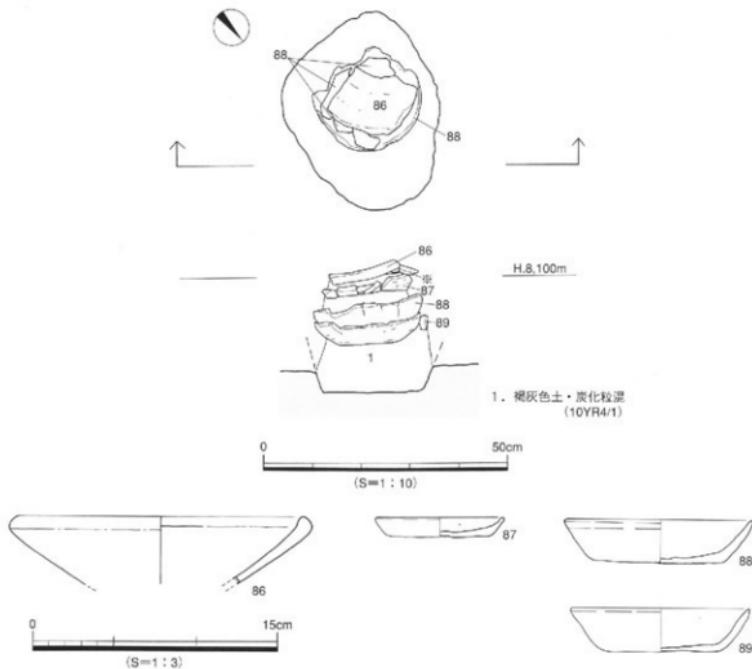
遺物はすべて土器器で、下から壺(89)、壺(88)、皿(87)、壺、鉢(86)の順である。壺と皿を正置した形で積み上げ、その上に打ち欠いた鉢の口縁部が置かれ、口縁部は内面を上にしていた。鉢(86)は遺構の形状に合うように打ち欠かれ、9×7cmの大きさに整形されている。遺物の取り上げ

段階の所見として、※と87の取り上げ後に、炭化した板が確認されたことを付記しておく。遺存が悪く、炭化材の取り上げはできなかった。本例は、土器を用いた柱穴内祭祀とみることができる。

出土遺物（第44図、図版21）

86～89は土師器である。このほかに同化できないが环が1個体出土した。これは86と88の間に位置していた。86は鉢で、口縁部片である。口縁端部がやや肥厚し、内端部が内側に摘み上げられている。端部は丸くおさめられる。内面の調整は丁寧なナデ仕上げである。胎土は長石と石英を含むが概して良い。形態より、他地域からの搬入品、ないしは模倣品と判断される。87は皿である。外底には、回転糸切りの切り離し痕と板目状圧痕がみられる。88・89は环である。いずれも器面の遺存が悪く、磨滅が著しい。そのため、器面の調整が確認できない。

時期：遺物から14世紀前半と考えられる。



第44図 SP231測量図及び出土遺物実測図

8. 包含層

包含層は各区で確認された。包含層の遺存はⅡ・Ⅲ区が良好である。とくに調査区の北半における遺存が良好で、遺物の出土も北半が多い。ここでは、包含層、耕作土、表探資料を取り上げて報告する。

I区出土遺物（第45図、図版22）

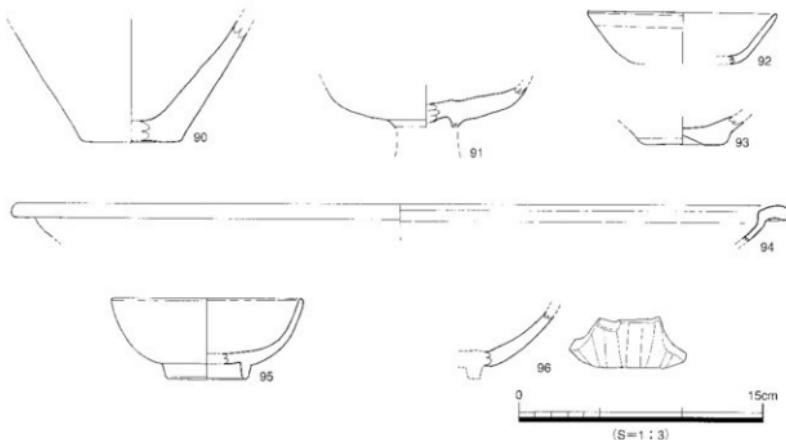
90-91はIV-e層出土の弥生土器である。90は壺の底部。平底で、胴下半部の立ち上がりは直線的である。91は高坏で、坏部の底部片である。92はIV-b層出土の土師器の坏である。底部を欠く。93はII-a②層出土の弥生土器で、壺の底部である。中央がやや凹んだ上げ底を呈する。94はII-a②層出土の内耳鉢である。口縁は大きく外反し、短い。口縁端部は丸くおさまる。95はI-b層出土の陶磁器の碗。96は表探品で、貿易陶磁器である。龍泉窯系青磁の碗で、外面には錦地文が施される。

II区出土遺物（第46-47図、図版22）

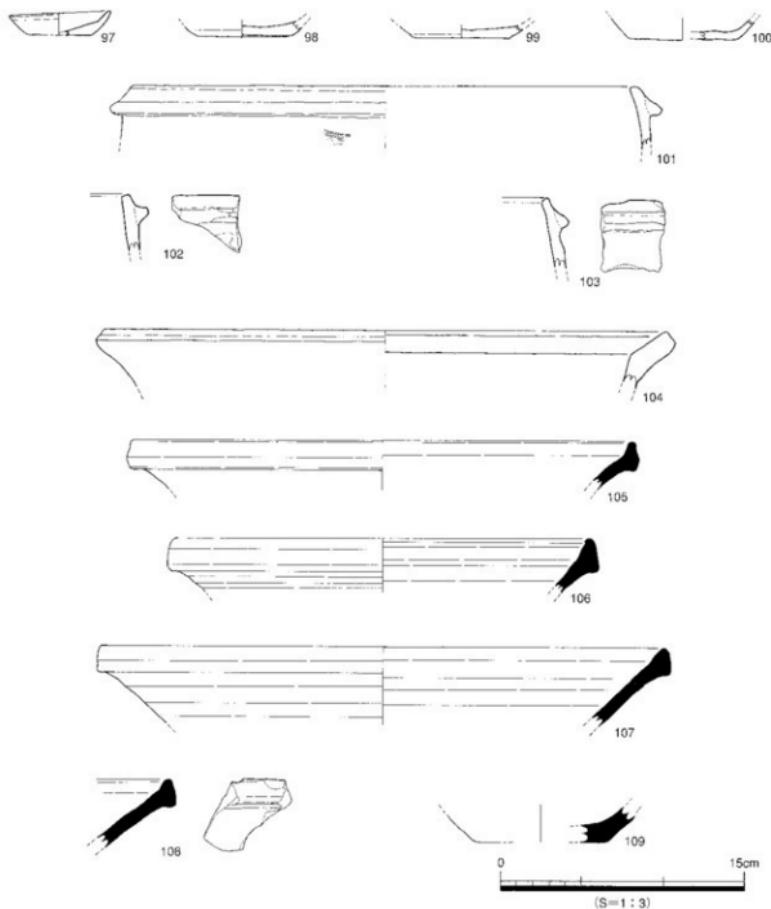
すべてがVI層出土である。97は土師器の小皿で、98-100は土師器の坏である。101-103は土師器の三足付き羽釜である。101はF8区出土品で、口縁は内湾し、タガは口縁近くに貼付される。104はF8区出土の土師器の土鉢である。口縁部を指で屈曲させるために、内面には棱線が巡る。105-108は中世須恵器のこね鉢、109は中世須恵器の底部である。110-114は鉄滓で、110は大型の碗形滓である。表面には細かい気泡が多くみられる。

III区出土遺物（第47図、図版22）

すべてがVI層出土である。115は繩文土器である。深鉢の肩部片で、内外面には横方向の条痕調整が施される。出土地点からS R301に伴う可能性が高い。116-118は土師器の皿、119-120は坏である。



第45図 I区包含層出土遺物実測図



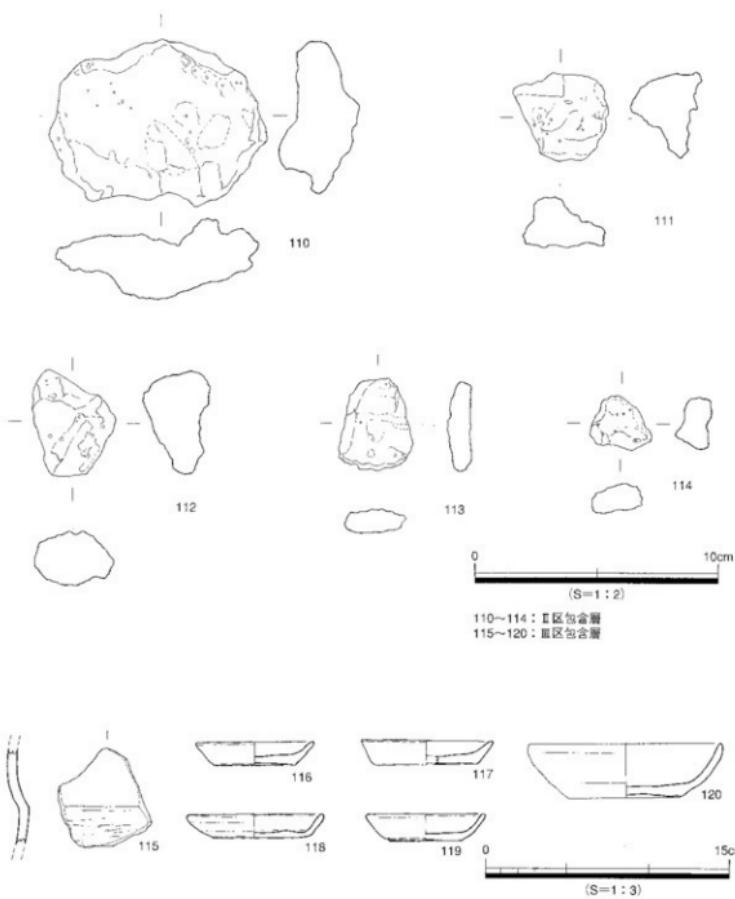
第46図 II区包含層出土遺物実測図(1)

第VI章 近世以降の記録

1. 挖立柱建物址

掘立201（第48図、図版5）

II区北東部のFG8区に位置し、SD201を切る。梁間3間、桁行4間の南北に細長い総柱建物である。柱穴はSP166~176・178・228・230の14基で構成される。建物規模は、梁間の全長が4.5~4.8m、

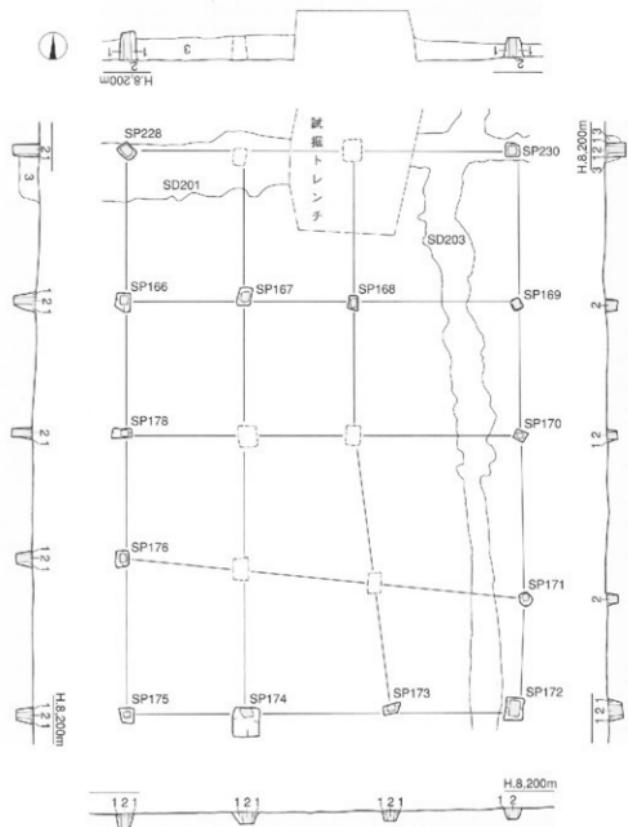


第47図 II区包含層出土遺物実測図(2)及びIII区包含層出土遺物実測図

桁行の全長が6.6~6.7mである。柱穴の平面形態は方形と長方形である。規模は一辺10~34cm、深さ15~32cmを測る。埋土は灰黄褐色土（10Y R 6/2）である。各柱穴で柱痕跡を確認することができた。柱痕跡の埋土は、にぶい黄橙色土（10Y R 7/3）である。柱痕跡は一辺14cmの正方形である。遺物は出土していない。

時期：柱穴の平面形態、柱痕跡の形態、埋土が他の中世遺構と異なることと、本遺構がSD201を切ることから近世以降と想定しておく。

近世以降の記録



1. 灰黄褐色土 (10YR6/2)
2. にぶい黄橙色土 (10YR7/3)…柱底
3. 褐灰色土 (10YR4/1) SD201埋土



第48図 振立201測量区

遺構・遺物一覧

遺構・遺物一覧 一凡例一

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の観察一覧である。

作成は加島が担当した。

(2) 遺物観察表の各掲載については、以下の通りである。

法量欄…()：復元推定値

形態・施文欄…土器の各部名称を略記した。

例) 口→口縁部、胴→胴部。

胎土・焼成欄…胎土層では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒・長・長石、石→石英、金ウ→金雲母、精→精製土。()中の数値は、混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長 (1~4)、多→「1~4 mmの大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表2 自然流路一覧

流路 (SR)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
201	35~L8K	U字形	23.5×19.5×0.2~0.7	西→東	黄褐色粘土上 灰白色砂質土 等々	縄文時代～ 弥生時代	縄文後期～ 弥生時代	
301	G11~H12区	崖やかま芋形	10×15×0.2	北東→南西	黒褐色粘土上 石器		縄文後期	

表3 掘立柱建物址一覧

掘立 柱 (間)	方 向	柱 行		梁 行		床面積 (m ²)	時 期	備 考
		実長 (m)	柱間寸法 (m)	実長 (m)	柱間寸法 (m)			
201	3×3 南北横	6.7	1.72・1.88・1.40・ 1.60・1.12・1.80・ 1.41・1.74	1.54	1.20・1.50・1.30	N-S	30.4	江戸/明治
202	2×3 東西横	7.9	2.34・2.44・2.40・ 2.46・2.60・2.50	3.3	1.60・1.30・1.40・ 1.40	E-3.5'-N	26.0	14C代 SE201の付帯施設の 可能性がある
204	1×3 東西横	4.1	1.12・0.18・1.90・ 2.30・0.56・0.62	1.32	1.32・1.40	E-3.5'-N	5.4	14C前半 SK202が伴う
205	1×3 南北横	5.4	1.46・1.44・1.60・ 1.36・1.36・1.80	2.7	2.12・2.70	N-1'-W	14.5	14C前半 SA202が伴う
206	1×3 南北横	5.5	1.50・1.40・1.76・ 1.60・1.34・1.70	3	0.66・0.96・0.36	N-S	16.5	14C前半 SA203・204が伴う
207	1×2 東西横	4.1	2.40・1.50・1.70	2.4	2.14・2.40	E-3.5'-N	9.8	14C前半 SK201が伴う
208	1×2 東西横	4.7	2.56・1.96・2.50・ 2.08	2.9	2.86・2.90	E-4'-N	13.6	14C前半
301	1×2 東西横	3.7	1.44・1.94・2.14・ 1.24	1.5	1.70・1.50	E-2'-N	5.5	14C代
302	1×1 南北横	1.6	1.54・1.60	1.2	1.20・1.46	N-2'-W	1.9	14C代 SE304の付帯施設

表4 井戸一覧

井戸 (SE)	地 区	平面形	断面形	規 模 (m) 長さ(直径)×幅(壁厚)×深さ		埋 土	出土遺物	時 期	備 考
				柱	壁				
201	G7区	格円形	二段掘り	1.6×1.45×1.37		灰白色土を含め①~④層	上層部 古世縄文 云取内器	14C前半	石組み、土器が伴う
301	J10区	不規円形	一段掘り	1.34×1.25×1.50		黄色シルト乳山を含め①②層	土器	14C代	二段の土器
302	I11区	円形	二段掘り	1.0×0.5		昭オリーブ色粘土質土	土器 灰土器	14C前半	泥モレンジに始まる
303	H-110区	円形	一段掘り	1.35×1.15×0.66		淡青色粘土質土を含め1~3層	土器等	14C代	土器
304	I10区	格円形	二段掘り	1.85×1.00×1.30		黄土シルト質土を含め1~3層	土器等 モザイク	14C代	

遺構一覧

表5 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
201	E4~E8区	直やかく丁字形	31×0.2~1.5×0.17~0.25	東西	褐色土 灰黑色土	上師器 須恵器	14C前半	
202	E~F7区	直やかく丁字形	11×0.6~1.5×0.10	南北	褐色土+	土師器 須恵器	14C前半	SA201が伴う
203	E~G8区	逆台形	14.5×0.2~0.5×0.20	南北	褐色土+	上師器	14C前半	
204	H5~H8区	直やかく丁字形	19×0.3~0.4×0.10	東西	褐色土+		14C代	

表6 棚列一覧

棚列 (SA) (間)	規 模 (m)	方 向	柱間寸法 (m)		柱穴規模 径×深さ (m)	時 期	備 考	
			実長 (m)	柱間 (m)				
201	7	南北	3.5	SP127~128間(20.0) SP129~130間(10.2) SP131~132間(10.3)	SP118~119間(1.8) SP120~121間(1.8) SP122~123間(1.1) SP123~125間(0.54)	0.18~0.3×0.07~0.3	14C前半	SD202の付帯施設
202	3	南北	4.9	SP82~95間は1.2 SP96~102間は2.0 SP103~105間は1.1	SP98~99間(1.2) SP104~105間(1.2)	0.2~0.3×0.12~0.41	14C前半	掘立205の付帯施設
203	5	南北	4.5	SP16~18間(1.38) SP19~20間(1.08) SP17~18間(1.04)	SP14~15間(1.1) SP16~17間(1.08) SP17~18間(1.08)	0.1~0.2×0.04~0.3	14C前半	掘立206の付帯施設
204	2	南北	2.8	SP36~35間は1.4 SP35~34間は1.3	SP35~36間(1.3)	0.1~0.15×0.01~0.09	14C前半	掘立206の付帯施設
301	10	南北	20	SP104~115間(1.54) SP105~113間(1.64) SP106~114間(1.64) SP107~112間(1.16) SP108~117間(1.17) SP109~118間(1.26)	SP104~115間(1.0) SP106~117間(1.0)	0.1~0.2×0.1~0.2	14C代	N~N' E

表7 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
201	E~F8区	隅入長方形	直い面状	4.2×2.3×0.15	褐色土+	上師器 瓦質土器	14C前半	
202	F7区	隅入長方形	逆台形	0.7×0.5×0.16	褐色土+	土器	14C前半	掘立202に伴う
203	H8区	隅入長方形	逆台形	1.25×1.1×0.3	褐色土+	土師器 瓦質土器	14C前半	
204	H6区	不透円形	逆台形	0.50×0.35×0.60	褐色土+	上師器 瓦質土器	14C前半	掘立206に伴う 若窓穴

表8 性格不明遺構一覧

構造 (SX)	地 区	平面形	断面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
201	F7区	長方形	逆台形	6.6×2.4×0.2	15.84以上	褐色土+	上師器 瓦質土器	14C前半	

表9 SR 201出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形 種・施 文	調 整		胎 土	焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	漆鉢	残高 3.7	L字型側面に「D」字状の刻口。 は鉢底近くに施文を施す。底部を「D」字状に削り取る。	マツツ	ヨコナギか?	長・石(1~2) 多く含む	○		14
2	漆鉢	残高 5.5	「」縁記を欠く。底部は周縁外反する。	横方向の柔軟 ナラ		長・石(1~2) 多く含む	○		
3	漆鉢	口径(25.6) 残高 4.5	底部で膨出し、口縁部は「く」字状を呈す。 施文が平面中心につまみ上げられる。	ていねいなヨコナギ	ヨコミガキ	長(1)	○		14
4	漆鉢	口径(35.0) 残高 3.0	底部で膨出し、「」字状を呈す。 施文が内面上方につまみ上げられる。	ていねいなヨコナギ	ヨコミガキ	長(1)	○		14
5	漆鉢	残高 4.8	肩部で屈曲する。	ていねいなヨコナギ	ヨコミガキ	楕	○		14
6	甕	残高 10.0	外面に漆の剥落がみられる。	タテハケ(7cm/cm)	ナタハケ(2本/cm)	長・石(1~2)	○		14

遺物観察表

表10 SR201出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
7	壳	残高 16.8	肩部の張りは強く、底部は小さいボタン状を呈する。	タテキ+タテハケ	ハケメ(8本/cm)	長・石(1~3)多く含む	○		14
8	麦	底径 4.7 残高 7.0	くびれをもつつげ底。ミニチュアか?	タテミカキ	ナシ	長・石(1~3) 多く含む	○		14
9	豆	口徑(16.8) 残高 7.4	「コ」字縫合の複合1種。 2次口縫合に波状文が残る。	鶴タテミガキ	ナシ	長・石(1~5) 多く含む	○		14
10	豆	底径 (7.1) 残高 8.0	やや丸みをもつ平底。	タテハケ(10本/α)	マメツ	長・石(1~5) 金ウ(1)	○		
11	钵	口径 16.2 底径 14.5 残高 4.6	小形品。ゆるやかに外反する口縁部。底部 花に無い手底。	ナナメハケ(10本/α)	ヨコ ナナメハケ(10本/α)	長・石(1) 多く含む	○		15

表11 SR201出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図 版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
12	打製石器	完存	サスカイト	2.1	1.4	0.3	0.63	半基盤式	15
13	スレイバー	完存	サスカイト	4.3	3.7	0.62	10.63	梗長削片を素材とする	15

表12 SR301出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図 版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
14	打製石器	側縁一部欠	サスカイト	5.0	1.7	0.45	3.45	円基盤式	15
15	石 砕	完存	サスカイト	10.9	7.5	3.0	340		15
16	距 石 鋸	完存	三波川変成岩類	10.4	8.3	2.1	287.92		15
17	敲 石	完存	安山岩系か	10.9	8.7	4.2	654		15

表13 挖立204出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
18	坏	口徑(13.4) 底径 2.1	底部はほぼ直線的に開く。	マメツ	マメツ	長・石(1)	○	SP11	
19	坏	口径 11.8 器高 3.3 底径 7.5	比較的厚丁のつくり。羽部の立ち上がりはしっかりしている。外底には板目状の凹溝。	回転ナデ 羽部斜め切り離し	回転ナデ	長・石(1~2) 金ウ(1)	○	SP12	16
20	土 壤	口徑 42.6 器高 15.2	底部は浅いボウル形を呈する。底部外周には黒が付着。	ハケ+ナデ(8本/cm)	ヨコ ナナメハケ(12本/cm)	長・石(1~2)	○	SK202	16

表14 挖立205出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
21	坏	口径 (6.4) 器高 1.0 底径 (4.9)	腹部の立ち上がりはしっかりしている。	マメツ	マメツ	長・石(1) わずかに含む	○	SP19	16
22	こね鉢	口径 (23.0) 底径 4.7	口縁部は上下に拉張される。	回転ナデ	回転ナデ	長・金ウ(1)	○	SP18	16

遺物観察表

表15 捩立206出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
23	坏	口径 11.0 縦高 2.7 底径 7.0	縁部はやや丸みをもつて立ち上がる。外底には板目状圧痕。	円軸ナデ 窓口部を切り落し	凹凸ナデ	長・金ウ(1) 多く含む	◎	SP250	17
24	射箭	口径(28.6) 残高 5.8	口縁部から若干下がった位置に窓が開けた。	ナデ	ヨコハケ→ナデ	長・石・ 金ウ・黒(1)	◎	SK204	17
25	堀	口径(45.4) 残高 13.3	口縁部に強く折り曲げられ、「く」字形を呈する。	格子目タキ	ヘラケズリ・ナデ	長・石(1~3) 少量	◎	SK304	17

表16 SE201出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
26	坏	口径(7.2) 縦高 2.2 底径 3.8	口縁部が若干厚く、窓下部がわずかに内側に傾しながらすむ。底は比較的匂い。	ヨコナデ 窓口部を切り落し	ヨコナデ	胎	◎	○済上	17
27	堀	残高 2.3 底径 3.0	縁部は直系青磁。窓口部が、側下部へ凹凸部片。内側面には底いおり…色々の種類がかけられる。	ナデ	ナデ	胎	◎	○済中	17
28	射箭	残高 9.7	口縁部から下がった位置にタガが通る。	ナデ	ナデ	長・石(1~5) 多量	△	○済上	17
29	堀	残高 5.3	口縁部は強く折り曲げられ、「く」字形を呈し、やや長い。	格子目タキ	ナデ	砂(1~2) 少量	◎	○済中	17
30	堀	口径(33.8) 残高 6.5	口縁部は強く折り曲げられ、「く」字形を呈し、短い。	格子目タキ	ナデ	砂(1~2) 少量	◎	○済中	17

表17 SE201出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版	
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
31	釘	か	2/3か	鉄	3.6	1.7	1.0	4.73	17

表18 SE302出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
32	堀	口径(7.2) 縦高 1.5 底径 5.8	縁部が直角的に立ち上がり、口縁部は丸くおさまる。	ヨコナデ 窓口部を切り落し	ヨコナデ	胎	◎		18
33	仄	底径 7.9 残高 1.3	底部凹。	ナデ 窓口部を切り落し	ナデ	長・J(1~5) 多量	◎		18
34	坏	底径(7.0) 残高 1.1	底部片。	ナデ 窓口部を切り落し	ナデ	胎	◎		18
35	坏	口径(12.5) 残高 2.2	口縁部。内外面に赤色顔料付着。	ナデ	ナデ	胎	◎		18
36	坏	底径(7.2) 残高 1.4	底部片。	ナデ	ナデ	胎	◎		18
37	堀	底径(13.0) 残高 3.2	底部片。上口直。	板ナゲ	ナゲ	真(1)	◎		18

遺物観察表

表19 SE303出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	国版
				外 面	内 面				
38	坏	底径(8.9) 残高 1.6	底部の立ち上がりは緩やか。	手彫	ナデ	焼	○		18
39	羽釜	底径 4.5	口沿部下に凹溝から気泡にタガが残る。	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	長・石(1~2) 多	○		18

表20 SD201出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	国版
				外 面	内 面				
40	坏	底径(5.0) 残高 1.0	外底は余計り削がれ、板目状の圧痕を残す。	砂赤切り彫し	口紐ナデ	焼	○		
41	坏	底径(6.4) 残高 0.8	底部の開きは大きい。外底は余計り削られ、板目状の圧痕を残す。	⑩余計り削し	回転ナデ	長(1)わずか	○		
42	坏	底径 7.4 残高 0.7	外底は余計り削がれ、板目状の圧痕を残す。	砂赤切り彫し	回転ナデ	焼	△		
43	坏	底径 6.0 残高 1.0	底部の開きは大きい。内外面のマツツ青しき。	⑩余計り削しか	マツツ	長(1)・右(1) わずか	△		
44	坏	底径(7.2) 残高 1.2	底部の開きは大きい。赤垂早い。外底は余計り削がれ、板目状の圧痕を残す。	砂赤切り彫し	マツツ	長(1)わずか	○		
45	坏	口径(11.0) 高さ 2.6 底径 8.0	口縁部下が若干厚く、削下がわずかに内湾しながららすぼむ。外底には板目状の圧痕を残す。	⑩余計り削し	口紐ナデ	焼	△		
46	坏	口径(10.4) 高さ 3.4 底径(5.8)	北朝式厚手のつくり。溝部の立ち上がりは急で、底部に近い形状をもつ。	⑩余計り彫し	回転ナデ	長(1)・右(1) 多く含む。	○		
47	坏	口径 11.4 高さ 2.8 底径 6.8	口縁部は丸く仕上げ、薄手のつくりである。口縁部近くがわずかに内湾する。	⑩余計り彫し	回転ナデ	砂(1)わずか	○	18	
48	坏	口径 14.0 高さ 3.5 底径 7.5	底部の立ち上がりは急で、口縁部はわずかに内湾し、底部は丸くおさまる。外底には板目状の圧痕。	砂赤切り彫し	回転ナデ	長石(1)わずか	○	18	
49	坏	口径 11.2 高さ 2.7 底径 7.0	比較的厚手のつくり。溝部の立ち上がりはしっかりしている。口縁部は丸くおさまる。	砂赤切り彫し	回転ナデ	長(1)・右(1) 多く含む。	○	18	
50	坏	口径 13.4 高さ 3.6 底径 7.5	底部の立ち上がりは急で、口縁部下は内湾し、溝部は丸くおさまる。外底には板目状の圧痕。	砂赤切り彫し	回転ナデ	焼	○	18	
51	土器	—	口縁部を折り曲げさせるために内側には複数がけはある。	指ササエ→ナデ	回転ナデ	長2・3・5cm・ 右(2)多く含む。	○		
52	羽釜	口径(21.0) 残高 7.1	口縁は内側し、腹は口縁近くに貼り付けられる。	回転ナデ	ヨコハケ (12本/cm)	長(1~2)・ 石(1)	○		18
53	こね鉢	口径(26.4) 高さ 3.7	口縁端部は上下に大きく膨張され、「く」字状の形態に長い縦槽を形成する。	回転ナデ	回転ナデ	長(1~3)・ 7(1~2) 多く含む。	○	18	
54	こね鉢	口径 25.6 高さ 8.5 底径 8.6	口縁端部は上下に大きく膨張され、「く」字状の形態に長い縦槽を形成する。内底下半は構成が差しくして、使用頻度が高かったことを示している。	回転ナデ	回転ナデ	長(1~2)・ 右(1)	○	19	
55	灰	底径(15.8) 残高 5.4	底部はや丸みのある平底。底部の立ち上がりは急。	椅子タキ→ナデ	回転ナデ	右(1~3)わずか	○		18

遺物観察表

SD201出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
56	壺	残高 4.8	口縁・縁部は欠損。やや扁球部の体部。体部下半部に凹部が2条造る。	回転ナデ	回転ナデ	長(2~3) わずか	○		
58	壺	口径 35.6 残高 22.4	肩部は扁球形を呈し、腹部は短くやや内傾する。「U」縁部は「U」外反し、縁部は凹とりされる。	平行タタキ	ヨコナデ	轆	○		19

表21 SD201出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
57	釘 小	完存	鉄	3.6	1.1	0.7	6.05		18

表22 SD202出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
59	壺	口径(10.4) 残高 2.4	胸部の立ち上がりはゆるやかで、「U」縁部はやや内溝気味でござます。	回転ナデ	指オサエ・ナダ	長・石(1~2) わずか	○		
60	壺	口径(10.8) 最高 3.1 底径 6.0	口縁部が若干厚く、肩下半がわずかに内湾しながらぼむ。	⑤余切り籠し	回転ナデ	余(1)・長(1) をわずかに含む	○		
61	糞盆	残高 3.2	口縁部が内溝気味に立ちあがる。 口縁部に施して、蓋が貼付される。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(2)	○		
62	こね鉢	残高 4.8	口縁部は上下に大きく拡張。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(2)	△		19
63	土鍋	口径(36.0)	口縁部を折り屈曲させるため、内側には飛揚がはしる。	指オサエ・ナダ	回転ナデ	長・石(2)を 多く含む	○		

表23 SD202出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
64	砾 石	ほぼ完存	石英斑岩	7.5	4.2	3.3	135.86		19

表24 SD203出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
65	皿	口径 7.4 最高 1.3 底径 4.8	U縁部は内溝して立ち上がる。 外底には、板目状の圧痕を残す。	⑤余切り籠し	指オサエ・ナダ	長・石(1)	○		19
66	壺	最高 1.0 底径 6.4	胴部の立ち上がりはゆるやか。 外底には、板目状の圧痕を残す。	⑤余切り籠し	回転ナデ	長・石(1) わずか	△		
67	壺	口径(11.0) 残高 2.3	胴部の立ち上がりは急。	ナデ	ナデ	長(1)	○		
68	壺	口径(11.2) 最高 2.4 底径 7.4	口縁部下がやや厚く、肩下半がわずかに内湾する。 外底には板目状の圧痕を残す。	⑤余切り籠し	回転ナデ	長・石(1)	○		19

表25 SA301出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
69	こね鉢	残高 4.0	U縁部は上方へ拉張される。	回転ナデ	回転ナデ	長(1)わずか	○	SP324	

遺物観察表

表26 SK201出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
70	土鍋	口径(37.0) 残高 6.0	折り曲げにより口縁部を形成し、内面には手が付く。	指さサエ→ナデ	回転ナデ	長石、6(1~2)	○	外側に炭化物付着	
71	土鍋	口径(28.0) 残高 6.3	口縁は直線的に立ち上がる。 口縁部に横ナナ字彫が施され、内側に手が付いたような断面である。	マツフ	ヨコナデ	長・右・金ウ(1)	○	外側に炭化物付着	20
72	羽釜	口径(30.4) 残高 7.3	口縁部が内傾気味に立ち上がる。 口縁部から少し下がった位置に痕が貼付される。	指さサエ→ナデ	ナデ	長・右(2~3)多量	○		20

表27 SK203出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
73	坪	底径(7.4) 残高 1.0	外底には板目状の圧痕残る。	◎糸切り離し	回転ナデ	長・金ウ(1)	○		
74	坪	底径(8.0) 残高 1.1	外底には板目状の圧痕残る。	◎糸切り離し	回転ナデ	粘	○		
75	こね鉢	底径 2.6	口縁端部は上に大きく強張され、「く」字状の形態に近い特徴を有する。	回転ナデ	回転ナデ	粘	○		20

表28 SX201出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
76	皿	底径 4.7 残高 0.7	外底には板目状の圧痕残る。	◎糸切り離し	マツフ	長(1)わずか	△		20
77	坪	口径(13.0) 残高 3.2	底部は直線的に立ち上がり、口縁部は僅いヨコナデによりわずかに内傾する。	マツフ	マツフ	長・石(1) わずか	△		20
78	坪	底径 7.2 残高 2.1	底部右半部にわずかながら、立ち上がりがみられる。	◎糸切り離し	ナデ	長・石(1)	○		20
79	塊	口径(12.8) 残高 4.0	微突起丸形容。やや丸みをもちらながら、口縁部は立ち上がる。	指さサエ→ナデ	回転ナデ	粘	○		20
80	こね鉢	口径(25.4) 残高 3.3	口縁端部は上方に強張される。端部外側には自然筋が付着。	回転ナデ	回転ナデ	粘	○		20
81	塊	底径 5.4 残高 2.8	難泉磨系青銅。輪高台。	回転ナデ	回転ナデ	粘	○		20

表29 SX201出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
82	鉄 淚	完存	鉄	4.2	4.0	3.5	41.58		
83	鉄 淚	完存	鉄	3.9	2.3	2.1	28.21		
84	鉄 淚	完存	鉄	5.4	4.1	1.3	29.32		
85	鉄 淚	完存	鉄	2.6	1.1	0.5	2.89		

遺物観察表

表30 SP231出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
86	鉢	口径(17.4) 残高 4.1	口縁部が内面に肥厚し、縁部が上方につまみあげられる。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) わずかに含む	○		21
87	皿	口径 7.6 基高 1.2 底径 (6.2)	外底は系切り後、板目状压痕が施される。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) わずかに含む	○		21
88	平	口径 11.4 基高 2.6 底径 7.0	外底は系切り削り後、板目状压痕が施される。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~3) 少々含む	△		21
89	杯	口径 11.0 基高 2.7 底径 7.0	外底は系切り削り後、板目状压痕が施される。	回転ナデか	回転ナデか	長・石(2~3) 含む	△		21

表31 I区包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
90	盃	残高 7.5 直径(6.0)	底部は平底で、縁部の立ち上がりは急である。	マメツ	ナデか	長・石(2~3) 多量	○	I区 IV-a層	
91	高杯	残高 2.5	縁部のみ。	マメツ	マメツ	長・石(1)	○	I区 IV-a層	
92	杯	口径(11.6) 残高 3.1	口縁部はやや先端に気泡に仕上げられる。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2)	○	I区 IV-a層	
93	盃	残高 1.8 底径 4.8	底部は、中央が凹んだ上げ底を呈する。	マメツ	マメツ	長・石(1~2) 多量	○	I区 IV-a層	
94	円溝盃	口径(47.0) 残高 2.2	口縁は、大きく外反し、短く、縁部は丸くおきめられる。	回転ナデ	丁寧な回転ナデ	胎	○	I区 II-a層	
95	碗	口徑(11.5) 基高 4.9	口縁部は丸く、側部は丸みをもつ立ち上がる。縁高台は付く。	両転ナデ	回転ナデ	胎	○	I区 I-b層	
96	壺	底径(4.8) 残高 3.4	楕円形底有形。外側に施述文が施される。	回転ナデ	回転ナデ	胎	○	I区 表記	22

表32 II区包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
97	皿	口径 6.2 基高 1.5 底径 3.9	縁部は立ち上がりが急である。 外底は回転系切り削し。	回転ナデ	回転ナデ	胎	○	II区 むしろ VI層	22
98	壺	残高 1.0 底径(5.8)	底部片。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) 少々	○	II区 VI層	
99	杯	残高 0.9 底径(6.0)	縁部の厚さは大きい。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) 少々	○	II区 むしろ	
100	壺	残高 1.1 底径 (6.0)	縁部の立ち上がりは急である。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) 少々	○	II区 むしろ	
101	羽釜	口径(29.8) 残高 3.3	口縁は内湾し、底は口縁近くに貼り付けられる。	回転ナデ	回転ナデ	胎	○	II区 VI層	22
102	羽釜	残高 3.4	L字縁部片。	ナデ	ナデ	長・石(1~2)	○	II区 VI層	
103	羽釜	残高 4.3	口縁部片。	ナデ	ナデ	長・石(2~3) 多量	○	II区 VI層	22

遺物観察表

II区包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
104	上巻	口径(34.0) 残高 2.0	口部を折り屈曲させるために、内面には棱筋がはじまる。	指オサエ→ナデ	回転ナデ	長・石(2~3) 少量	○	F7区 V1層	
105	こね鉢	口径(30.6) 残高 3.0	口縁部分は上下に大きく膨張され、「く」字状の形態に近い棱脊を形成する。	回転ナデ	回転ナデ	長(1)少量	○	F7区 V1層	
106	こね鉢	口径(24.6) 残高 3.2	口縁部分は上部に大きく膨張される。	回転ナデ	回転ナデ	長(1)少量	○	M8区 V1層	
107	こね鉢	口径(31.4) 残高 4.7	口縁部分は膨張され、棱筋を形成する。	回転ナデ	回転ナデ	長(1)少量	○	F7区 V1層	22
108	こね鉢・残高 4.2	口縁部分は上部に大きく膨張される。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(2) 少量	○	F7区 V1層		
109	豆かき	口径 2.1 残高 8.0	底部片。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1)	○	E7区 V1層	

表33 II区包含層出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図 版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
110	鉄 淚	完存	鉄	6.5	8.3	2.4	150.17	II区	22
111	鉄 淚	光 寸	鉄	3.6	3.7	1.9	41.58	II区	22
112	鉄 淚	完存	鉄	4.3	3.3	1.9	30.93	II区・F6	22
113	鉄 淚	完存	鉄	3.7	2.9	0.9	12.55	II区・F6	22
114	鉄 淚	光 寸	鉄	2.2	2.5	0.9	6.61	II区・F7	22

表34 III区包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
115	深鉢	口径(7.0) 残高 5.2	肩部片。	ナデ	口コ方向の条痕 ヨコ方向の条痕 →ナデ	長・石(1~3) 多量	○	III区 H10 V1層	
116	皿	口径(7.0) 高さ 1.6 底径(4.8)	やや口済気味に側部は立ち上がる。 外底は回転糸切り砸し。	ナデ	ナデ	積	○	III区 E1レバ V1層	
117	皿	口径 8.0 高さ 1.4 底径 6.3	直底のに肩部は立ち上がる。 外底は回転糸切り砸し。	回転ナデ	回転ナデ	長・石・金 ウ(1)	○	III区 E1レバ V1層	
118	皿	口径 8.1 高さ 1.4 底径 5.5	側部は、強い横ナデにより、内溝する。 外底は回転糸切り砸し。	回転ナデ	回転ナデ	長・石・金 ウ(1)	○	III区 E1レバ V1層	22
119	平	口径(7.0) 高さ 1.6 底径(4.8)	肩部はやや内溝して立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	積	○	III区 E1レバ V1層	22
120	平	口径 12.0 高さ 3.4 底径 6.8	肩部はやや内溝して立ち上がる。 外底は回転糸切り砸し。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) 少量	○	III区 E1レバ V1層	22

第VII章 SE301における保存処理

I. 曲物の取り上げ

1 はじめに

船ヶ谷遺跡3次調査地のⅢ区で検出されたSE301からは曲物が検出された。曲物は三個体を積み上げた構造である。曲物Bと曲物Cは、本体は軟弱ではあったが、結合部と内面のケビキ加工等が観察できるものであり、表面の遺存は良好であった。埋蔵文化財センターにおける既往の調査では、井戸からの曲物の出土例は少ない。このため、遺物の詳細な観察、保存処理後の展示公開を見据えた考古遺物の有効活用を目的として、曲物の取り上げを実施することにした。

2 取り上げ方法の検討

平成10年8月27日に調査現場において、曲物の遺存状況を詳細に観察した。曲物はⅢ区のほぼ中央に位置する素掘りの井戸(SE301)の下部で検出された。曲物Aは、材の厚さが1mm前後で、遺存していない部分があった。このため、取り上げは曲物Bと曲物Cを主体として実施するよう、調査担当者と検討した。



第49図 遺構の半裁掘削状況



第50図 遺構半裁後の曲物検出状況

3 取り上げ作業

まず、曲物の設置状況を観察するために、遺構の西半部を掘削した。曲物の内側には空間があるため、半裁時に曲物が破損する可能性が考えられたので、曲物内面をビニールで保護し、円筒形のスポンジを充填した。隙間には発砲ウレタンを使用した(第49図)。半裁を終えた時点で、曲物Aから曲物Bまでの詰め物は取り除き、写真撮影をした。曲物Aについては、遺存が比較的良好な東半部を残して記録写真を優先した(第50図)。曲物を乾燥から防ぐことに注意を払い、作業中はポリエチレングリコール1500#の50%濃度の水溶液を曲物に塗布した。

4 曲物Aの取り上げ

曲物Aの取り上げでは、曲物自体に影響が現れない程度に付着していた土を取り除き、ベニヤ板を用いて枠を作製した。この枠と土との隙間に発砲ウレタンを充填して、型枠と曲物とを固定し、曲物Bと切り離して、取り上げをおこなった(第51図)。

5 曲物Bと曲物Cの取り上げ

曲物Bと曲物Cは付着していた土を取り除いた段階で、比較的材自体に硬さがあることがわかった。曲物Bは、内面にダンボール紙をあてがった後に、曲物の内外面を角材で挟み込んで上下を固定した。曲物Cは、外面に幅広いビニールテープを幾重か巻き付けて補強した。これらの保護をおこなった後に、曲物Bと曲物Cを同時に取り上げた。

6 取り上げ作業を終えて

今回の曲物の取り上げ作業では、曲物の遺存状態が比較的良好であったことと時間の制約から、簡単な方法を用いた。この方法で取り上げた曲物は運搬に支障がなく、調査現場から埋蔵文化財センターへの搬入も比較的容易に進めることができた(第52図)。

使用材料

角材2種類、ベニヤ板、針金、釘、段ボール紙、ビニールフィルム、ビニール袋、ビニールテープ、ベンチ、スプレイヤー

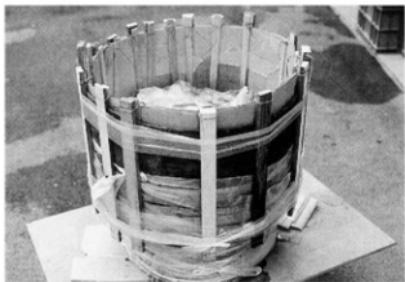
使用樹脂等

ポリエチレングリコール1500#、発砲ウレタン崩脂

(保存処理担当:山本健一)



第51図 曲物Aの梱包作業



第52図 曲物B・Cの梱包状況

II. 保存処理

(財) 元興寺文化財研究所

1 はじめに

出土木製品の保存処理法として、当研究所ではポリエチレングリコール含浸法、アルコール・キシレン・樹脂法（以下AXR法）、脂肪酸エステル法、真空凍結乾燥法をおこなっている。これら4つの方法から遺物の劣化状態、含水率、樹種、木取り、調整痕、使用痕の有無などによって最良と思われる処理法を選択し、実施している。

今回、保存処理対象である船ヶ谷遺跡3次調査出土遺物をはじめ、出土曲物の多くは針葉樹の薄板内面にケビキを入れ、「矯め曲げ」によって製作されている。このような製作技法と構造的特徴に起因して、非常に脆弱であり、胴部に自重がかかり崩壊する危険性もある。加えて発掘後の保管環境が悪影響を及ぼし、さらに破損・変形を進行させていることも少なくない。そのため、曲物の保存処理には、変形部分の矯正が可能であるとともに、より軽量に仕上がることが求められる。従って当研究所では出土曲物に対する保存処理にはAXR法を選択している。AXR法とは、出土木材の含有水分を段階的にアルコール・キシレンに置換し、さらにキシレンに溶かしたロジン・ダンマルなどの天然樹脂（濃度36%）を含浸させた後、キシレンを常温で蒸発させ、乾燥させる方法である。AXR法で処理した遺物の特徴は、①含浸後の遺物に水分・熱を加えることで加撓性・柔軟性が高まり、矯正・整形が可能になる。②比較的高温の保管環境にも耐えられる。③処理前より重量が軽くなるので、自重による崩壊の危険性が少ないなどが挙げられる。本報告では、船ヶ谷遺跡3次調査出土の曲物の保存処理について述べる。ただし、現在も処理は継続中であり、平成11年3月までにおこなわれた工程とする。

2 保存処理

(1) 遺物の検出

通常搬入された遺物に対しては、まず調査カードの作成・写真撮影による処理前段階での情報の記録に努める。しかし、本資料の場合は、ウレタンで保護されて搬入されたため、搬入時の状態を写真撮影した後、遺物本体の検出をおこなった。曲物Aは半円の形状をしており、粘土質の上ごとウレタンによって取り上げられていた。曲物B・Cは曲物Bの直径の方が大きく、曲物Cが中に入り込む形で上下につながっていた。形状維持の目的で内側はウレタンで固められ、外側は木枠で固定された状態であった（第53図）。まず、曲物B・Cの分離作業をおこなった。2つの曲物の間の土を少しづつ除去していく。曲物Bが持ち上がるようになり、分離は完了し、写真撮影による記録をおこなった。

(2) クリーニング

まず、曲物Bは木枠を除いた（第54図）。曲物Cは内側のウレタン（第55図）除去作業をおこなった。その後、筆・刷毛・竹串などを用い、木目に沿って丁寧にクリーニング（水洗）をおこなった。

(3) 処理前調査

クリーニング終了後、状態の確認、写真撮影をおこなった。

曲物Bは側板の外側に帯板上下2枚を巻く形状であり、2枚を合わせるとほぼ側板と同じ幅であった（第56図）。直径54.0cm、高さ31.0cm、側板厚さ0.5cm、帯板厚さ0.2~0.3cmを測り、出土状態から見

て、上縁に底板を留めていたと思われる木釘孔が存在した。曲物容器からの転用と考えられた。側板の内側全体に、木目に直交させたケビキがあり、上部のみ交差させる形の2回のケビキが全周囲に加えられていた。そのケビキには規則性が認められず、ケビキが深すぎて脆弱になっている部分さえあつた（第57図）。全体に劣化しており、特に上部は発掘時の乾燥のためか、非常に弱かった。

曲物Cも側板の外側に帯板上下2枚を巻き、2枚を合わせるとほぼ側板と同じ幅であった（第58図）。直径45.5cm、短径42.0cm（少し歪みあり）、高さ30.0cm、側板厚さ0.3cm、帯板厚さ0.3cmであった。下縁に木釘が残存しており、曲物容器からの転用と考えた。側板の内側全体に、木目に直交するケビキがあり、交差させる形の2回のケビキが上部のみ全周囲に加えられていた。また、下部にも同様のケビキが部分的に認められた。曲物Bに比較して丁寧な作りであり、ケビキも等間隔になされていた（第59図）。上や汚れなどを除去すると土壌成分によると思われる変色部分が胴部に存在したもの状態は良好であった（第60図）。

（4）養生

変形部分の矯正と含浸期間中の形状維持のため、ステンレスの板に沿わせ、不織布によって固定した（第61図）。

（5）含浸処理

アルコール置換・キシレン置換・天然樹脂含浸（7工程・21週間）をおこなった後、自然乾燥させた。

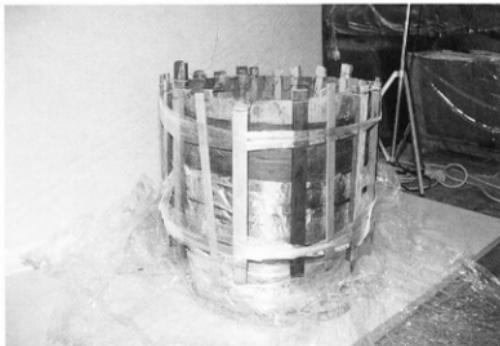
3 わたりに

本報告は、遺物本体の検出が困難を極め、かなりの時間を要したことと、含浸処理設備の都合上、含浸処理までの報告となつた。今後、矯正・接着・補填・整形・彩色・処理後調査という工程を経て、保存処理を完了する予定である。現段階では3個体での返却を予定している。今後の処理仕様についても関係者と綿密な打ち合わせを重ね、展示・活用に役立つ保存処理を心掛けたい。

参考文献

- 百村 歩「曲物の細部技法—縫じ方を中心にして—」『文化財学論集』文化財学論集刊行会（1994）
大國万希子「アルコール・キシレン・樹脂法による復元作業—出土曲物を中心に—」『創立三十周年記念誌』元興寺文化財研究所
p.99-103 (1997)

(平成11年3月31日付)



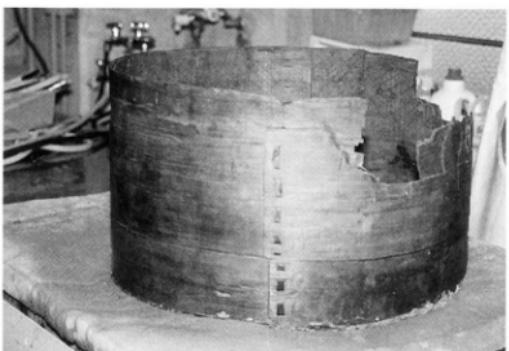
第53図 曲物B・C搬入時



第54図 曲物B 分離後



第55図 曲物C 分離後



第56図 曲物B クリーニング後



第57図 曲物Bケビキの様子



第58図 曲物Cクリーニング後



第59図 曲物Cケビキの様子



第60図 曲物C変色部分



第61図 培生

第Ⅷ章 S E301における科学分析

I. 樹種同定

(財)元興寺文化財研究所

船ヶ谷遺跡3次調査地で出土した曲物A、曲物B、曲物Cの側板3点について樹種の同定をおこなった。曲物Aは堅い粘土に覆われていたため一部露出していた部分から、曲物B、曲物Cは側板の破断面から、メスを用いて極微量の試料を採取した。

顕微鏡観察による組織観察をおこなうため、同定に必要な木口面(横断面)、板目面(接戦断面)、柾目面(放射断面)の3方向の切片をカミソリによる徒手切片法で作製した(第62図)。

これらの切片をサフランニンで染色した後、切片に含まれる水分を、エチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換し、非水溶性の封入剤(EUKITT)を用いて永久プレパラートを作製した。封入剤が硬化した後、詳細な組織観察と写真撮影をおこなった(第63図)。

樹種の同定は、針葉樹では早材から晩材への移行、樹脂道の有無、樹脂細胞の有無および配列、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態等を、広葉樹では道管の大きさや配列状態および穿孔の形態、柔組織の分布や結晶細胞の有無、放射組織の形態等を生物顕微鏡で観察することによっておこなっている。

今回実施した曲物側板の樹種同定の結果と顕微鏡観察による組織上の特徴および同定した樹種の分布や性質を以下に示した。

(1) 曲物A

樹種：スギ

組織上の特徴：

木口面…早材から晩材への移行が急な針葉樹

板目面…樹脂細胞がある

柾目面…分野壁孔が典型的なスギ型で1分野に1～2個存在する

分布：本州、四国、九州、屋久島

性質：日本特産の常緑針葉高木。木理直通、はだ目粗、晩材への移行は急。乾燥・加工は容易で、割裂性は大きい。

用途：建築、桶樽、土木、船、彫刻、下駄、箸等

(2) 曲物B

樹種：スギ

組織上の特徴：

木口面…早材から晩材への移行が急な針葉樹

板目面…特になし

柾目面…分野壁孔が典型的なスギ型で1分野に1～2個存在する

分布：本州、四国、九州、屋久島

性質：日本特産の常緑針葉高木。木理直通、はだ目粗、晩材への移行は急。乾燥・加工は容易で、割裂性は大きい。

用途：建築、桶樽、土木、船、彫刻、下駄、箸等

(3) 曲物C

樹種：ヒノキ

組織上の特徴：

木口面…早材から晩材への移行がゆるやかで晩材部の幅は狭い針葉樹

板目面…特になし

柾目面…分野壁孔が典型的なヒノキ型で1分野に2個存在する

分布：本州、四国、九州

性質：日本特産の常緑針葉高木。木理直通、はだ目精、晩材への移行はゆるやか。乾燥・加工は容易で、仕上げは良好、光沢がある。世界的な優秀材である。

用途：建築、土木、船、彫刻、漆器、家具等

参考文献

島地 謙・伊東隆夫『遺跡出土の製品叢観』雄山閣出版 (1988)

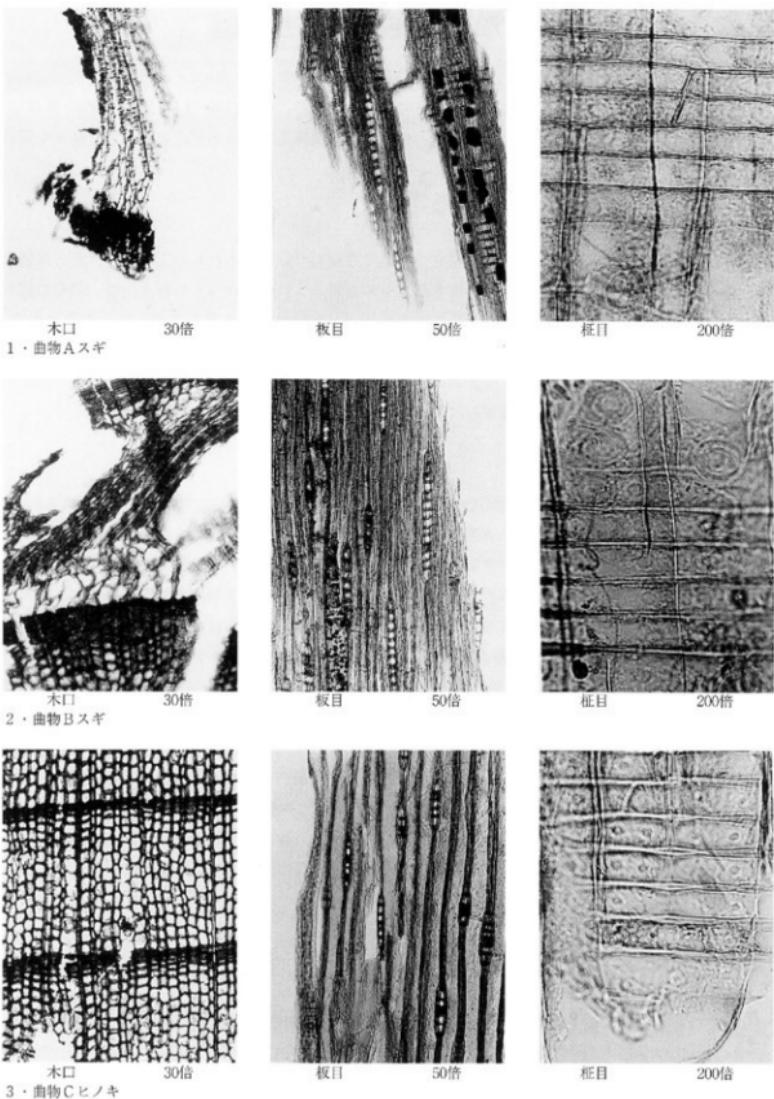
島地 謙・伊東隆夫『図説 木材相識』(株)地球社 (1996)

(平成11年3月31日付)



第62図 徒手による切片作製

樹種同定



第63図 曲物A・B・Cの木材組織

第IX章 調査の成果と課題

船ヶ谷遺跡3次調査地では、縄文時代～弥生時代の自然流路、中世の溝・柵列・掘立柱建物・井戸・土坑の集落関連遺構を多数検出した。とりわけ、中世の集落関連遺構は松山平野北西部では稀少な資料である。

1. 土層

第Ⅶ層以下の土層は、砂礫、砂質土、粘質土の順で堆積していた。これらの土層は、性質と堆積から、ある程度水量のある流路によって形成されたものと考えられる。かつての石手川は、現在の流れとは大きく異なり、城北の北から堀江・和気方面へ流下し地溝性の低地帯を形成していたことから、第Ⅶ層以下がかつての石手川の沖積作用で形成されたものと考えられる。第Ⅷ層上面は、Ⅱ区では北東から南西方向へ緩傾斜している。Ⅱ区南壁では、第Ⅸ層が急角度で傾斜しており、調査地の南が谷状に近い地形を呈していたことが考えられる。

2. 縄文時代～弥生時代

S R201下層とS R301は、土層の状況から水流は少なく、湿地状によどんでいたものと考えられる。既往の調査結果（船ヶ谷遺跡、同2次調査地）を踏まえるならば、本調査地を含めた船ヶ谷遺跡一帯は、縄文時代晩期において、水流が少ない湿地状の環境であったことがうかがえる。

遺物には縄文時代晩期の土器と石器、弥生土器が出土している。縄文晩期の深鉢と浅鉢は、船ヶ谷遺跡出土品と同形態を示す。石器には打製石鏃、礫石錐、敲石、石器素材がある。打製石鏃は基部の抉りが深い円基無茎式と、平基無茎式がある。前者は平面形態が五角形形状を呈しており、いわゆる「五角形鏃」の範疇に分類される。礫石錐は長軸両端に紐掛け用の抉りが作出されている。石器素材は自然面が残置せず、剥片剥離が進行した石核である。器種構成に着目すると、大陸系磨製石器はなく、縄文系の石器で占められ、これは船ヶ谷遺跡と同傾向である。船ヶ谷遺跡の器種構成は礫石錐、敲石、スクレイパーが多数を占め、これらに石鋸、石斧類、砥石、石棒が伴う。船ヶ谷遺跡の主体石器は礫石錐と敲石であり、これらは本調査で出土しており、共通する。石器の数量は、船ヶ谷遺跡218点に対して、本調査はわずかに6点と少ない。本資料は、数は少ないものの、船ヶ谷遺跡出土石器と器種構成に共通するものがあり、縄文時代晩期の石器資料の一例として注目されるものである。

3. 中世

〔1〕掘立柱建物

掘立柱建物をⅡ区とⅢ区で比較検討する。

Ⅱ区には総柱建物1棟（掘立202）と側柱のみの建物5棟（掘立204～208）がある。規模は掘立202が最大で、 $7.9 \times 3.1 \sim 3.5m$ を測る。建物に近接して井戸（S E201）が構築される。掘立205と206は南北棟で、規模は $5.3 \times 2.7m$ を測る。柱穴に根石や詰め石を伴うものが多く、柱の沈下を防ぐためと埋解される。柱の沈下の要因として、地盤の軟弱化と上屋（屋根）の重厚化が考えられる。地盤は堅くしまった粘質土であるから、柱穴の根石や詰め石は上屋の構造と関係するものと考えられる。次に、

掘立204を検討する。規模は4.0~4.1×1.5mを測る。付帯施設の炉（SK202）から土鍋が出土した。上鍋は外面に煤が付着している。さらにかの壇上に焼上と炭化物が伴っていることから、掘立204が炊事にかかる建物（厨）と考えられる。他の建物（掘立207と208）は、規模が3.6~4.7×2.1~2.9mを測り、柱穴に根石や詰め石を伴わない。上屋の簡易な建物と想定される。これらから、Ⅱ区の建物は三群に分類される。1群は掘立202である。総柱構造の中規模な建物で、柱穴に石を伴わない。また井戸に近接して構築されている。2群は掘立204~206である。側柱で構成される小規模な建物で、柱穴に石を伴わない。

Ⅲ区には2棟の建物がある。掘立301と302は側柱で構成される小規模な建物で、柱穴に石を伴わない。掘立302はSE304の付帯施設と考えられる。Ⅲ区の2棟は3群に該当する。

『一遍聖絵』に代表される中世に描かれた絵巻物をみると、規模が比較的小さく、側柱で構成される建物の多くが、壁をもたず、板や草で屋根を葺いた簡易な建物である。検出した6棟の掘立柱建物は、このような構造の建物と考えられる。柱穴の右の有無を積極的に評価し、2群は板葺き、3群は草葺きの屋根と想定しておく。

〔2〕井戸

Ⅱ・Ⅲ区からは、5基の井戸が検出された。Ⅱ区の井戸SE201は、掘立202に近接して検出された。平面形は楕円形を呈し、上部には石組みをもち、下部には曲物が伴う構造である。曲物の遺存が悪いため、曲物の構造は判然としない。Ⅲ区の井戸はSE301~304である。平面形態は円形・楕円形・不整形を呈している。素掘りで二段掘り状を呈し、下部に曲物が伴う。

Ⅱ区とⅢ区の井戸には、共通点と相違点がみられる。共通点は、井戸が二段掘り構造で、下部に曲物が伴うことである。相違点は、石組みの有無である。SE201は上部に石組みが伴う構造である。さらに、他の遺構の配備をみると、SE201は、中規模で総柱構造の掘立202に近接して構築されている。一方、素掘りの井戸群は上部に石組みを作わない。

〔3〕出土遺物

遺物は遺構からの出土が少なく、遺構の中には遺物が伴わないものが多い。とりわけ、掘立と柵列には共伴遺物が少なく、遺構の時期特定を困難にしている。遺構に伴う遺物の多くは、SD201から出土したものである。そのほとんどが破片資料であり、完形に復元されたものは少ない。出土遺物には土師器・須恵器・鉄器・石器・木器がある。土器は日常的に使われる土師器の壺・环・三足付き羽釜・土鍋が多い。土師器の壺と环は、外底に回転糸切り離しの痕跡がみられる。須恵器には束縛系こね鉢がある。束縛系こね鉢には14世紀前半の年代観が与えられている（森田1995）。木器は、SE301出土の曲物が特筆される。曲物A・Bはスギ、Cはヒノキが用いられていた。曲物B・Cは容器からの転用品の可能性が考えられ、当時の木製品に対する再利用を示す一例といえる。

〔4〕集落の構造

Ⅱ区で検出された遺構の配置状況から、集落域が溝によって区画されていることが読みとれる。SD204は集落域の南限を示している区画溝である。集落は東西の溝（SD201）と南北の溝（SD202と203）により小さく区画される。区画溝は、埋土の堆積状況から、恒常に水は流れていないと理解される。ただし、SD202がSE201に接続することから多少の排水効果を担っていたと考えられる。区画された敷地に掘立柱建物、井戸、柵列、土坑、性格不明遺構が整然と配置されている。

Ⅲ区では、南北方向の柵列S A301が検出された。S A301の東には、4基の素掘りの井戸が規則的に配置されている。これらの井戸がすべて同時併存であったかは判然としない。地下水脈に沿って井戸が構築されていった結果とも想定される。

〔5〕集落の景観

現在の地表面は北から南へ緩やかに傾斜しており、調査地の北には微高地が広がっている。中世遺構の分布状況から、調査地北に広がる微高地に該期の集落が展開する可能性がある。さらに、上層堆積状況から、I区は中世段階まで河川の影響を受ける不安定な土地環境であった。II区北半部とIII区は微高地状を呈し、中世段階には安定した土地環境であったために集落域として土地利用が図られたものと考えられる。

遺物は、口常に使われた上部器の皿・壺・三足付き羽釜・土鍋が多く、貿易陶磁器は少ない。中国銭や石硯の出土はない。出土遺物と検出遺構から、集落の中心となる大型建物が営まれた屋敷跡が調査地周辺に存在したとは考え難い。さらに、積極的に出土遺物を評価するならば、本調査地が一般民衆のきわめて農村的な性格をもつ集落の一部である可能性が高いと考えられる。

以上、船ヶ谷遺跡3次調査の成果を報告した。既往の調査では、松山平野北西部（和氣地区）における中世集落は不明な部分が多かった。本調査によって中世集落の資料が提示できた意義は大きい。得られた調査記録から試みた中世集落のモデルは、今後に実施される周辺地域の調査で検証していただきたい。

〔参考文献〕

- 田崎博之 1996 「愛媛県の石器組成の変遷」『深耕開始期の石器組成』 国立歴史民族博物館資料調査報告書7
- 中野良一 1988 「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究IV』
- 宮本一夫編 1989 「鳴子・柳味遺跡の調査」 愛媛大学埋蔵文化財調査報告1
- 山崎博之編 1993 「柳味遺跡II 柳味遺跡2次調査報告ー」 愛媛大学埋蔵文化財調査報告IV
- 森田茂敏編 1993 「石井幼稚園遺跡」 松山市文化財調査報告書第45集
- 森田 茂 1995 「中世須志郷」「概説中世の上器・陶磁器」 中世土器研究会

写 真 図 版

写真図版例言

1. 遺構の撮影は、調査担当及び大西朋子がおこない、高所作業車を利用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパー・アンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール 28~85mm
フィルム	プラスXパン・ネオパンSS・エクタクロームEPP		

2. 遺物の撮影は、大西がおこなった。

使用機材：

カメラ	トヨ/ビューア-45G	レンズ	ジンマーS 240mm
ストロボ	コメット/C A-32・C B2400 (パンク使用)		
スタンド他	トヨ/無影撮影台・ウェイトスタンド101		
フィルム	プラスXパン		

3. 白黒写真的現像と焼き付けは、一部を除いて大西がおこなった。

使用機材：

引伸機	ラッキー-450MD	レンズ	エル・ニッコール135mm
	ラッキー-90MD		エル・ニッコール50mm
印画紙	インフォールドマルチグレードIVRC		
フィルム現像剤	コダックD-76・H C 110		

【参考】『埋文写真研究』Vol.1 ~ 9

(大西朋子)



1. 調査地遠景（南西上空より）



2. 調査前（南東より）



1. I 区完掘状況（南東より）



2. I 区西壁（南東より）



1. II区完堀状況（南東より）



2. SR201南北ベルト（西より）



1. SR201における中層・下層遺物出土状況（北より）



2. SR201完堀状況（北東より）



1. II区北半部における中世^紀の遺構完堀状況（南より）
期



2. 掘立204・炉（SK202）における土鍋出土状況（西より）



1. II区北西部掘立柱建物群検出状況（西より）



2. 掘立206・土坑（SK204）における大甕出土
状況（南より）



3. 掘立206を構成するSP251の根石検出状況
(北より)



1. 摂立202・SE201・SD201・SD202の配置（南東より）



2. SE201検出状況（南より）



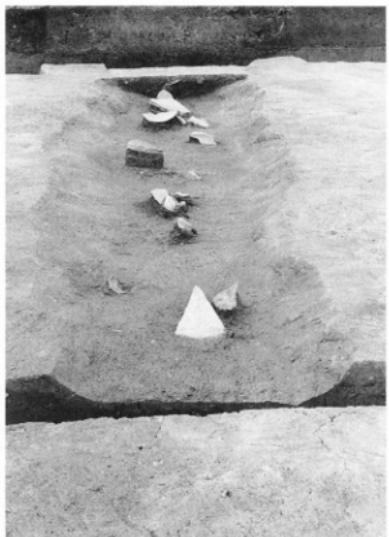
1. SE201完掘状況（南より）



2. SE201貿易陶磁器出土状況（西より）



3. SE201の構造（東より）



1. SD201遺物出土状況（東より）



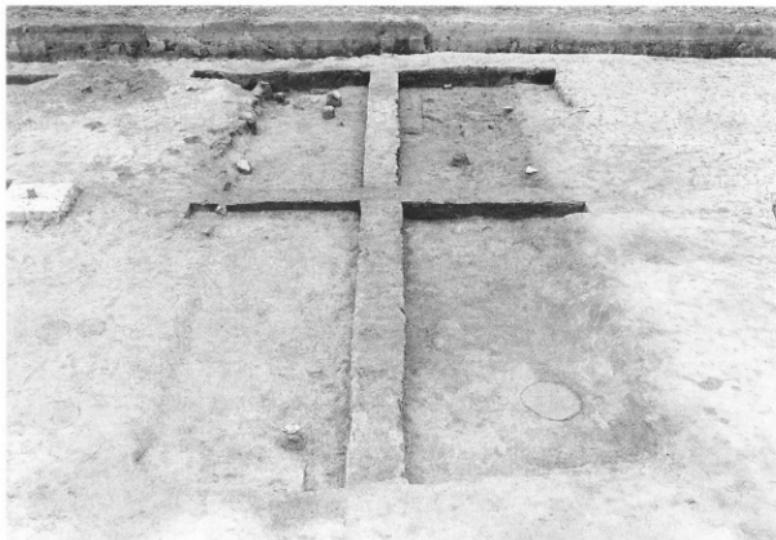
2. SD201遺物出土状況（南西より）



3. SD203遺物出土状況遠景（南西より）



4. SD203遺物出土状況近景（南より）



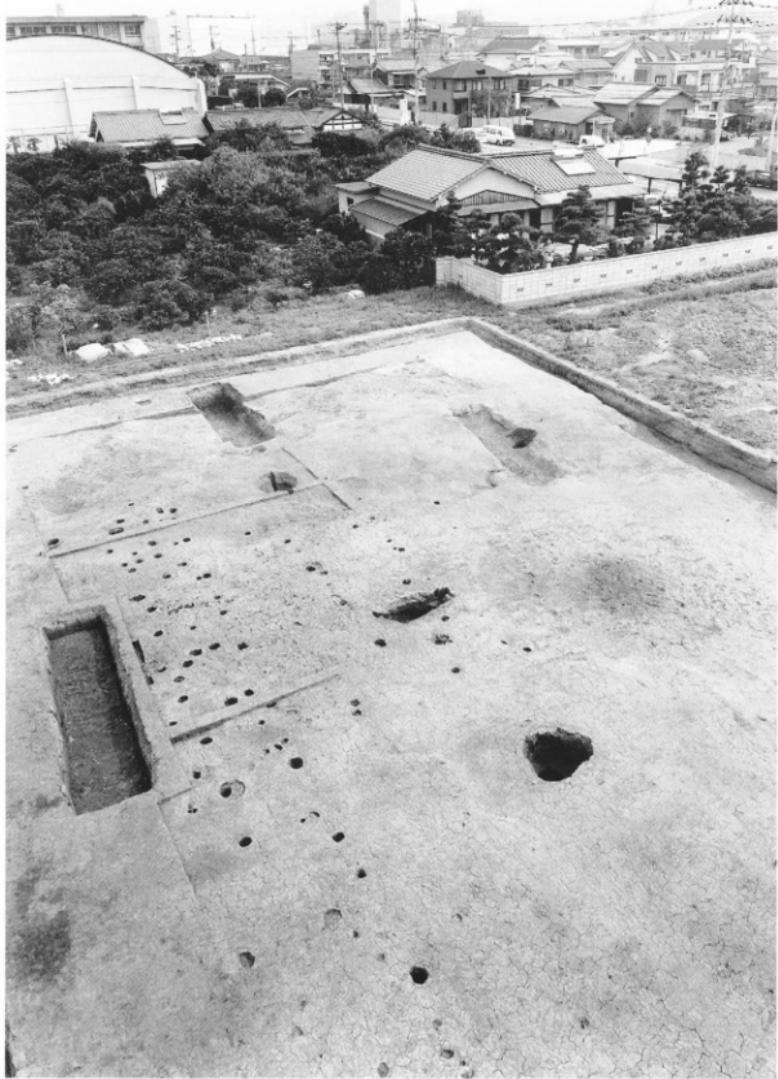
1. SX201 完掘状況（南より）



2. SP231 遺物出土状況（南東より）



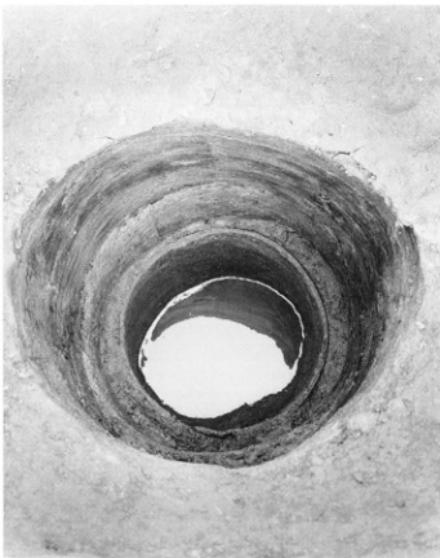
3. SP231 炭化材検出状況（南より）



1. III区完備状況（南西より）



1. SE301曲物出土状況（南より）



2. SE301 完掘状況（西より）



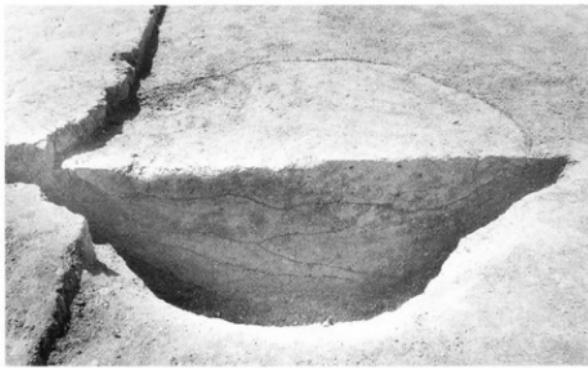
3. SE301断面土層（西より）



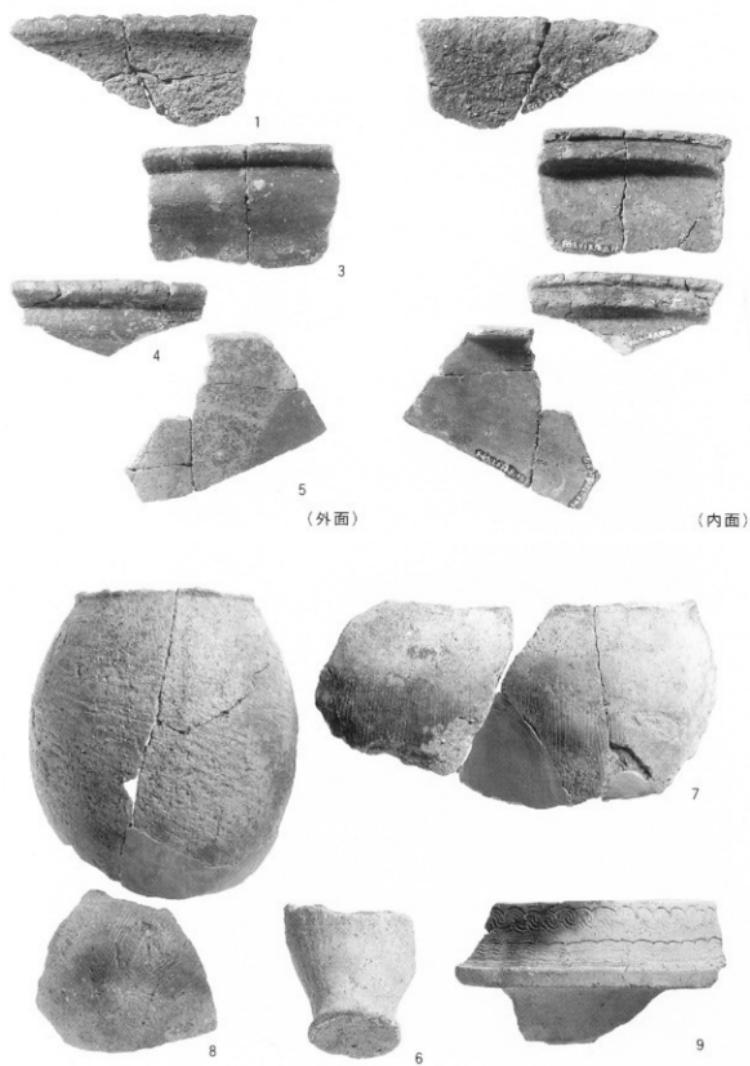
1. SE302完掘状況（西より）



2. SE303完掘状況（東より）



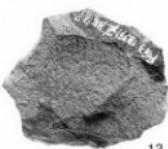
3. SE303断面土層（東より）



1. SR201 出土遺物①



11



12



13



14



15



16

17



18

1. SR201出土遺物② (11~13)・SR301出土遺物 (14~17)



19



22



21



20

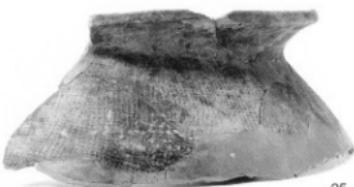
1. 握立204出土遺物 (19)・SK202出土遺物 (20)・握立205出土遺物 (21・22)



23



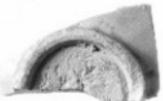
24



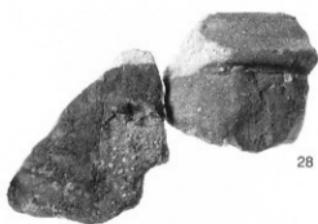
25



26



27



28



29

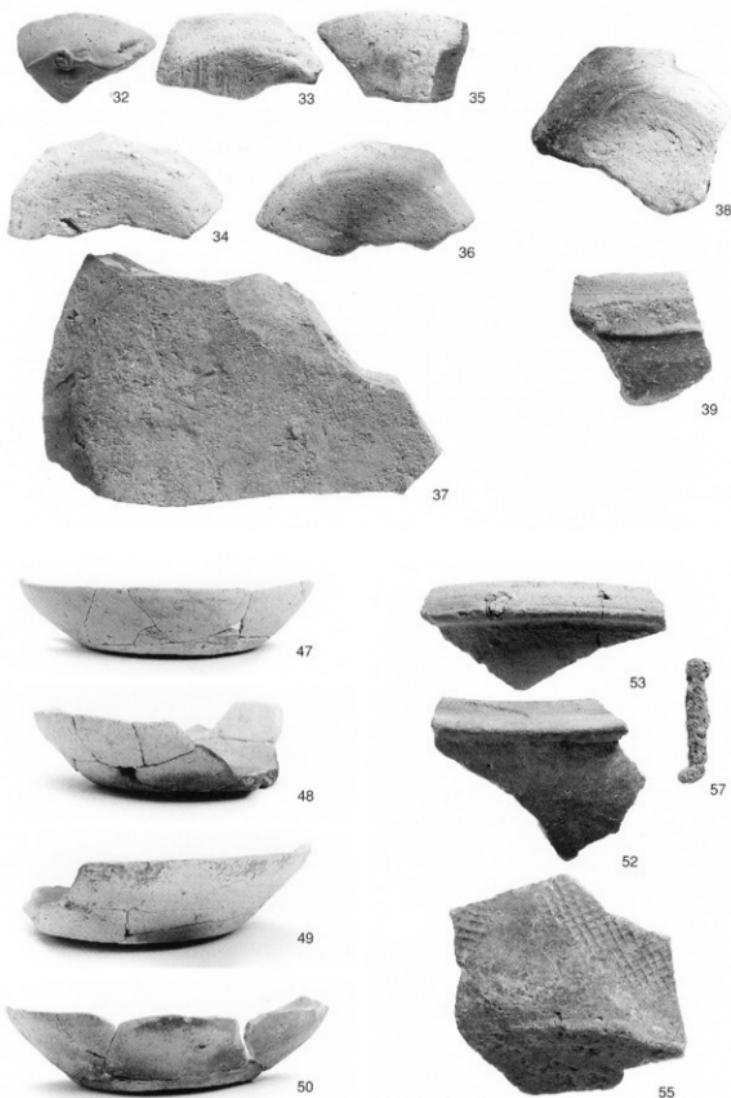


30

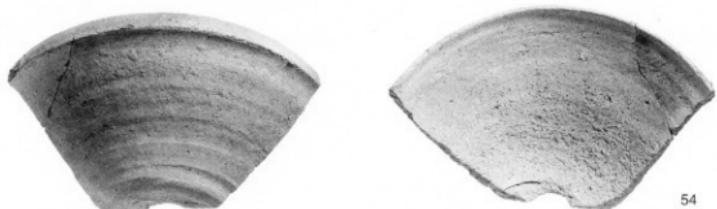


31

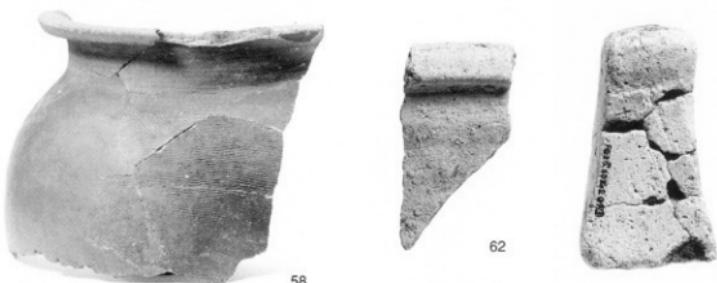
1. 掘立206出土遺物 (23)・SK204出土遺物 (24・25)・SE201出土遺物 (26~31)



1. SD201 出土遺物①



54



62

64



65



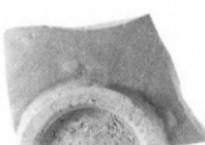
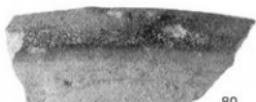
1. SD201出土遺物② (54・58)・SD202出土遺物 (62・64)・SD203出土遺物 (65・68)



75



84



1. SK201出土遺物 (71・72)・SK203出土遺物 (75)・SX201出土遺物 (76~85)



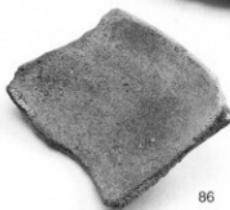
89



88



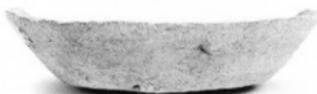
87



86



86



88



87



89

1. SP231 出土遺物



96



118



97

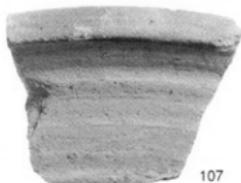


101

103



119



107



120



110

111



112



113



114

1. I区包含層出土遺物 (96)・II区包含層出土遺物 (97~114)・III区包含層出土遺物 (118~120)

報告書抄録

ふりがな	ふながたにいせき						
書名	船ヶ谷遺跡						
副書名	3次調査地						
巻次							
シリーズ名	松山市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第73集						
編著者名	加島次郎・山本健一・大西朋子						
編集機関	松山市教育委員会・鰐松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター						
所在地	市教委:〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL 089-948-6605 埋文:〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6 TEL 080-923-6363						
発行年月日	西暦 1999年9月30日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・道路番号	北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
ふながたにいせき 船ヶ谷3次調査地	まつやまじんようごくすき 松山市安城寺町	38201	33° 52' 05"	132° 44' 33"	19980401~ 19980831	5,730	店舗建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
船ヶ谷3次調査地	集落	縄文 弥生 中世	自然流路 掘立柱建物址 井戸、溝、樹列 土塁など	縄文土器、石器、 弥生土器、上部器、 須恵器、瓦器、貿易 陶磁器など	曲物を伴う中世の井戸		

松山市文化財調査報告書 第73集

船ヶ谷遺跡 - 3次調査地 -

平成11年9月30日 発行

編集	松山市教育委員会
	〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1
	TEL(089)948-6605
発行	財団法人 松山市生涯学習振興財團
	埋蔵文化財センター
	〒791-8032 松山市南森院町乙67番地6
	TEL(089)923-6363
印刷	原印刷株式会社
	〒791-8014 松山市山越4丁目8-15
	TEL(089)924-8823
